忍法雪月花

早乙女貢

徳間文庫

徳間文庫

早乙女 貢 作品

おれが天一坊《全二冊》
見習い同心獄門帳
残映
新選組銘々伝
八丈流人帖
忍法かげろう斬り《全三冊》
血刃街道
忍法秘巻
忍法無情
忍法系図
忍法女笛
忍法関ヶ原
忍法雪月花

カバーイラスト＝西のぼる
カバーデザイン＝池田雄一
カバー印刷＝真生印刷㈱

さ
7-16
500

忍法雪月花

早乙女 貢

徳間文庫

9784198903275

ISBN4-19-890327-1

C0193 P500E (0)

1910193005005

定価500円(本体485円)

関ヶ原合戦前夜。石田三成の本陣へ、軍用金を狙って乱波が侵入した。首領は女忍おふり。だが、甲賀の信楽闇夜斎に捕らえられ、おふりは三成の謀将・島左近の前に引きすえられた。おふりの美貌に、思わずその肌に触れた左近だったが、なぜかおふりを逃がした。そして開戦。惨敗した西軍にあって、左近は奮戦し、やがて豪雨の戦場に昏倒した。その左近を救いに、おふりが姿を見せた……。傑作時代長篇。

徳間文庫

忍法雪月花

早乙女 貢
1926年
ハルビン生まれ

徳間文庫

忍法雪月花

早乙女貢

徳間書店

忍法雪月花

早乙女貢

徳間文庫

徳間文庫

忍法雪月花

早乙女貢

徳間書店

目次

忍法狂いはだ　5
飛ぶ影　32
怪し火　50
くの一貝　67
女忍がえし　83
血とどろ　97
関ガ原非情　120
忍法死人甲（しにんかぶと）　144
慟哭（どうこく）の谷　172
麻羅卍（まらまんじ）　196
忍秘黄金虫　223
解説　清原康正　249

忍法狂いはだ

1

月が隠れた。皓々たる盈月をおおって黒雲が関ガ原の空にひろがってくると、待ちかねたように伊吹颪が粛殺の涼気で秋草をなぎ伏せて走った。

暗雲にこたえる黒い瘴気が山ひだの樹間から立ちのぼった。黒雲の片々が、黒い煙のうず巻くような影の群れ。夜気に生じる妖虫のたぐいとも見えた。勃然と夜鳥のようにこずえからこずえへ飛び移り、渓流にのぞむ大蟇岩の上に音もなく寄り集まったのである。

いずれも、双眸ばかりを夜陰に光らした影。しそ染めか、ぬめり朱か、夜のやみにまぎれる

黒装束に身を包んだやからばかりおよそ十四、五人。
大蟇岩の上に、ぐるりと円を成してすわる。
〈……〉
虫のすだきにも似た声である。だれの口から発したともわからぬ。声というにはしかし、奇妙であった。擬音か。
〈……〉
こだまのかえるかのように、同じ声がした。岩の下からである。
黒い異形の群れは、目に見えぬその影に一揖した。
〈参じました〉
大蟇岩の中央に忽然と影が生じた。一塊の煙のかたまりがふくらむように、影はみるみる赤子ほどになり、童女の大きさになり、並みの人型を成した。
〈――用意は？〉
その影は、うつろなくぐもった声でいった。
目ばかりが夜光虫のように光り、黒装束が軽捷に身を包んでいるだけで、性別年齢の見分けはつかぬ。
〈すべて整ってござる〉
だれかが答えた。

〈火ノ具は？〉
〈これに〉
〈飛び刃は？〉
〈手六体八に付してござる〉
〈水中変幻忘れまい〉
〈おう！〉
これは一同が和した。
〈して、こよいの陣場は？〉
別の声が聞いた。
〈島左近勝猛〉
頭領のことばに、それまで影のように静かだった連中が、はじめて、動揺を見せた。
それは、声とはいえないものだったが、いかなる場合でも冷静沈着をむねとせざるべからざる忍びノ者が、呼気を荒くしたことで、動揺はおおうべくもなかった。
じろりと青く光る頭領の双眸が、これを見まわして、
〈なんとした？　鬼左近とか、猛勇のうわさに恐れをなしてかえ〉
〈いや、さような……〉
〈なれば、迷いはないはず〉

〈は……〉

〈左近の陣場は笹尾山南麓、大阪よりひそかに下賜の軍用金は、石田三成のもとにはあらず、島左近が守りおること判明したれば〉

〈たしかに？〉

〈たしかなはず、卍の目に誤りがなければ〉

うなりを漏らして小がらな男が目をあげた。

〈この目で、しかと見申したわい〉

〈ならばまちがいあるまい〉

一同の納得は、集団行動に不可欠であった。いちにんの懐疑も忿懣も、ただちに全体に危機をもたらす。

頭領は、つと、空をふり仰いだ。

紗を通したように、盈月が淡くあせた姿で雲のかなたに見えた。雲は濃淡だちのまま流れていく。月はまもなくその輝きを見せるだろう。

〈時刻が移る〉

と、かれはいった。

〈子の刻が近い……先陣暮目に乗じるには急がねば〉

軽やかに腰をあげる。

その姿を木ノ間越しに望遠して、

「はて、あのしなやかさは……」

と、つぶやいた者がある。

ふくろうノ目。さっきから、岩上の一部始終を見守っていたのである。

「おんな……女忍と見えたが……」

夜目遠目を嘆じることのないふくろうさながらの目も、ときに見誤りがある。相手が忍者の場合、軽々には看破できぬ。剽悍軽捷を尊ぶゆえに、忍びには小がらな者が多い。五体のしなやかさを評して、〝鞣皮のむちのごとくならざるべからず〟と忍法秘伝にある。かつて忍者ぎらいの織田信長が、伊賀攻略のために、大和伊勢国ざかいの村々を、法師大名筒井順慶に調べさせたことがある。順慶の密令を受けた某は、麹買いにやつして山峡の村を回った。米酢には麹を欠かせぬ。酢の使用量の極端な差が、忍者の村を暴露したのである。幼時より常人の五倍は酢をとることによって、俊敏、ねこかひょうのような柔軟な四肢を養うとされている。

その岩上の群れを支配する頭領が、小がらで軽捷とはいえ、女忍と断定するには、尚早だといわざるをえない。

ふくろうノ目があるとは知らぬげに、頭領は、

〈陣形は鋒矢流れ〉

さっと岩上から身をおどらせた。

2

水音はしなかった。わずかに白い飛沫があがっただけである。

つづいてふたり。岩はだをするりとすべりおりた。

音もなく、しぶきもなく、ふたりの影は川中へ吸いこまれている。渓流は絶えることのない競噪的な声をほとばしらせていたが、岩の下は、とろりとよどんだ淵をなしている。ふたりを飲みこんだあとには、わずかに波紋をひろげるのみ。その輪にはいるように、三人が沈んだ。さらに四人が飲みこまれたあと、残りぜんぶ——五人がすぽりと吸いこまれた。

まるで岩上に十五人の黒装束のつどいがあったことがうそのように、その行動は恐るべき統制と熟達した潜泳法によって一糸の乱れもなかった。

伊吹颪がはげしく木ノ葉を舞わせた。葉片は生きもののごとく、乱舞して岩上にはらはらと落ちかかる。

と、その葉におおわれた影が、ひらりと、舞いおりた。

流れの早い雲のすきまから月が顔をだし、さーっと青い光であたりを照らしだしたなかに、渋がき染めの色が昆虫かなんぞのように浮き上がった。

降り立つと同時にぴたりと岩はだに伏せたのは、思いがけなく月が出たためである。

かめのように首をのばして、川面をのぞいた。

十五人の忍者を飲みこんだ淵は、けろりとして、波紋をひろげている。一片の木ノ葉でも、みずすましでも波紋はひろがる。なにくわぬ顔であった。

水中応変、流れに慣れた忍者たちは、そのわずかの間に町余も下っているかもしれぬ。

かきいろ装束が一転、岩にすべりおりようとしたせつな、ぱしっ、水がはねた。

水面からはねとんだ奇妙なものが、男の両眼に、べたっとはりついたのである。

「げえっ！」

思わず顔をおおった。

その手の下でぶきみにぬるりとしたものがつぶれた。それは二匹のかじかだった。

かじかは、はりついた拍子に、おのれを殺して眼球の明を失わしめたのである。愕然としてのけぞった男のあごに、ぐわっと衝撃が走った。あおむけに倒れながら、腰の忍び刀を抜き討ったのは、反射的な動作にすぎない。刃はむなしく湿った夜気をないだけである。

「ぬう……だ、だれだ」

〈ふふふ、冥途のみやげに聞きたいのかえ〉

「やっ、うぬは……？」

〈おまえが見ていた影……〉

忍者独特の風音は、常人には区別もつかぬが、忍の修行をなした者の耳はこれを聞きわける。

これは小がらな頭領にほかならなかった。

「ぬう!!　知っていたのか！」

〈ふふふふ、なんじは見まじきものを見た。かじかを食うて地獄へおちよ〉

すっと、ぬれたからだが寄ってきた。そのけはいを、感じるや、白刃を振った。一跳するだけの気力は残っていたのである。が、その一刀も、夜気にむなしく流れ、さらに、強い一撃をひじに受けて、頭上へはねとばされていた。

かれのすでに盲いた眼は、おのれの刃の行くえを見定めることもできぬ。

瞬後に飛びさがって、その両手から手裏剣の連打が走る——

と、それはしかし、わずかに数打を投げたにすぎなかった。

ななめ上の空からすさまじい勢いで落下してきた一刀が、天誅剣のようにぐさりと突き刺さったのだ。右肩から胸腔へ——一刀で致命傷を受けたことは、生命力の強い忍びノ身が、手にした手裏剣を投げあえず、岩に伏してしまったことで知れた。

刃は、かれ自身のものだったのである。はね飛ばされた刃。虚空たかく一転し、ついに、凶刃となってかれを襲ってきたのだ。

しかし、まだ息はあった。必死に、手をついて顔をあげた。

盲いた眼で、なお、卓抜な忍者を見ようとするように、首をねじまげ、

「み、みごとじゃ……」

と、うめいた。

「い、伊賀だな……」

〈……〉

「い、伊賀忍法、さ、《さかまき剣》……と、見たが。伊賀は、服部か、百地か？」

〈——死ぬる身で、なんの詮索〉

非情は忍者の常としても、この頭領のことばは冷酷にすぎた。かき色のずきんをむしりとって、

〈詮索はこちらでする。われは甲賀だな〉

あきらめきった中年の男の顔は、ずぼしを突かれて動揺も見せず、

「ま、負けたゆえ、死ぬる……やむをえぬわい……痛う！」

〈……〉

「し、死にみやげじゃ、し、知りたい」

さすがに、臨終の願いに、氷のような心も動いたようである。

〈服部でも百地でもない〉

「……」

〈伊賀四十九流、いずれにも属さぬ。さらには外術を〉

「おう！」

それでこそ、と、敗れたおのれにも納得がいったように、じわりと、削げたほおに笑みが浮かんで、

「やはり……いま一つ」

〈……〉

「おぬしは……くノ一……」

〈ぬッ!?〉

「ははは、見たぞ、盲いた目玉でも見えるわ、くノ一、くノ一……ははは、ははは、ははは……」

笑い声が、しだいにしりすぼみに、かぼそくなったと思うと、はたりと、岩におもてを打ちつけるように突っ伏した。それきりであった。

甲賀ノ者とは、渋がき染めの忍び装束でわかる。表かき、裏ねずみの合わせ布を甲賀ノ者はよく用いる。月の夜はかき色が夜に溶けるといわれる。

月下に、その甲賀者のおもては、法悦ともいえる表情になっていた。ワザに敗れたりとはいえ、この小がらな頭領を、女身と見破ったことの満足であろう。

女忍のほうは、しかし、勝って悔いを感じたのである。

「縁起の悪い……」

時が時なのだ。はげしく舌打ちをきかせると、忍び刀を抜いて、甲賀者の顔をタテ、ヨコ一

太刀ずつ、十字に切った。いや、十字と見えたが、その線のあと先が、逆方向へはねているのは——卍。

すなわち、勝ちいくさを祈る血卍。

女忍は、それで気がすんだように、岩からすべりおりた。

先には甲賀者を安心させておびきよせるための水飛沫であったろうか。女忍を飲んだ淵はとろりとして波立たぬ。

岩上の悲惨な死屍を隠すように、月はふたたび雲海にはいった。

慶長五年九月十四日の夜もあますところわずか。伊吹山に発した相川の流れは、石田三成、島左近の陣地の側面を洗って関ガ原を灌漑し、山麓をめぐっている。奔流にもてあそばれる流れ木が、島左近の水ノ手備えの鳴子を鳴らせるころ、子ノ刻になるはずであった。

3

石田三成の陣営はすでに勝利に酔ったようにざわめいていた——

はじめ西軍のおもわくは決戦場を美濃平野としていた。西の大垣城、東の岐阜城をもって両陣となし、西上する東軍を二分し、相呼応して討てば、容易に撃破できると信じていた。ただに二分されるだけではない。両城を包囲の態勢をとれば、逆に両城の間に袋包みされる結果と

なり、攻撃軍すなわち、峡谷のねずみとなる。

岐阜城のあるじは織田中納言秀信。東西要衝の地だ。かつて尾張に興った織田信長が、斎藤氏を攻略して、天下布武の拠点としたのも、この要地のゆえである。

さきに伏見をおとし、大津を攻略して東漸するに際し、石田三成の謀将島左近は大谷刑部吉継と評定し、

「岐阜城を敵に取られては、美濃決戦に不利たるべし、織田黄門を手につけざるべからず」

として、強引に味方につけた。

秀信は勇将ではない。だいいち、若い。いまだ十九歳。祖父の覇業と名門の栄光で中納言に叙されて大名づらをしているが、しりの青さがぬけきれない。

「太閤恩顧をお忘れなくば、われらに味方あらせたまえ」

ただちに家臣に令し、領内地頭に命じて徳川軍の西上の道々に鹿柴逆茂木など防御をほどこす——いくさじたくにはいった。もとより、家臣たちにも反対がなかったわけではない。ことに、老臣の木造具康は、伊勢国司北畠具教の重臣だっただけに目がある。

「もともと太閤は右大臣家の家来、下賤より成り上がりしもの。お家と徳川は義兄弟のむつみこそ候。いわんや、こたびのいくさは、豊家とは無縁。石田治部少が天下を望んで徳川殿にそむかんとするもの、ゆめ、道を誤られて悔いを千載に残したもうべからず」

面をおかしていさめられると、秀信はまた迷ってらちがあかぬ。

「かかる場合には、京師なる前田法印こそ事情に明なるべし、玄以どのの所存を聴取するこそ肝要と存じ候」

前田民部卿法印玄以は豊臣家五奉行のひとり、半夢斎と号し、のちに徳善院と称した。本能寺の変において信長弑され、その子信忠も死するや、三法師丸といった幼い秀信を擁して岐阜にのがれ、清洲へ走ったのである。前田玄以なくば秀信の今日はないといってもよい。

はじめ信長の次子信雄の信任を得て洛中洛外の庶政をつかさどったが、秀吉の代になってもその地位を守り、さらに五奉行のひとりにまでのし上がった。

巧妙な処世術は、あるいは石田三成より上といえるかもしれない。

このたびのいくさでも、大阪に近づき三成と昵懇を装いながら、戦線に加わらず、「京師を奪われては、背後を突かれる恐れあり」

として、京にあった。せがれの茂勝をして丹後田辺城攻めに加わらせたのもふたまた掛けるためであり、三成に疑惑をいだかせぬ巧妙さだ。上杉景勝、小西行長らと三成の徳川氏討伐の謀議には参加しながら、連判書に署名花押していないのも、後日に証拠を残さぬ慎重さである。

木造具康が玄以の名を持ち出したのも、かれの性格を熟知していたからにほかならぬ。徳川の勢力を軽んじるような単純な男ではない。具康の眼はそこまで見ぬけなかったが、玄以は、三成の挙兵をいち早く家康に通報していたのである。

単騎、京に潜入した具康を、ひそかに迎えた玄以は、
「東軍に与力するこそ、お家を全うする道と存ずる」
と、勧めた。本心を他に漏らす玄以ではないが、織田家と秀信のことは特別だったのであろう。あるいは、これも布石の一つと計算したのかもしれない。
具康は急遽はせかえった。街道はすでに西軍が充満していたが、岐阜は味方に応じているので、知人に会ってもさえぎられない。内心ほくそえんだ具康だったが、大垣を過ぎるにつれて不安が濃くなった。打倒徳川の旗印と、士気の鼓吹が、足軽小者のはしばしにいたるまで浸透しすぎていたからである。
具康の顔を見るなり、秀信はいった。
「ご苦労。玄以の所存いずれにあろうとも、余は徳川を討つぞ」
動揺する若大将の心を決するため、三成は策を弄した。
甲賀の忍びノ者をもって、家康の使者と偽り、毒を勧めて屠らん体を装ったのである。これをはばんだ女忍こそ三成のもとよりつかわされし者と名のられては、若い秀信が、憎き家康、と激昂したのも無理はない。
かくて、具康の誠忠も徒労に帰した。岐阜城は徳川軍をはばむ西軍の出城と化したのである。だが、ただに憎しみにかられた若大将の采配に完璧はもとめられない。いくさの勝敗は必ずしも士気の有無とは合致しない。

「岐阜城危うし！」
の報が、雨のなかにくしの歯を引くごとく大垣城に届いた。
「岐阜をぬかれることあっては孤塁の厄にあうべし、急ぎ援軍を送らねば」
と、島左近が立ったが、
「その要はあるまい」三成が制して、「岐阜城は天下の堅城、難攻不落じゃ、当城の勢力を半減すれば、手薄を突かれようぞ」
「敵勢を二分するの策こそあり、攻を変じて守とせしむるの策は、ご承引あったはず」
左近が激するのは珍しい。性沈着、戦国武将の欠点たる単純粗暴、死を省みぬ、直情径行の性向をこの武将は愚と知っている。興奮がおのれの敵だと知ることは、当時のようなまぐさい乱世では容易ならざる悟りである。茶と禅が左近を並みいる荒大名から一段上の人物にしていた。
その左近が、激したのだ。三成も、いささか驚いたが、伏見攻め以来、天下人となったつもりの三成だ。むっとして、
「よも落城はあるまい……」
その煮えきらない態度が、かすかに左近の胸を暗くおおった。

4

三成を説き伏せて島左近が手勢を率いて雨中に進発したときは、すでに時期を逸していたのである。岐阜城攻略のヤマが見えるころ、藤堂高虎、黒田長政、田中吉政らの精鋭が、大垣に備えて陣張りしてしまった。だけではない。かれらは岐阜攻めに遅れている。無傷だったし、同輩に先を越された無念さから、

「大垣の後詰めなきうえは、こちらより進んで合渡の渡しを押し渡り赤坂を収めん」

一決して軍を進めた。

高虎、吉政に伍して、黒田長政の代わりに重臣たる後藤又兵衛基次が士卒八百余を率いて進発し、長政は岐阜攻めの手に加わった。

早朝から小雨だったが、いよいよ激しくなって、長良川の流れは水かさを増し、ごうごうとうなり岸を打ち、岩をかんで奔走していた。合渡の渡しは、いま河渡と書く。岐阜市街の北辺を洗い急カーブして西郊をめぐり南下する。

勢いこんだものの、激流におびえて馬はしりごみするし、舟はあたりにない。

途方にくれていると、どこかで笑う者があった。

修羅のいくさも知らぬ顔に、大樹の下に雨をさけてゆうぜんと一瓢をかたむけていた雲水

である。

後藤又兵衛は、ぎろりと大きな眼を光らして、

「こりゃ、われらの難儀を見ての高笑い、いかなる存念あってか、聞こう」

乱波透波のたぐいが潜入していることは疑いない。不審というだけで切り捨てるのも乱世の常識だ。

年齢の見当もつかぬ、汚れた雲水である。ひげが濃い。高笑いの歯も欠けて、黄いろい犬歯がくちびるを傷つけるほどむきだしている。異形異相の雲水。

「ははは、笑いたいから笑うたまでのことよ」

「なに！」

「思うてもごろうじ、われらに見えて、おてまえがたに見えねばおかしくもなる。浅瀬を捜してござるのじゃろ」

「いかにも、われに見えるとか」

滔々たる濁流である。いかなる炯眼でも見えようはずがない。

「見えずしてなんとしよう」

「……」

「人間は万物の霊長、眼あれば、すべてが見えるわな、それ、そこに、そこが浅瀬じゃがの」

と、指さしたあたり——

何も見えぬ。濁流の色合いが、変わっているわけではない。
「坊主！」
基次は大喝した。
「われは治部少が乱波であろう！」
すわっと、足軽たちが刀をとりなおした。鍛えられた連中である。四尺近い打ち刀を振りかぶったやつもある。
呼吸の差ひとつで、雲水は乱刃を浴びてずたずたに切り裂かれるところなのに、平然と、これを見まわして、
「やめさっしゃれ」
声はあくまで平静だ。
「なるほど、お疑いも無理はない」
「白状するか、坊主」
「白状のしようがないわな」
「なに！　こやつしらばっくれおって」
「ははは、わかったわかった、ご辺はこう思うてであろう、深みを浅瀬とあざむき、川流れにするつもりかと」
「違うと申すかっ」

「違うな」
にやりと片ほおをゆがめて、雲水は腰をあげた。
「あざむくのではない証拠に、まんず、愚拙が先導つかまつろう」
瓢をだいじそうに腰にさげて、錫杖を鳴らしながら土手をおりていく。
半信半疑ながら、足軽たちもあとにつづく。
土手をおりると、灰いろの牙をむいた奔流のしぶきが、ぱっと面を打つ。
これにも平然として、雲水はじゃぶじゃぶ川中へ踏みこんでいくではないか。
なるほど、濁流は激しいが、雲水のひざの上をぬらすくらいだ。黒田勢はどよめいた。われがちにとあとにつづいた。といっても、槍、薙刀を持った者が、さきに立ったのは、足場をさぐっていくからだ。
現在の地形とは長良川もこのあたりずいぶんと変わっている。そのころはもっと北方を流れていて、川幅も広かった。
浅瀬を無事に渡り終えた雲水は、
「ほれ、疑いが晴れてかい」
と、木陰に腰をおろして、瓢をかたむけて、ごくごくとうまそうに飲んでいる。
騎馬三百、足軽五百。つつがなく渡り終えるのを見とどけた基次は、
「かたじけないぞ、ご坊」

「ひひ、坊主がご坊になったけ」
「後藤基次が、礼を申しているのだ」
腰の皮きんちゃくからざくりとつかみ出した丁銀をひざ前に投げた。二百匁はあろうか。
「礼銀じゃ」
「もらおう」
すんなりとこれは受けた。
「後藤又兵衛基次、強そうだが、おてまえ、相がわりいな」
「なにを申す」
「不運の相じゃな。晩年がよろしくない。ま、せいぜい武功をあらわすがよろしかろ」
いくさのさなかだというのに、不吉なことをいう。
「たわけめ、武士はあす知らぬこそ誉れじゃわ」
「それもよろしかろ」
雲水はうなずくと、こんどは浅瀬を渡りはじめた。岐阜城下へ引きかえすのか。
「くそ坊主め」
舌打ちして、基次は兵をまとめようとし、もう一度振りかえってみた。
「あっ……!?」
雲水のかげは消えていた。

真昼である。雨は激しく、対岸をおぼろにして降りつづいていたが、四、五間のうち視界を閉ざすほどではない。
雲水の姿は、川中に二、三間歩きだしたと思うと、忽然として消えたのである。
「殿……」
家人の中津兵馬が人数調べからもどってきて、
「いちにんの落伍もありませぬ」
「――消えた」
「え？」
「いまの坊主よ、消えたわ」
と、川中へあごをしゃくった。
「え！　あの僧が、浅瀬を教えたくせに流されたので？」
「たぶん、な……」
それ以外には考えようがなかったのである。

5

後藤基次の軍勢が浅瀬を渡ったと知ると、川の上下を右往左往していた吉政と高虎の軍も、

向こう岸に蝟集してきて呼ばわっている。

足軽数人を道案内に残して、基次は軍を進めようとした。

雨はやや勢いを弱め、灰いろの壁がしだいに薄れていく。前方の森のかげから、突然、黒い煙の流れ出るように、異様な影が浮かび上がった。耳を聾する濁流と豪雨で、ほかの音が聞こえなかったのも、基次の不運といえる。

「あ、あれはなんだ？」

がくぜんとして先鋒は目を凝らした。

悪夢でも見ているようであった。黒いその煙のかたまりのようなものは、みるみる幅をひろげ、おびただしいひろがりとなって雨しぶきの地表をおおって、基次たちの前面に流れてくるではないか。

数人が地に伏せた。草はぬれている。かきわけるようにして、耳をつけた。

どうどうと地鳴りが聞こえてくる。しだいにそれは高く、大きく、鼓膜をけやぶるように響いてきた。

「馬だ！」

「て、敵だ！」

ぎょうてんしてはね起きるのと、どっと雨しぶきのかなたで喊声があがるのが同時だった。たちまち混乱が起こった。まさか、敵勢がそこまで来ているとは夢想だにしていなかったのである。後詰めのないのを確かめて、先制攻撃をかけようとしたのだ。敵の伏兵がおるのだったら——少なくともそのけはいがあったら、こうした拙劣な渡河はせぬ。

「さては、あの坊主！」

乱波だったのか。

ちらと基次の胸を悔いがかすめた。が、それは一瞬にすぎない。戦場往来の強者は、あらゆる状況下で、いかなる思想をも、目前の敵を邀撃するという一点に絞ることにたけている。全勢力を武士の最も生きがいとする戦いに注ぐ。そのかぎりにおいては貪婪であり、教養や道徳のすべては霧散する。頭の切り替えは、ある意味では、人間からけものへ——獰猛な野獣への転身だった。

どろをけって騎馬が突進してきた。旗指し物も、兜の光も、具足の威しの色めも、雨とどろにまみれて、定かではなかった。閃々たる白刃さえ黒く見えた。血しぶきに血のいろを見きわめるのは、おのれのからだから吹きだしたときくらいであった。すさまじい混乱は、兵法も軍陣も、大将も下人もない、階級や、年齢や、敵味方の区別さえ剝奪したような雨中の激突であった。

「切れ！　切れ！　切れ！」

味方の士卒を采配するひまを、その突然の敵は許さなかったのである。その敵——西軍にはちがいなかったが、かれら自身にしてもこの森かげからの突進は予定の行動ではないらしかっ

た。騎馬武者と足軽の弓、槍組の駆け引きがまるきりなかった。かれらにしても、まさか、東軍が濁流を渡ってきていたとは、目前におびただしい騎馬武者を見るまでは気がつかなかったのであろう。

人数はやや敵方がまさっているようであった。が、岐阜攻めの勝利が見えていただけでも、東軍の士気は奮いたっている。

日ごろの後藤基次の鍛えかたも、こうしたとっさの際に生きてくるのであろう。

「やれ、ひるむな」

基次は、小薙刀を軽々と振りまわしながら群がり寄る敵兵をなぎ倒し、たたき伏せて、怒号している。

がっと、旗指し物が折れた。背後から打ち刀をたたきつけたやつがいるのだ。混乱の中だったが、大半月の指し物が泥中におちるのが見えた。

「くそ！」

振りかえりざまにないだ偃月なりの刃が、そやつの首の半ばまで切りこんだのが、判然と手ごたえあった。

真鹿毛がはねあがり、どうっと落馬する。その基次の手並みが、敵の目にも映じたのか、

「大将と見受けたり、見参！」

若々しい声が、側面でした。

連銭葦毛を腰で御して太刀を振りかぶった若侍が突進してくる。

「名のれ、若いの」

「島左近勝猛が次男友勝、若輩と侮ってほえづらかくまい」

「後藤又兵衛と知ってか」

言下に血ぬれた偃月刀が友勝のひじをかすめている。どっと、たたきつけるような無暴の突進だったのだ。友勝は身をひねったが、重心が狂って、もんどりうって鞍上から転落した。

「もろうた！　青首」

又兵衛基次の偃月刀が雨をさいて弧を描いた。泥中からすくいあげるような片手切りである。

かッ、と刃が泣いた。友勝が必死に下から払いあげた一刀。基次は莞爾として、

「みごとだ。いま一度！」

たっと馬をおどらしながらの二撃。友勝の刃がはねとんだ。

どどっとどろをけり上げて駆け寄った漆黒の騎馬がある。兜も具足も、黒一色の武将だった。

「島左近なり、若輩に代わって相手をいたす」

大音声に叫んで、大身の槍をなぐりこんできた。

「きさまか！」

又兵衛の声は、喜びをはしらせていた。

はじめて合う顔ではない。双方とも、世に知られた武名。ことばこそ交えたことはないが、何度か顔は見合わしている。

武辺者にとって、おのれにまさるとも劣らない武士に戦場でまみえるほど喜びはない。

だが、雨中に二間の近さで、はげしい視線が、がっきとからんだのが最後だった。

刃の一合も交えぬうちに、どどっと双方の家来たちが、間に割ってきたのである。

混乱もある。雨のせいもある。が、あるじを思う家臣たちにしてみれば、大将の功名は、首級よりも軍の統率にあることを認識するゆえのじゃま入れであった。左近の老臣杉江勘兵衛などは、

「タカが、黒田の足軽大将、殿のおん手をわずらわすまでもござらん」

と、わめいて、又兵衛基次に切りかかっている。

島左近と後藤の戦いはこれまでだった。浅瀬を渡った藤堂高虎の軍勢が右から、田中兵部大輔吉政の軍勢は左から、比翼攻めの手をひろげて、島左近の二千余騎に打ってかかったのである。

西軍のほうでも島左近の出撃に遅れじと、薩摩の勇将島津維新義弘が二間柄の大薙刀をふるって駆けつけたから、混乱はさらに輪をかけた。

乱陣もこうなっては、収拾がつかぬ。味方どうしの相打ちの恐れが少なくないからである。

三成、行長も沢渡村まで出てきていたから、引き陣の法螺をもって島と島津の軍勢を退かしめた。

東軍にとっても、混乱をたてなおすにはありがたいひきどきだった。

飛ぶ影

1

岐阜城陥落が第一の齟齬だった。岐阜大垣両砦をもって徳川軍殲滅の策は、一角がぬけると、音をたててくずれた。大垣城に引きつけて討つ、という次善の策は、福島、黒田軍によって裏切られた。

かれらは、豪雨の中で軍をたてなおすと、大垣を守るために南下した島左近と墨俣に走った島津軍を無視して、一路、赤坂へ突進したのである。

いくさの常道として、城の攻防によって決着をつける。島左近のこの献策は、あまりに正常にすぎたかもしれなかった。

黒田、藤堂がはじめに赤坂を奪ったのは、大垣を包囲するための行動だったのである。

ゆうゆうと西上してきた徳川家康が、清洲において最後的戦略をめぐらし、赤坂岡山によったという知らせがはいったのが、けさ。東軍の動きは、軍勢を二分して、一部が大垣を攻め、くぎづけにする一方、徳川家康の主勢は、そのまま、西上のけはい、というのである。

「しまった、出し抜かれるぞ」

家康のねらいは京を制し、大阪を奪って秀頼と淀君を擁し、詔勅を仰いで、三成とその一党を反逆者ときめつけるにあった。

乱世で武士一辺倒の時代でも、〝勅諚〟という一言はやはり重みを持つ。天下分けめをもくろむ三成が、豊家のためと号し、秀頼の名をかつぎだしているのも、世間体のためだ。

家康の動向は、そのうわてをいくものだったのである。

「かくなったうえは、関ガ原において決戦しかるべし」

左近がいった。

関ガ原は美濃ノ国の西端、北方に伊吹山系がすそをひろげ、南方には伊勢、伊賀、甲賀をくぎる鈴鹿山脈がその北端をおとした矩形の盆地である。

およそ東西一里、南北半里。中仙道が中央を東西につらぬき、西は今須峠、その北方に城山、南方に松尾山。近江の北国街道わき道とされる長浜に至る道は伊勢桑名に至り、関ガ原以南は伊勢街道と呼ばれるが、牧田村をもって関ガ原南関とし、その東に南宮山が千二百尺の山塊をそびえさせている。

北国脇街道と中仙道の間に天満山と呼ぶ小丘が突兀と浮かび、池寺池を横たえて、小関の笹

尾山と対している。これは伊吹の支峰相川山の東南端の丘陵だ。いずれも東南に関ガ原盆地一円を俯瞰する要地で、軍学では〝陣山〟と称する地形になる。

島左近が着目したのは、この山であった。

もともと小関という地名が物語っているように、不破ノ関を本関として、北国往来の間道を扼する裏関の址である。山が街道に迫り、一望にして、東南からの攻撃を頭上から粉砕できる。

南宮山には、すでに毛利秀元、吉川広家、安国寺恵瓊、長曾我部盛親、毛利勝永、長束正家らが、伊勢攻略の勢いをかって北上し、大垣の後詰めとして三万余布陣していた。

岐阜が落城し、赤坂まで東軍が進撃してきたのを知りながら、この南宮山の諸大名が大軍を遊ばせて西方より攻めようともせず、二十日余を無為に過ごしたことに、石田三成は、まず、疑惑と、そしておのれの支配力を省みるべきであったかもしれない。

三成、左近らの戦意に比べて、あまりに士気が違いすぎたことを。

三成はおのれの人徳のなさをまるきり知らないわけではなかった。総帥には毛利元就の嫡孫輝元をもってし、秀頼の出馬も確定していた。

毛利中納言輝元は中国十州のあるじ百二十万五千石、副将格には宇喜多中納言秀家、これも五十七万石の大大名だ。

その秀頼と輝元の着到が遅れたために、南宮山では行動に出ようとせず、いたずらに、徳川家康の赤坂進出を許してしまったのだ。

だが、左近は関ガ原においての決戦に五分の望みをかけていた。

「南宮山、松尾山、天満山、笹尾山と、南西の山稜に連袂布陣すれば、街道を西上する徳川方を包み討ちにし、半日でもって勝利をうべし」

と。

すなわち、十四日夕刻、西軍は大垣城から無血撤退を決行することになったのである。

石田三成の女婿福原長尭以下数千をとどめてしんがりとなして、島津、小西、宇喜多の軍兵総勢四万余、豪雨をついて大垣城を出た。

2

豪雨は秋夜のやみをさらに深め、秋虫の声もたたきのめして、ただ、こずえにうなる風と雨の声、人馬の泥濘をける音だけがやみ夜の地表を動かしていた。

四万の軍勢は、馬の口を縛り、枚を含み、たいまつを消して粛々と進んだ。およそ四里。すでにして敗軍の姿だ。戦略とはいえ、西上する東軍を邀撃する手はずのことごとくがはずれ、四里を退いて地ノ理を得るとあっては気勢があがらない。大日本戦史には、

——全身ことごとく沾濡し肌膚震慄するに至り艱苦ことにはなはだし——

と、ある。

漆黒の夜雨は目ざす山塊の稜線も暗天に溶けこませて、道を誤れば、敵陣へさまよいこむ不安も少なくない。

先頭を行く三成の部隊が目印にしたのは、かがり火であった。南宮山東麓栗原村には長曾我部盛親の陣地がある。あらかじめ、大軍の移動に備えて、巨大なかがり火十数基をたかせたのであった。

前記南宮山一帯の西軍のほかに、この十四日夕刻には、小早川秀秋が一万五千を率いて松尾山に陣を張り、脇坂安治、朽木元綱らもようやく着到した。

三成と島左近は目ざす笹尾山に至ると、青竹を切って二重柵とし、丘陵の高低を案じて逆茂木を突きさして鹿柴となし、やぐら落とし、やぶ撃ちなどに鉄砲組を備えるなど手をととのわせる一方、左近は馬を飛ばして南宮山から松尾山天満、小池など、各陣地をめぐって手はずをきめた。

さいわいそのころには雨がはれて、月が黒雲から隠見した。

戌ノ刻過ぎに、ようやく、いちおうの準備が終わって、

「明朝こそ決戦せん、明日こそ武辺の腕まえをあらわすときぞ」

二刻交替として、非番の者を休ませる。

三成の手勢は島左近勝猛、蒲生郷舎の二手にわかれているが、総勢八千余人。

島津義弘は小池の神田にあって、およそ三千人。甥の豊久が先鋒となっている。

小西行長は天満山の北に陣して、東南に向かって、陣を設けている。二千余人。

宇喜多秀家の陣はその南にあって、一万八千の士卒を五段に分けて完璧の陣形。

南宮山、松尾山のほかには、大谷刑部をはじめとし小名たち平岡重定、稲葉正成、松野主馬、石川佐左衛門、小川祐忠、赤座直保、戸田重政、平塚為広などおよそ一万余。

すべて十万八千。

東軍は七万五千と推定されているから、人数では圧倒的だ。

石田三成はおよその人数を算勘して、

「左近、このいくさは勝ちと決まったぞ」

と、前夜の興奮もてつだって喜々としていた。雨中の行進の疲れはどこにも見あたらない。

「毛利黄門の軍勢が遅延しているが、もはや、この勢力でじゅうぶんじゃ、ただ……」

「ただ？」

「島津がな」

「なんとなされました」

「島津がへそを曲げてはおらぬかと、気にかかるが……」

剛勇の聞こえ高い島津兵庫頭義久との間にしこりが残っている。

最初のいさかいは、あの合渡の戦いの直後だった。

長良川下流の墨俣は、その昔、秀吉が奇才をはじめてあらわした一夜城で知られているが、

義弘は合渡へ行くに際して、軍を二分し、甥の中務大輔豊久を墨俣へ走らした。

沢渡へ出てきた三成は、岐阜落城を知って大垣へ引き揚げることを命じたが、

「墨俣にはわが軍勢をやってござる。まず、陣を引き払い来るまで、しばしおん待ち候え」

と、駆けつけようとしたのを、

「いらざることぞ。中務大輔、若輩ながら剛ノ者じゃ、おっつけ引き揚げてまいろう、疾く疾くこの場を引き揚ぐべし」

と、動きだしたのだ。

これには血の気の多い薩摩隼人たち、かっとなった。義弘の臣新納弥太右衛門は三成の馬のくつわをつかまんばかりにして、

「あいや、戦場にての味方は親子以上と申すに、島津一統を見捨てての陣払いとはごひきょうでござろう」

いきまいたが、三成はむちで打ち払って大垣へ駆けもどってしまった。

義弘がおこったのは当然だ。

「義を知らざる治部少かな。由なき人に荷担せしものよ」

はじめて悔いを感じた。他の武将なら、ここで盟を破って帰国してしまったろう。義に厚い薩摩隼人だ。おのれの不明を恥じて、

「いったん血盟せしを、いまさら変改せんも武士の本意にあらず」

と、耐えた。

無事に助けられた豊久のほうは、しかし、この由を聞いて、腹に一物あったらしい。

昨夜、家康の赤坂進駐にともない、関ガ原に決戦たること一決するや、

「東軍は遠方よりきたりて人馬、皆、疲れておるはず、今夜、夜討ちを仕掛けなば、勝利は必定。万一、敗るることあっても、それから関ガ原に退いてもおそからじ」

と、義弘の意見を口上した。

三成はすでに関ガ原へ転進を決めている。島左近も、夜討ちを考えないではなかったが、あくまで天下分けめの大合戦をもくろむかれには、奇兵はとるところではなく、

「あすは、関ガ原にて、久々に江戸内府の押しつけを見るべし、なんぞ夜討ちに及ぼうや」

と、一蹴したのだ。

押しつけとは、鎧の背中の部分だ。家康を敗走させるというのである。

三成もそれを聞くと莞爾として、

「中務大輔どの、押しつけを見るには、夜分より白昼のほうがよろしくはないか、ははは」

豊久はこの笑いに乗らぬ。三十一。若い。

「左近どのは、江戸内府の押しつけを見たことがおありか、いつ、どこで」

と、たたみこんできた。

「もとより、若年のみぎり武田家にありしおり、山県昌景と戦いて内府が敗走せしことあり、

そのおり、はっきりと押しつけを見申したわ」

昔のことをいわれると、弱い。豊久はしいてせせら笑った。

「現在の内府は、むかしの内府にはあらじ、軍師の言とも思えぬのう」

このことばは、確信あってのことではない。

言に詰まっての捨てぜりふに近いが、いみじくも、核心を射ていたことである。

3

右の挿話は、薩藩落穂集にある。多分に島津の先祖を礼賛称揚しているから、真偽はわからない。が、ありそうな話だ。

夜討ちの効果を島左近が知らぬはずはない。知っているが、かれの当時の気持ちが、〝はなばなしい合戦における、武辺らしい行為〟を思っていたとすると、その返事も考えられるのである。

「武士は勝つためにのみ、いくさはするものかは」

その古風な意気地が三成と死生を共にさせたのだ。

あるいは、仰ぐに足るべき主君ではない、と、奸寧邪知の三成の性向を説く者もある。前述した島津義弘の慨嘆を証左にしよう。だが、武辺といい、士道というものは、現実的な論理とは合致しない。そのゆえにこそ、三民の上に立てたのである。ただに、剣と力をもって民百姓を虫ケラに扱ったというのはマルクス主義史学の偏狭な眼にすぎない。

「治部少に過ぎたるものが二つあり、島ノ左近に佐和山の城」と、歌にまでうたわれた左近が三成に召しかかえられた逸話は広く膾炙している。

いまだ三成が小身のとき、武士の大ならんとするは家臣に人を得たらんには、として当時、大和の筒井家を立ちのいたばかりの島左近を召しかかえた。島左近は剛勇の士であり、謀将として、各大名には垂涎の的だったのである。

三成はまだ二万石の小名。その家来となれば、せいぜいふんぱつしても千石がいいところだ。左近の心をとらえた三成のことばは、

「それがしはいまだ小身なれども、将来必ずや大大名になる器量があると自認している。ご辺が仕えてくれれば百万石も夢ではない。されば、爾後の昇進はご辺の力少なからずと見て、いかほどの大身になろうとも知行の半分はご辺の扶持といたす。まず、いまは二万石なれば、一万石でかんにんしてくれまいか」

主従の禄高が同じとは前代未聞だ。

他の家来は足軽に至るまで主人が扶持するのだから、実質的には、すごい貧乏になってしまう。

引く手あまたでも、これほど思いきった条件ははじめてだったろう。左近は他の大名の手を

断わって三成に奉公することになったが、三成も約束を破らない。後日、加増になるや左近に身代の半分を与えようとした。

「お約束ではござるが、これにてじゅうぶんなれば」

と、志に感激して固辞し、最初の一万石でまかなったという。

百万石になったら五十万、というさもしい計算で主従になったのではないことは、これでわかる。真の士は士を知るというが、左近は、三成の気持ちにほだされたのだ。かれのように、若年のころから諸国を転々として、いくさに出、人を見、主を変えること数度に及ぶと、対人間的な関係が、大きな比重を占めてきたのであろう。少なくとも、せがれを殺した信玄や、洞ガ峠の新語を作った筒井順慶よりは、まだ三成のほうが人間的に上だったろう。もっとも、三成の最後から判じるなら、左近は宿命的に主人運の悪かった人ともいえる。

それは一に、要領の悪さから来ている。機を見て夜討ちで決着をつけてしまおうとするいくさ慣れ——そうした、今日的にいうなれば、変わり身の早さ、に欠けたところに、かれの不運がある。

三成の器量が、どの程度のものか、見きわめつけながら、なお、袂別できなかった点、不治の病妻をかかえてなお離別を思わぬ男のりっぱさに通じている。

やはり古武士の典型といえよう。

関ガ原の戦いほど、内応、叛応が多かった大戦は、そのまえも、そのあともない。戦国時代末期に、人間があさましく、功利性が強くなっている証左だが、なお、島左近のような古風な武将もいたのである。

そして、その古風な武将は、もうひとりいた。

大谷刑部少輔吉継だ。

刑部もまた、三成の恩を受けている。秀吉の茶ノ湯の席で、天目茶わんのふちに膿がついたのを、三成が他に気づかれぬようにすすってくれたという話が、広く伝わっている。

皆に指弾され、恥をかかされたら、切腹せねばならぬ。人のいやがる病を三成は気にもかけず、救ってくれた。その恩が、かれをして東軍に与力せんとして美濃まで来ながら引き返して、三成方に投ぜしめたのだと。

かれが、このいくさに死に花を咲かしめんとしていたのは疑いない。

はじめ、関ガ原西方、山中村を扼していたが、いでて松尾山の北麓に陣を張った。藤川の右岸でずっと台地になり、山へつづく。

あいさつに来た島左近は、その布陣を見て、首をひねった。

逆転比翼と甲州流でいう、台地の東方、前面を大きくあけて、左手の平塚為広とは背合わせのかっこうになっている。

この陣型は、敵を前面と右側面に受けたときの立てかたで、中央に銃隊弓隊を集めているのも、普通ではない。

「さすがは左近どの、お気づきか」

左近の不審顔を見て、刑部は包帯のなかで笑った。

膿の多いときは、日に十度取り替えるという。一反のさらしをぐるぐる巻きにして、目ばかり出している。鼻梁はすでに半ば腐りおちていたが、足腰も不自由で、陣回りにも四方取りの竹輿に乗って指揮していた。

「いよいよ明日の決戦ゆえ申すが、毛利小早川など、かりにお味方したやからじゃ、安心ならぬ。この陣をもって秀秋に備えておる。笹尾山には攻めさせぬわ」

「おん志にはわが殿も感じ入っている……が、しかし、備前黄門ともあろうおかたが、さような……故太閤の猶子たるおん身が」

「ははは、身分や素姓とは、武辺は無縁でござるよ」

「……」

「真実を申そうなら、こたびのいくさ、われらは、せいぜい一万余……枯れ木も山のにぎわいだが、真の働き手は、十分の一とおぼしめされてこそ、まことのいくさができ申そう。南宮山を見回ったが、毛利も、長束も、安国寺も、険峻の山頂に陣配りなし、人馬の水にさえこと欠いておる。これでは人の上り下りも容易ならず、われらと呼応して戦いなぞ、思いもよらぬ」

「……」

「金吾中納言もし笹尾山に発砲せば、われらが切りこんで、きゃつの首あげてみせる。朽木、小川、脇坂らも、もとより安心ならず、すでに因幡守（平塚為広）とも、手はずを決めたれば、安堵、内府が首をねらわれるよう」

敵は七万五千。これに対して、働き手は一万と知りながら、豪快に高笑いする大谷刑部であった。

4

確証を得ているわけではない。

だが、まさに死に望んで、明澄な武辺の心気には、士気の有無、気概の高低が真偽を見わけさせたのではないか。

事実、すでに小早川中納言秀秋は、家康に通じ、内応の約定がととのっていたのである。毛利輝元の遅参も、一族たる吉川侍従広家に忠告されてのことであった。

「――まさか、裏切りは……」

もとより十万八千の軍勢が一丸となって、東軍にあたるとは信じていない。

石田三成と徳川家康の人望の差は、だれよりも左近が痛切に感じている。

が、秀頼の名のもとに、毛利輝元も名を連ねたほかにこれだけの大軍の集積は、いささか疑

惑と、不安をいだいていた者も、相乗作用で安堵し、勇気を出したにちがいないと思った。

また、たとえ決戦となって、筒井順慶の洞ガ峠をきめこむ者が少なくなかったとしても、左近や大谷、宇喜多、島津などが、武辺の生涯をこの一期と定めて戦えば、戦局は有利に展開し、その勝勢が、優柔不断と、小ずるさをふるいおとして、東軍に討ち入るであろう——そこまで人心の帰趨を、見越していたつもりであった。

笹尾山の陣所に帰った左近は、巽の陣幕に武具奉行大山伯耆をたずねた。

かがり火がえんえんと火の粉を吹きあげ、湿った夜気のなかに、ときおり虫が飛びこむのが見えた。抜き身の槍、薙刀を横たえた屈強の足軽が七、八人、目を光らせて、四囲を警戒している。

幔幕の前に、金紋黒塗りの大唐櫃がすえられてい、あり一匹近づけぬものものしさである。

「変わりはないか」

「別条ござらぬ」

大山伯耆は唐櫃をふりかえって、

「万一の場合は、命に代えましても、この軍用金は……」

「あらためよ」

ふたには、大きな錠がおろされている。伯耆があけると、五貫目箱が積まれている。後世の千両箱の原型だが、かなり違う。浅く、横はばが広い。

太閤が作らしめた天正大判小判がはいっているのだ。足軽たちは見たことがないが、いわゆる大法馬金（分銅型の金塊）も十数個、淀君から下賜されたという話であった。

乱世で信用されるものは金銀五穀だけだ。

ソレいくさ、ということになると、遠交近攻策でも好みを通じた国に金銀を送り、人質を送るなどして、狭撃を依頼したりする〝お味方つくり〟に狂奔する。

三成も家康も、むやみと戦勝の暁には、と大国加封のお墨付きを乱発して誘ったのは知られているが、金銀の贈与はあまり世間に漏れていない。が、大大名も小名も、それぞれ分に応じた費用はかかるのだ。いくさに誘う以上、その軍資の一部もしくは大部をまかなうのは常識だった。

家康の目を東北に向かわせてすきを討つ、三成の策をいれた上杉景勝は挙兵に先だち、最上義光を誘ったが、「金銀数十箱、騎馬数匹に負わせ——」（三河風土記）山形へ運ばせたが、義光はこれを黙って受けとって、平気で家康に味方している。

くれるものはもらう、どっちにつこうとかってというわけだ。

また、出すほうにしても、受けとったからと手放しで安心はしていない。

味方に候と血盟して陣を並べてから、突然裏切るなどというのは士道に反するが、金となると別だ。金銀の重要性は、乱世なればこそ軽視できない。

いちおう、配分した、これは残りだった。

三成はこずるい。帳じりを合わせるために、大垣城から大阪の増田長盛にあてた書状ではもっと金銀が必要だと申し込んでいる。

——度々如二申入一、金銀米銭遣はさるべき儀も、此節に候、拙子なども、似合に早手の内有たけ、此中出し申候、人をも求め候故、手前の逼迫、御推量可レ有候、然ば此節に極り候と存候間、其元も可レ有二其心得一事……

ここを先途と思うだけに、かき集められるだけ集めよう算段。

このさきかあとか、わからない。大法馬金を収めたことで異説がある。

大野修理太夫治長が淀君に勧めて庫から出させ、三成のもとへひそかに持参したという。その足で治長は弟の治氏とともに東軍に加わっている。首鼠両端を持して巧妙に立ちまわっていたわけだ。

どちらが勝っても、損はない。

三成が、このいくさにすべてを賭けて、乾坤一擲の一勝負ながら、なお、この大金を残しておいたのは、万一の際の逃亡に備えてのことであった。

左近は五貫目箱、法馬金の皮袋などをあらためると、丁銀の樽には目もくれず、ふたをして錠をおろした。

「気をぬくまいぞ」

念を押して幕の外に出た。

「島どの」

六将のひとり新藤縫殿助が、酒にてかてか光った顔を寄せてきた。

「やがて子ノ刻でござる、殿の仰せじゃによって、始めましょうかい」

「蟇目か」

左近のくちびるに、うすく皮肉な笑いが浮かんだ。

怪し火

1

そのころ——

笹尾山の北より流れきたって東へおち、中仙道に沿う相川の上流から、矢切り波が立ってきた。

激流は、川幅が広くなるにしたがい水勢を弱めてくる。

流れの中央にときおり、白く牙がかみ、黒いものが浮かび沈む。その黒いものが水を裂くのは、流れよりも早いことを物語っている。

石田三成の本陣近くなると、その黒いものはふっと流れを止めた。

〈的が近い……〉

岩をかむ波の音が、その声を両岸まで届かせなかった。声は、川面に吸われ、その返事のよ

うに、十数個所に、小さく、しかし激しいうず巻きが起こった。

厳密には十四カ所。

先頭から、背後へ——二つ、三つ、四つ、五つ……末広がりにふえたそのうず巻きは、鋒矢をかたどっていたではないか。

すなわち、伊賀忍法〝水遁〟之伍《鋒矢流れ》ソノ矢激シケレバ陰楯ヲ穿チ、ソノ身魚トナレバ鳴子ニ触レルコトナシ、と。

三成の陣に側面しながら、鳴子仕掛けを張りめぐらすひまがなかったのは、前述のとおりである。もっとも、仕掛けがあったとしても、その十五の変魚は、やすやすとして、通りぬけたであろう。

十五人の忍者。

あの上流の大岩の上で人数をそろえ、川を下ってきた連中に相違ない。

三成の本陣の前衛として左に島左近、右に蒲生備中郷舎（真令）の陣がひろがっている。

左近の陣地はさすがに、川岸には逆茂木が柔らかい土をかみ、鬼のつめを向けてからみあい、子犬も通れぬ。

忍法の奥儀に〝嶮峻ニ拠リ、堅塁ヲ築キ、仕掛ケアルコソ、道ト心得ベシ〟——とある、逆説ではない。攻守の盲点であり、忍法の活用を説いたのだ。

堅塁とは、常人の知力で攻略しがたいものであり、敵には安堵がある。守兵の安堵ほど、忍

びノ者にとって、乗じやすいものはない。

いま、その逆茂木の影を映す川岸に、黒いものが、ふいにわき出た。

流れが運んだ冬瓜のように——その黒い頭は一つではなかった。

次々と逆茂木の陰に浮かび上がった。

重なり合い、からみあった逆茂木は、かえって、暗い川岸をおおい、陣内のかがり火が、哨戒の足軽の動向を克明に描き出して見せている。

〈——やるか〉

あの奇妙な声が水ぎわを吹いた。

これは、二番めに浮かび上がった影である。

〈まだ……〉

先頭の影がさえぎった。

〈せくまい。まもなく……始まる〉

その声は、死にかけた甲賀の忍びが〝くノ一〟と指摘した小がらな頭領にほかならぬ。

ふたたび、十四人は沈み、頭領の頭だけが残った。そのきらめく双眸は、じっと、逆茂木を通して天を——月の面をかすめるあわただしい雲行きを見守っている。

その待っている者は、ほどなく、きた。

空に音がした。

びょう！　虚空がうなった。うなり声は、木柵の前段から、東南の空へ向かって大きな弧を描き、暗黒へ消えた。

わあっ、と喊声があがった。

その虚空のうなりは、たちまち、二つ、三つと、連続的に起こり、前の蟇目矢を追って飛んだ。

もともと、蟇目神事は、神道における十法の一つとされている。妖魔降伏のききめありという。

由来、この蟇目とは、特殊な矢じりのことだ。朴または桐の木の中を空洞にえぐって数個の穴をうがったもの。大小あるが、四、五寸の長さが普通で、犬追う物、笠懸など、それぞれ違い、射る物に傷をつけないために用いたが、空洞の数孔の空気が吹きぬけて、高く響くので、ひびきめが、ひきめになまったという説がある。

したがって、矢がらも太く三年竹を用いる。貴人にあって、出産の際に安産と成長をはばむ妖魔の降伏がねらいで、男児には三度、女児には二度となっている。

この蟇目の法を、三成が明朝のいくさの大勝を祈って行なうとは、いささか、苦しい神頼みの感がある。

東南、東、南——三方へむけたのは、いうまでもなく、家康軍に対してのことだ。

背面たる北から、忍びの群れはきた。

〈いまぞ！〉

暮目の音を頭上に聞くと、頭領はさっと手をあげた。

黒い頭がにょきにょきと水から出、黒く塗ったクナイが、機械的な的確さと速度で、土を掘りはじめた。

逆茂木の下を掘りぬいていくのだ。

哨戒の足軽たちは、暮目の音をふり仰いでがやがや騒いでいる。その虚をねらってのクナイ掘りであった。

速い。むだがなかった。掘りとられた土は音もなく川にすべりおち、溶け、流れにのまれる。掘る者と、土を溶かす者、川中でそれを散らす者との協同作業は、一分の狂いもむだもなく、たちまち、人を容易に入れる大きさとなり、もぐらのように掘り進んだ。

五十本の暮目うちが終わるころには、十五のまがまがしい黒い地虫は、半分に減っていた。残りは逆茂木の下をくぐりぬけ、陣営の奥へはいっていた。

2

かがり火は幕外に五基、内に二基を燃やしている。基部に数個の手おけが置かれ、水をたたえているのはもとより、火の粉による飛び火を警戒してのことである。

「眠るまいぞ、徳川だぬきめ、夜討ちをしかけてこぬともかぎらぬ」

うとうとしかけた者には水をかけてまわった。

水おけの水が、いつかおけの底から漏っているのに気がついて、

「なんとしたことじゃ、タガがゆるんでか」

「まさか、動かしもせぬに、そのような……あ、これも漏っております」

「やあ、こっちは、からっぽじゃ」

「ええい、やっぱり、タガがゆるんでおるではないか、はよう修理いたせ」

ゆるんだタガはすぐに直る。水をくみに川へおりた。逆茂木の一部をあけたのだ。

小者が両手に手おけをさげておりていったが、川岸でおけをかたむけた。水をすくった。その重みか、ずるっと、足もとの土がくずれた。

「あ……」

ずるずるっと、からだが沈んだ。

次の男も同じだった。水をくもうとしたが、頭からめりこんだ。水からひっぱられたように感じたのである。

その次の男も——

しばしの後、三人の小者は手おけをさげて、幕内へもどってきた。

「ご苦労ご苦労、さあ、かがり火のそばへ」

と、大山伯耆は命じながらのぞきこんで、
「や？　またからではないか？」
「そんなはずはない。よくご覧ぜられませい」
「たわけ、一滴も……あっ!?」
のぞきこんだ頭が、ぐいと押しこまれた。
水おけの中に頭がはさまった。
「や、何をする」
唐櫃のそばの足軽が、ぬっと立った。
せつな、背後から飛んできた黒いへびのようなものが、きりっと、巻きついた。
ほとんど同時だったのである。小者に扮した残りのふたりは、幕じりの足軽へそれぞれ手裏剣を飛ばせていたし、黒へびの飛びなわは、唐櫃のそばを離れぬ五人へ、生きもののように巻きつき、瞬後に締めていた。のど仏が、ぽりっぽりと折れる音がした。
無言であった。
目と、そして、手の合い図が、すべてを予定どおりに運んだ。
足軽七人は、もとの表情に返って、もとの位置にすわったが、その目は白く、鼻口は呼吸をやめていた。陣幕の内外を見張る者は、前と同じく、しんけんなひとみを光らして、ゆっくりと行きもどりする。

その間に金紋黒塗りの唐櫃はひらかれている。かぎは伯耆の腰にあった。
残りの黒い地虫たちが、五貫目箱を次々に運びだす。
太閤の作らしめたいわゆる天正大判は四十四匁ある。十両金だ。百枚で四貫四百匁。木箱の重みと周辺の鉄金でおよそ五貫になるからこう呼ばれているが、すでに千両箱という名称も出てきていた。
黒い地虫たちは、ありが砂糖をひくように、千両箱を運び、法馬金の皮袋を運び、丁銀の箱をひきはじめたとき、ひゅッ、と口笛がした。
幕外の見張りである。
〈来た！〉
〈左近か？〉
幕の外から、かれらだけにわかる風の声が、
〈治部少じゃ……〉
さっと黒い地虫たちは消えた。地に吸いこまれるようなすばやさだった。
が、ひとり、丁銀の箱をかかえ出そうとしていた男が、逃げる拍子に、腰袋が、ふたにはさまれた。
唐櫃のふたをしめたときだ。腰袋はもみ皮でできている。手裏剣や、鎖なわや、管はしごなどがはいっている。

七人の警固の足軽たちが、一塊のむくろと化したまま、生けるもののごとく佇立し、あるいは床几に腰をおろしている。

金銀を奪い去ったあとに、なお、その姿をとどめておくのは、忍びノ者のてらいでもみえでもない。逃走の時をかせぐためだ。

〈鮫！　曲を早く〉

「おう！」

足軽にふんしていた男である。

これは、さりげなく、姿を隠そうとしていたのだ。やむなく、ぱっと唐櫃へ走り寄る。

もう石田三成の一行はそこまで来ていた。蟇目うちを済ませて、あすの勝利を確信しつつ、金銀を小大名たちに与えようとしてきたのだ。

唐櫃のかぎが腰袋のひもか何かにからんだらしい。

〈切れ！〉

もがきながら、曲は、忍び刀を抜いた。

その間に、ぱっと黒い影が飛びだした。曲を逃がさんとする、捨て身の〝走り〟であろう。

三成の眼前であった。

走りだしながら、左右の手が、飛び鉤を放ったのか。燃えさかるかがり火が、ぱーっと粗朶を飛ばした。三本結びの鉄籠が、だだっと揺れて、つんのめるように倒れた。

前後してかがり火二基が倒れ、すさまじい火ノ粉がぱあーっと舞い上がったのである。

「わあっ！」

「地震じゃ」

「風じゃ！」

ろうばいする武将の間を、黒い影は、一陣の黒風となって突っ走った。

混乱が、突風による火炎禍だけでは不足と知っての、〝誘い走り〟だったのである。

とっさに、かれの脳裏をかすめたのは、

（火術！）

玉薬の一包みを持参しなかったことだ。相川を利用するために、水気をきらう火薬をあえて持たなかった。玉薬をもってかがり火を吹っ飛ばせば、みずから、身をあらわすまでもない。

それは曲の失敗を予測しないことからきている。

十五人の忍びが、さながら十五頭いっぴきの地虫となって、一糸乱れぬ動きをするという安心――信頼が招いた蹉跌であった。

数人が、この黒い突風をよけた拍子にころがった。

さすがにいくさ慣れた武士たちである。

「怪鳥のようなやつ！　逃がすな」

「切れ！」

刃風が、左右から襲った。この風に乗るように、黒影は夜気をさか巻いて、数間はね飛んで、こずえに飛びついている。

この捨て身の〝走り〟はむだではなかった。

〝鮫〟のシコロが腰袋の皮ひもを切り、脱出していたのである。

3

脱出した合い図を、こずえで聞いた。

(逃げたか)

ほっとした。

気がゆるんだのは事実である。あとは、おのれが姿を消すだけであった。

幕裏の鹿柴と木柵の内から、逆茂木の下をくぐって川へ——その穴ぐらへ消えさえすれば、まずだいじょうぶ。

だが、五貫目箱をかかえては、いかな忍者でも、軽捷を誇れない。少しでも時間をかせいでやらねばならなかった。

こずえから、こずえへ——飛鳥の影は侵入口とは反対のほうへ飛ぶ。

「やるな、射よ、射よ」

三成が口ひげをふるわせてわめく。

やみを切って、矢が影を追った。弓とり十数人が競って放つ矢は、間断ない連れ矢となってこずえを縫い、木の葉がぱらぱらと落ちてきた。

この矢をのがれるワザは、忍者にとって、さしたることではない。

夜だし、山であることが、いっそう、逃走を助けた。

木の幹はぬれ、葉は雨滴をたたえている。飛鳥の動きにつれて、しずくは散るが、かわききった場合よりも、飛翔、転身には有利でもあった。卓抜な忍者は、ぬれ手ぬぐい一すじをさながら手鉤のごとくあやつって、おのれの身を託し、こずえからこずえを転々する。しけた幹に、忍者のからだがひたとはりつくとき、鳥もこれを見のがすといわれる。

しかし、三成や左近にしてみれば、単に、軍用金をねらっただけの盗賊には思えなかったのであろう。

天下を二分する決戦前夜、本陣たる三成の軍用金を襲う以上、東軍の乱波と見るのは当然だ。

「逃がすな、追え」

杉江勘兵衛などは、走りながら、わき差しを抜いて投げた。これはいたずらに幹へ刺さっただけであったが、弓組は矢をつがえながら林のなかへ走りこんでいる。

(しつっこい!)

舌打ちはもとより、かれらには聞こえない。

「いたっ」
「あそこだ」
「はりねずみにしろ」
弓弦が夜気をつんざいた。
巨大なつがの木であった。その幹に抱きつくようにした黒い影。矢羽が研摩せんばかりに飛び、ぶすぶすっと突き刺さった。
「やった！」
「仕留めたぞ」
「わしが一番矢」
「ぬかすな、おれのほうが早い」
「いんや、この弓じゃ」
「矢を見ろ、矢印でわかる」
「おそいわい、もう」
夜目にも、黒装束のからだには、十数本の矢が突っ立っていた。
血気の足軽が木にとりついた。するするとのぼっていったが、
「や……!?　も、もぬけのからじゃあ」
とんきょうな声をあげた。

矢が突き刺さった黒衣は、なんと、つがたけ——栂ノさるノ腰掛け、といわれる、末広きのここにふわりとかぶせられたものだったのである。
かれらの目には見えなかったが——
黒衣をとどめるや、するりと本体は脱けて、こずえを伝い、近くの木へ移っていた。それまでの飛翔が故意に人目をそばだてるものだったから、一転した隠微な動作は激昂した追っ手の目にはとまらない。
はだ着も黒地だった。さらしを染めてある。腰布は短くひざに届かない。忍び刀をくわえて、大くすのきをすべりおりるや、草むらを走る。
十間と、しかし、走らないうちに、そのはだ着が、ぴりっとさけた。
「見たぞ、空蝉」
あざけりの声とともに、しゅっと、耳を打った風。
夜気を巻いた刃風だと知った忍者は、さっと忍び刀を抜いた。刃が黒く塗りこめられているのは、いうまでもなく、あかりを吸わないためだ。
抜くとひとしく、地をけった。天空の声は必ずしも、敵の位置を物語らぬ。飛刃の方角は直感したのである。が、地上五尺。梢上をめがけて飛び切りに宙を翔けたが、その一颯がむなしく夜気を切って、かれのからだは重心を失った。
目的物を斬撃した瞬間、その肉と骨の抵抗が、次への跳蹴のバネになるはずであった。ボ

クサーのから振りが重心を失わせるように、レスラーの飛びけりの失敗が勝敗を逆転させるように、忍び刀の空撃は、かれを一転させた。足をかけた太枝が、何の音もなく、まるで雲を踏んだように、落下したのである。

「あっ！」

動揺と不安は、忍びノ者を、超人的なワザ者から、常の人に返す。

虚空を転落する忍びノ者が、人間に返った一瞬が、その不意の襲撃者のねらいだったのである。

落下するからだが、ぐん、とはずみをつけて止まった。宙づりになった。ずきんが脱げて、さっと舞い上がった髪がどこかにひっかかったのである。

ずきんを切った刃は、髪の束ねもろともに一颯したのであろう。髪を宙づりにされて、もがくからだから、腰きりのはだじゅばんと腰のものが次々とおちていった。

月光をさえぎる層葉のもとに、ぶらんと宙づりになった裸身。

いかに変化のワザを持つ忍者でも、頭髪のちぎれるばかりの痛みと、予期せぬ〝やみの手練〟には、のがれようがなかった。

「くノ一!!」

岩上で死に臨んだ甲賀者のことばは、やはり正しかったのだ。

みごとな女性裸身。ほの白く均整のとれた五体が、椀を伏せたような双の乳ぶさも、ふっくらと雪を盛りあげたような腹部のくぼみも、下肢のつけねのうすずみのかげりも、かもしかのようにすんなりとほそくしなやかな足も——みごとなまでにうら若い女体をおおうなにものもなかった。

苦しげにゆがめた顔が、凄艶だった。

千万の頭髪が、体重をささえているのだ。頭皮は、剝落せんばかりに、引っつれ、まゆと目は、はり裂けんばかりに、つり上がっている。

「う、う……」

苦悶を漏らすまいとして、くちびるをかんでいる。すーっと血がしたたった。下くちびるをかみ破ったのか。

そのままの姿で、宙をけって、こずえに飛びつこうとしたが、両足はむなしく葉を舞わせ、つまさきが樹皮を傷つけるだけであった。

それでも、片手がかろうじて、枝をつかんだ。せつな、髪の桎梏が解けた。

女忍の裸身は一転した。

が、解放されたのではなかった。ぐん、と右足が、ひっぱられた。片足づりにまっさかさまに、つるされてしまったのである。

〈ふふふふ、ふふふふ、女人の身で、だいそれたやつ、しばらく、ぶらさがっているがよかろ〉

まるで、そこらの木の空洞からひびいてくるような陰湿な声であった。

「ち、ちくしょう！　放して、このなわを……」

はじめて女忍は、悲鳴を漏らした。

ワザの手を封じられ、あますところなく全裸をさらされては、女忍の誇りも汚穢にまみれたにひとしい。

〈放してやる〉

と、その声はいった。

〈後刻……〉

さっと、黒い影が、股間をかすめた。黒い風が恥毛をなぶった。さすがに、女忍は、あっと、足をちぢめた。巨大なこうもりのような影は彼女の眼前をおおい、樹間を飛んで、三成の陣所のほうへ消えた。

くの一貝

1

七人の警固の士卒は、はた目には何の変わりもなく突っ立ったり床几に腰かけたりしていたが、

「おい！　汝らなんとした、怪しのやつを……あっ」

ひとりが肩を突くと、朽ち木の倒れるようにばったり倒れた。

七人ぜんぶ、目をあいたまま、ことときれていた。

大山伯耆は水おけに頭を突っ込んだまま、もがいていた。足軽たちがおけを割って助けたが、口中にいっぱい土くれを詰めこまれて、窒息寸前だった。

「き、金は、軍用金は？　だいじょうぶか」

三成の声もふるえている。

唐櫃があけられて、金箱金塊袋が盗まれているのを知ると、みんな顔色が変わった。
蟇目矢を敵の方向に放って、縁起を祝ういくさ前夜。
本陣を乱波されて、ばくだいな軍用金を奪われたことが、不吉な前兆に感じられたのも、意外に神経のこまかい武将たちだったからだ。三成の色を失ったくちびるが、わなわなと震えて、何かいおうとしながら、ことばにならなかった。小西行長のほそおもても青ざめ、うすいひげがちりちりふるえていた。
「お許しくだされい、乱波づれに荒されたは、この身のおちど。一代の不覚。腹かっさばいておわびを」
大山伯耆がどっかと胡坐すると、よろい通しを抜いて腹をくつろげた。
「早まるまい」
つと、島左近の鉄扇がひじを打った。とりおとしたよろい通しを未通権太夫が拾い上げる。
「し、死なせてくれい、生き恥をさらしとうはない」
「早まるなと申しておる」
左近は微笑を含んで、
「武辺の死に場所はいくさ場以外にはないはずぞ、あすの大事を忘れてか、この場にての割腹は、怯したる者のふるまいにも似たるぞ」
「お、怯したとは、聞き捨てならぬ。この伯耆が、いまだかつていくさ場で怯したことがあっ

てか」
かみつきそうな形相になっている。
「ははは、その意気じゃ。あすはお家が天下を得るか失うかの分かれめ、存分に働いてこそ、目もつむれるというものぞ」
「左近」
と、三成があわてて制した。
小西行長や、少し離れて戸田重政や、斎藤左兵衛尉なども居合わせたのである。
秀頼公おんためと称してのいくさに、石田三成個人の野望があらわれてはまずい。
その狼狽をさらにあおるように、そのとき、風の音がした。夜風が、異様に震えて、三成の耳を吹いた。風は、声を乗せてきた。三成の鼓膜には、こうひびいた。
〈まず、天下は得られますまいぞ〉
「なに！」
〈いくさの勝敗、おのずから分明〉
「……」
〈なぜとならば、裏切り者がおるからじゃ。その者の名は……〉
「な、名は？」
〈お人ばらいを……〉

「……」

決断はつきかねた。

あまりにも唐突であった。金銀を奪った乱波者の、達者の忍びのワザを目のあたりにした直後に、このやみの声を信ぜよというほうが無理であろう。

その逡巡のさまを、やみの目は見守っていて、

〈それがしは、おてまえに危害を加えるにはあらず、おんためになれと、大阪よりつかわされし者〉

「おお……」

〈信楽くノ一……島左近どのもご記憶あろう。今春、佐和山へ使いの者がまいったのをお忘れあるまい〉

「……」

〈当夜、おてまえは、ウンスンカルタをなされていたとな。われらが輩下は女人なれば、ひそかごとを、しとねのうちで……〉

「……」

無言だったが、三成は思いだしたようであった。

〈淀ノお方さまよりの牒、たしかにお渡しいたしたはず。信楽くノ一には、秘牒を運ぶに十法あり、その一、すなわち膣内に隠せば、よもやお忘れなきはず……」

ひくひくと、三成の小鼻が動いた。

かれは思いだしていた。その美しい女忍が下肢をひろげ、秘匿の場所を示して、淀君の牒をぬきとることを頼んだのを。そのたえなる芳香までが、ありありと思いだされた。

その表情を読みとりながら、やみの声はさらに重ねている。

〈伏見城陥落には、いささか、われらのワザが役だったはずじゃ……〉

「おお！」

あのときのやつか。

意外な強さを示した伏見城を攻め落とすには、たしかに乱波を用いたのである。その男の素顔は知らぬ。信楽ノ某という名だけで、それも真偽の判断はつかぬ。

乱波を生業とする、甲賀の一団、というしかない。

もとより、金のためであった。生きるための信条は、武家の義理を踏み越えて、ワザをひさぐことに見いだしているかれらは、そのことになんのためらいもない。名誉とか、地位とか、権威などのいっさいを——その根本は、すなわち安定した生活にあると看破して、金のために、ワザを生かす。超人的なワザが、この一種魔性めいた群れの生活の道具となっていた。

非情冷酷ならざるをえないかれらは、やみを鎧い、夜を昼に代えていた。しごとをなしとげ、報酬を手にしたとき、彼我の関係は断たれた。

三成が、そのとき瞥見したこの信楽ノなにがしは、年齢の見当もつかぬ隻眼であった。その

こともしかし、真偽の見わけはつかぬ。一瞬にすぎなかったし、老爺が妖妊に変ずるのは、日常茶飯事と聞いている。

（きゃつか！）

2

石田治部少輔三成は、金の価値を知っていた。おのれの武勇をたのめぬ文官派にとっては、知才と弁口が世渡りの手段であり、これを裏づけ、より効力を増すのが金銀であることを、いやというほど知っている。

貧困の苦しさをより多くなめた者ほど、その価値を知る。まのあたり故太閤のやりかたを見てきた石田三成は、金銀がいかに偉大な働きをするかを知らされた。堺出身の小西行長もそうであり、文官派という意味でもウマがあった。

（金でかたがつくやつは、御しやすい）

いくらかでも、やみの声の正体がわかると安心できた。

大唐櫃の金はあらかた持ち去られたが、佐和山の城には、同じくらい残してある。万一をおもんばかっての島左近の深慮であった。

左近の幕内にはいると、ふたりきりになった。小姓も遠ざけたのは、あの信楽ノ某なれば、違約せぬ以上、危害を加えないはずだからだ。

「――信楽か」

と、ふたりきりになると、左近は、どこへともなくいった。

「殿のおんためとあれば、まず軍用金を取りもどしてから、あらわれるのが本筋ではないか」

ふっふふふ、と異様な小バカにしたような笑い声を聞かせて、

〈そのことなら、ご懸念ない。軍用金を取りもどして進ぜてもよろしい〉

「広言を……」

〈忍びノ者は、できぬことは申さぬものよ、常の者の大言壮語、なさぬて〉

「なれば……」

〈女忍を捕えてある、かれらの首領であろ〉

「まことか」

〈たぶん……〉

声はうしろから聞こえた。

左近が、きっとなって片ひざ立てに背後を振りかえったが、幕じりが夜風にあおられているだけで、人のけはいはない。

が、その風がふいに強くなった。かがり火が大きく炎をおどり狂わせたと思うと、はたと消えた。

「や!?」

すす煙がほの青く鉄かごからゆらめきのぼるかげに、ぼんやりと影が浮かび出た。

〈――これに参上……〉

「ぬ……そちは」

〈お役にたち申す者……〉

「し、信楽の……」

否とも応ともなく、ただ、れいの小バカにしたような笑いが、かがり火のけむりをゆすっている。

左近は三成と顔を見あわせた。たしかに危害を加える様子はない。一時の雇傭契約――おおむね成功報酬であるが――に姿を見せる必要もないのだ。ワザが巧みに目的を果たせば足りる。信頼が、乱波を有効に使うか否かの分岐点ともいえる。

三成は、目を凝らした、

(隻眼か……?)

暗い。容貌も判別しがたい。隻眼と思えば、そのようにも見える。

「き、聞こう」

押しだすような語気で、三成はいった。

「裏切りとはだれがことじゃ」

影の声は、これに明確に答えている。

〈まず、小早川中納言……〉

「なんと!」

三成は思わず床几から腰をあげている。

左近が無言だったのは、その疑いをすでに感じていたからであること、前に述べたとおりだ。

「たばかるか! 金吾どのが、なにゆえ、さようなことを……」

〈証拠がござる。中納言と徳川方の間には、すでに密使が幾度も往復しておる。イザ、いくさとなれば、内応は必然じゃ〉

「ははは、たばかりもほどにせい。金吾どのはいまだ年若くとも、故殿下の猶子にして勇武も兼ねそなえたおんかたぞ」

〈おてまえさまの立場なれば、そのように考えたくなるのも当然でござろうがな〉

「……」

〈じゃとて、事実なればいたしかたござるまい〉

「出まかせを申すな、過般の伏見攻めには、ずいぶんと……」

〈伏見は関ガ原とちがいまするぞ、すでに半年に近く、人心も変わりまする〉

「たとえ、そのほうの申すとおりとしても、江戸内府が許すものか」

〈内通内応ほど、いくさ場に役だつものはない。まえの罪は帳消しになりましょうな。中納言

と内府の間を仲立ちしたるは浅野幸長、黒田長政らでござる。もはや、裏切りは明白。いまのうちに手を打たずば、このいくさ、惨敗に終わりましょうぞ〉

三成は無言だった。

事実とすれば、あまりに大きすぎる衝撃である。事実と思いたくない気持ちが、三成を冷笑させた。

その瞬間ほど、左近の目に主君が軽薄に見えたことはない。

「殿……」

と、言いかけたのを耳に入れようともせず、三成は、

「孫子の反間ということがある。われは内府の手先となって、われらの結束を乱そう算段であろう、はははは、そうはまいらぬ、去ね」

左近はあわてた。この恐るべき忍者を敵にまわすことの不利に、主君は気がつかぬのか。いつになく、頭の切れない三成に、狼狽して、

「あいや、殿、そのうわさなれば、すでに……」

「うわさじゃ、乱波が流したものであろう。こりゃ、信楽とやら、われこそ軍用金を盗みおったなかまではないか」

返事はなかった。

あまりの猜疑ぶかさに、あきれたのか。

「女忍を捕えたやら、なんじゃら申して、そこらの女に因果を含めたか、ひもじ子のためとあれば米三合ではだを売る女もおるそうな。この三成の目は、なんじらにはだまされぬぞ」

左近は、さえぎるのをやめた。その時は過ぎていた。突風がおこり、消えていたかがり火の燠があおられて、ぽっと勢いよく炎が吹き上がったではないか。

ふたたび、夜気に乱舞する火ノ粉――それは、忍者信楽ノ某があすの敗北を予言して残し去った地獄の送り火に見えたのである。

3

明朝にそなえて半刻の仮眠でもむさぼらねばならぬ。

左近が陣所へもどってくると、次子の友勝が、足軽たちを督励して、れいのもぐら穴を埋めているところであった。

「すばしっこいやつらでござる。この穴からはいったに相違ありませぬ。布陣したときは、たしかにこのような穴はなかったのだが……」

「忍びのワザを心得た盗人どもだの」

「敵方の乱波では……？」

「ではあるまい。乱波なれば、軍用金だけではすまぬ」

左近は、もう興味もなくしたように、少しでも寝ておけ、と言い添えて幕の内へはいった。すでに寝所はしつらえてあった。

もとより、戦場。陣幕の囲いのうちに、板張りして毛皮を敷いただけである。

左近は具足を脱ぐと、ごろりと横になった。

「四半刻ほど眠るぞ、殿のお召し以外は、だれが来ても起こすな」

近習に命じて目を閉じると、すぐにいびきをかきはじめた。

戦場に慣れた武士は、たとえにもいう早飯早ぐそで、寸時のひまに熟睡することをおぼえる。眠りは深く、短時間で充足する。

まくらもとには佩刀をささげた小姓がゆだんのない眼を光らしている。

その目の前を、スイーと、小さな光が飛んだ。

(ホタル……?)

思わず、視線を移した。が、

(まさか……いまごろ)

陰暦九月十五日だ。ほたるが生きているはずはない。だが、冷たい青い光は、ほたるにちがいなかった。幕串の根かたにとまった。

そのまま動かない。

(やっぱりほたるだ)

小姓はひざをにじらせた。とろうと思った。殺伐な戦場には出ても、やはり子どもだ。虫や花に心が動く。

片手に佩刀をささげたまま、片手をのばした。

とたんに、光が動いた。

すーっと地上をはった。小姓のほうに近よってきた。ほたるの光は二つになっていた。

青く冷たい光は、小姓のおもてからなごやかなものを消した。恐怖に近いものが、ほおをゆがめた。

(ほたるの光はへびの目にひとしい……)

いつか、だれからか聞いたことばが、背筋を慄然とさせて思いだされた。

(へびだ……)

へびが宙を飛ぶか? たしかにさっきは宙を飛んでいた。その疑いが、小姓に声をたてさせなかった。青く光る目をにらみつけているうちに、すーっとその光のなかに吸いこまれるように感じ、小姓は、前にのめった。すわったまま、佩刀をささげたままである。

左近が目をさましたのは、その刀が地面を打った音だった。

「はて……」

かがり火が消えかけていた。

鉄かごのなかに一本だけ粗朶が燃え残り、その淡い火あかりが、まわりを幻想的にほの赤く

染めている。

「や？　なんと……」

左近はぎょっとしてはね起きた。

小姓が突っ伏していたばかりではない。いつの間にか、かれのそばへ、ひとりの裸女が横たわっていたのである。

うら若い女であった。みどりの黒髪のゆたかさといい、伸びやかな四肢をぐたりと投げだしていたが、かたちよく双胸に盛り上がった乳ぶさも、おとめのすこやかさを象徴していた。

がくぜんとして、息をのんだ左近の耳に、

〈進上する……〉

と、あの声が、どこやらから聞こえてきた。

〈軍用金のありか、その女が存じていよう、盗み乱波の首領じゃ。治部少の申したように、そこらの飢え女かどうか、おぬしが判断するがよい……〉

「……」

〈身を誤ったな……治部少ごときに仕えたが、おぬしの一期の不覚。義に生きるも、主を選び損ずれば汚名を千載に残そう〉

「信楽！」

〈ふふふふ、言いすぎたか、らちもない、ワザ売りの乱波者がたわごとと聞かれるがよい〉

「信楽、せめて名を明かせい」

〈地獄へのみやげとなさるかい。なるほど、閻魔ノ庁でいくぶんなりともハバがきくやもしれぬがな、保証のかぎりではないぞ〉

「……」

〈――信楽闇夜斎……〉

「おお！」

それっきり、声はしなかった。

一本の粗朶を燃やす火は、しだいに力を強め、たち消えた周辺の粗朶に燃えつき、かがり火の炎はふたたび勢いを盛りかえして、あたりを明るくした。

信楽闇夜斎はその名のようなやみに消え、裸女だけがその存在の証拠のように横たわっている。

左近は、失神した小姓を正気にかえそうとしたが、ふとその手をとめ、裸女をのぞきこんだ。

火あかりは、女体をあますところなく、ほの赤くいろどっていた。伸びやかな四肢はそれだけで家事にいそしんだことのない生活を暴露していたし、ひじの堅さ、手のひら、骨ぶしの、意外なばかりの胼胝状は、兵法鍛錬からきたものであること一目瞭然であった。

ととのった目鼻だちだが世の常の美しさとも違う。

ほそおもてのまゆをややひそめて、きっと歯を食いしばっているのが、みだれ髪が額やほお

にかかり、凄艶というほかない。

島左近の過去には、こうした女の投影はなかった。それだけに興味にかられたのは事実である。

かれの長子は武田家の重臣の娘を妻にしたときの子であるし、次子は素姓も知れない浪速の遊び女の腹である。放浪の半生は、かれに多くの女を知る機会を与えた。それらの女のなかにも、なかった型である。

そのうりざね顔のととのった目鼻だちは、しかるべき家系の血をひいていることを物語りながら、濃いまゆ、迫った眼、つんと高い鼻梁、くちびるの緊張感には、おいたちの境遇からもたらされたきびしさが見える。

盗み乱波の頭領たるからには、非情冷酷な過去を持つにちがいない。その、女にあるまじき残忍な性根をひそめた美しい面貌に魅せられたように、左近はじっと見まもっていたが、身内から突きあげるような衝動にかられて、つと手をのべていた。

女忍がえし

1

ほとんど意識はなかった。たくましい男の性的な衝動は、本能にちかい。みごとな乳ぶさをかれの手はつかんでいた。

「……」

くちびるがわずかにふるえた。が、うめきは漏れなかった。もだえるように女体が動いた。

左近の顔に血がのぼった。

ある激しい感情が、全身の血管をふくらませていた。絶えて知らなかった情感である。

三成のために生き、武辺としての理想に没入してきた島左近にとって、その感情は、すでに過去のものであった。

かれが生来、ぶ器用なまでに武辺者であることは、過去を見ればわかる。武田家に仕えたこ

とも、大和の筒井に仕えたことも、また三成に望まれたことも、常に不運の星の下を歩くようになっている。真の意味での安心感はなかった。乱世の武辺者の宿命というにはあまりに非情すぎる。労苦の多い運命は、不惑を過ぎてからあせりをおぼえさせずにはいない。人も認め、おのれも認めながら、なお、一点の不運が、かれを陪臣の身分にすえ置いていたことである。その人知れぬ苦慮が、かれから女色を遠ざけていた。

女をきらいというのではない。女色に耽溺できぬ気性だった。その暇がかれにはなかった。一万石（一万五千石という説もある）の大名ともなれば、側室のふたりや三人いるのは普通のことだ。左近の妻は江州の浅井氏の流れをくむ。その妻には子がない。左近は妻とも数年来合歓していない。

かつて忘れていた情感を呼び起こす女体であった。

この壮者のからだに上げ潮のようにふくれあがり、血をたけらせた欲情は、凶暴なまでに荒々しいものだった。

「おんな！」

うめくように叫び、左近は女体におおいかぶさった。

下腹に痛いほどの灼熱をおぼえている。長い冬眠を破ったおのれの分身の、憤然たる勃起であった。

狂ったようにくちびるを吸い、足は下肢をおしひろげてひざを割りこませていく。

女体には、ほのかに暖かみこそあったが、この激しい、野獣の襲撃を受けながら、死んだように抵抗がない。やわはだの感触は、この武辺大名を痴愚に返した。くちびるを吸い、歯に触れ、耳たぶをかみ、ほおをなめ、まぶたを、額を、狂おしくなめまわりながら、両手は、乳ぶさをやわやわともみ、くびれた胴から腰のふくらみをおりていくと、下腹部の茂みにおおわれた陰阜を手のひらにおさめ、指頭がやわひだにすべりこんでいた。

そこは、かわいていた。

左近の雄偉な逸物もいたずらに矢叫び、充血してもだえるばかりだ。

これほどの、手荒な所行にも、女体が正気に返ろうとしないのは、忍法で仮死されているからにちがいない。

下肢をおしひろげ、ふかく沈んで、さらにこころみたが、亀頭はとまどい、うずき、血を吹きそうであった。

女体に触れずに過ごした歳月が、その行為をつたなくしたのか。

左近は身を転じた。焦慮が、誇りを失わせていた。口がすべり、陰阜の茂みに唾液をひいた。女の下肢を八ノ字におしひろげると、かがり火はあるじにこたえるように一段と燃えさかり、赤々と内腿を照らしだした。

左近はかつて、このような行為をしたことがない。武辺に生きがいを感じる男にとって、女は単に性欲の処理をする道具にすぎなかったからである。女を愛したという記憶を持たぬ身は、

ある意味で、寂しい男ともいえる。女はそんなかれを愛した。強いということが、絶対だった時代、加うるに卓抜した知謀を備えた左近は、当代の男としては、女人の渇仰の的だ。たいていの女が、かれの心を動かそうとして、羞恥をかなぐり捨てた。かれの前にひざまずき、口を用いて慰めることを辞さなかった。

冷たいほど、理想に燃えた男の心をときほぐすには、いとわしさを感じていられなかったのであろう。左近への愛が、常軌を逸しての所為だったかもしれない。

そうした愛撫を受けてばかりいた左近にとって、おのれが、犬のように身を屈して、女陰に口を近づけるなど、夢想だにできなかったことである。

忍法をもって仮死の状態となった女体が潤うには、解法を知らぬ以上、それしか考えられなかった。

とはいえ——左近をその行為にかりたてたものは、理性ではない。怒張した局部の命令といってよいかもしれぬ。意馬心猿が理性を目くらましたのか。

口と舌と——唾液が秘所のとびらを開くのに効顕なること、指頭の及ぶところではない。いかなる貞婦も、〝相公ノ口淫ニ歔欷セザルナシ〟と中国の古書が説いている。相公とは陰間のことだが、色事師の謂もある。節操厳のごとき婦人をとろかすには、あらかじめ、口中に淫薬を含むという。胡椒などの刺激性のものである。もとより、口腔がこれに耐えねばならぬ。相公の多くは上下前歯を幼時から抜いて歯ぐきをきたえ、膣に歯が触れるのをさけた。女人を慰むるばかりではない。陰茎を含むや、随喜せざるはなし、とある。

左近が、こうした性技に通じていたわけではない。

かれの亀頭を傷つけんばかりにかわいた女陰を潤すには、それしか方法が考えつかなかったからにほかならない。

それが、きわめて直感的、反射的に、かれを行為に導いたという点で、技巧という以前に、最も純粋な行動だったともいえる。

かれの口と舌の動きと、あふれるばかりにわきでる唾液が、女の粘膜を何かの生き物のように目ざめさせ、ひくひくと、はげしく、痙攣にも似た動きで、舌にこたえてきたとき、左近は身を起こし、女体をかきいだいていた。

はじめて、しとどにぬれた陰唇は、かれの灼熱したものを受け入れた。左近の口から、野獣のうなりが走った。

2

女陰のかわきを浸潤する時間の長さに比して、雲雨の快はあまりに短かった。舌唇の働きのうちに、男のいのちはたけりにたけっていたせいである。女の粘膜をしとどにぬらしているものが、おのれの唾液であろうとも、快感に変わりはない。通常、これは呼び水の役目をなす。

女体が、官能の琴線をかき鳴らされて、みずからをぬらし、男を迎えるとき、技巧を意識しないまでも、膣はその役目を果たすのだが、左近のいのちは、それをあえてもとめる必要もないほど情感が高ぶっていたのである。

その間、女の四肢はついに、男にこたえることを知らなかった。

男のからだの重みは、仮死の状態にあっても、内臓を圧迫したのか、う、う、う……と、うめきを漏らして、身をよじったが——それは、男根にゆすぶられた官能のほとばしりのように感じられ男の情感をさらにあおった。四肢をぐたりと投げだしたままだったし、男の舌唇がいかにふかく吸いたて戯れはいろうとも、女の舌もくちびるも、それにこたえるすべを知らなかったことだ。

おちてののち——

おのれをとりもどしてから、はじめて、左近はそのことに気がついた。

一抹の未練が残ったのは、そのゆえであろう。

左近は身じまいをととのえてから、幕串につるした瓢をとりおろし、のどをうるおした。

女のにおいが口中に残っていた。不潔さをおぼえるよりは、いとしさがまさった。

男の愛撫を受けたあととも思えないほど、そこに横たわった女体は、不思議な清潔感に満たされていたのである。

夜風がさわやかだった。みだらなにおいをさらっていった。雨のあとの木々のにおいが、夜

気を清涼にし、その夜に抱かれるように、のびのびとした肢体を横たえている女忍の膚は、かがり火に染められて、何かの精でも見ているようにまぼろしめいていた。

小姓は突っ伏したままである。起こすことがためらわれる。女への愛着が、すでに左近の胸を占めていたからである。小姓にもだれにもこの女の裸身を見せたくない。

女の膚には血のあたたかみがあった。心ノ臓も正確に鼓動を伝えていた。左近にからだをまかせてなお意識がよみがえらないのは、いかなる忍法であろうか。

左近は、ふとわれにかえった。

(この女、やはり女忍か……)

軍用金の行くえを問わねばならぬ。

この場合、問うとは、責め問いを意味している。

美しいこの膚を、傷つけさいなむ場面を想像するのは、左近には耐えがたい。気のおもむくままに、抱き、満足したあとは捨て去る。戦場往来の非情さに欠けていた。常の女と同一に扱えないあやしい美しさのせいもあった。

女忍という先入感が、好奇心を倍加せしめていることは確かであったが、それだけではない異常な魅力が左近をとらえていたのである。

瓢の酒は、ひとたび冷めた情欲を、さらに強烈にそそりたてた。

左近がひざをにじらしたとき、

「ほう、みんなよう眠ってござるな」
濁み声が幕の外でした。
ここは内幕で、外囲いは、二重三重になっていて、家臣が控えているはずであった。
ところが、その声の主は、だれにとがめられることもなく、ずかずかとはいってきたらしい。
左近が、女体から離れるまえに、ひょいと首が出た。
「やあ、ここにござってか」
ひげづらが笑った。
魯鈍な顔をした巨漢である。二十斤の鉄棒をつえがわりにしている。家来ではなかった。
大垣に入城したとき、つてをもとめて、陣場借りしてきた男だ。諸国流浪の武士や、農民などで、いくさがあると恩讐なく陣場を借りてひと働きし、仕官にありつく、というケースが少なくない。
柳田某とかいった。
「おん大将、お願いがござる」
べたりとひざをおとしたのは、必ずしも礼儀をわきまえていたからではない。
「明朝は、大いに働き、兜首の十や二十は取る所存でござるが、はなばなしき働きをするまえに今夜……」
ちろりと裸女を流し目に見て、

「臍下丹田が凝っておりまするでな、化粧首など買いたいので、その、あすの働きの前金ということで、少々……」
「銭か」
「はあ。われらには、ただで抱かせてくれる女もおらず、このあたりの農家もとんと、あき家で女っけがありませぬ」
いやみたっぷりなのは、横たわった女体があまりにも若々しく、獣欲をそそったからだ。
その獅子っ鼻をひくひくさせて、にたりと片ほおがゆがんだ。左近は目をそらせた。あたかも、左近の体内から放出した腎水のにおいをかいだように、柳田の表情は、卑猥で、嘲笑的なゆがみを見せていたのである。
「いかがでござろう、これほどの美形がほしいとは申しませぬがな、女であればな、よろしいので、銭を……」
「銭はやれぬ」
「兜首一つに小判一枚という話は」
「とってからのことじゃ。兜首どころか、雑兵首もとらぬまえに、われの首が胴から放れたら、なんとする」
「ははは、さようなことがあるものか。この鉄棒が、ははは、雑兵ばら百や二百たたきのめすのは朝飯まえでござるて」

「広言は明夜聞こうぞ」
「銭は……」
「ない」
突き放すように左近はいった。
「女がほしくば、そこにおる。抱くがよかろう」
「へ!? ほ、ほんとうで、抱いて、ようござるかい」
その語尾はよだれをたぐる音とともに吸いこまれた。
小具足を半ば脱ぐのももどかしく、下半身をむき出しにして、
「ちと、目をつぶっていてくだされや」
がばと女体にびょうぶを倒すように、おおいかぶさった。
せつな、ぱっと、左近の足が胴をけり上げていた。
痴鈍な野ら犬はもろにひっくりかえったが、ほえ狂って、身を起こすと、
「何をなさる」
「去れ、野ら犬め」
「な、なんと、われから勧めて、足げりとは横道な、おん大将とて、ほどがござろうぞ」
陣太刀をムズとつかんだのを、
「こうか」

いきなり抜き討っていた。

3

手練である。手もとに狂いはない。言いしれぬ憎しみが、愛刀の切れ味をさえたものにした。
「く、狂われたか！」
柳田某は、口ほどにはなくとも、いちおうの武辺である。
ざっくと肩先を割られて、のめりながら、刃を鞘走らせていた。むなしく火の粉をないだだけで吹きこぼれた血の中にめりこむように倒れた。
すさまじく吹き出た血が、水のように、あたりに散った。
あおむいた女の裸身にしぶいた血は、残酷な美しさであった。
ぼうぜんと血刀をさげたままの左近の目の前で、女体が、白いけもののようにうねったのである。
（正気づいたのか……？）
苦しげに、くちびるをひらき、乳ぶさがあえいだ。波のうちかたが荒くなったと思うと、何やら叫んだ。
左近の耳にも、それは意味不明の叫びとしか聞こえなかったが、ぱっちり目を開いたとき、

「おお！」

思わず、感動が胸を突きあげた。

火あかりを吸ったひとみのいろが、いきいきとして、いのちの輝きとでもいったような強さで訴えたのだ。

「気がついたか？」

左近は微笑した。

「……」

女の目が、ぎくりとしたように、大きくみひらかれた。

左近を見、手の刀を見るや、はっと起き上がった。

裸身に気がついた。あれっ、小さな悲鳴は、常の女のものだった。あたりに着物はない。腰のもの一枚ない。女は、その場にうずくまったが、さらに、乳ぶさを両手でおおった。

女忍の身が、おのれの立場がよみがえったのは、その直後。

左近を見た目に、ふいに、怒りと憎しみが光った。それは、明らかに、〝敵〟の眼であった。

血刀をぬぐい、柳田某をあごでさして、左近はいった。

「そやつが、おまえに理不尽を働こうとしたのでな、切った……」

なぜ、そんなふうにいったのか、あとから考えてみれば、不可解だった。おのれの行為を糊塗しようとするずるさか。

衝動的な、野獣の行為であったとしても、柳田とは違うのだという気持ちが、いわせたのかもしれぬ。

おのれの胸から下腹部へかけて、べっとりと飛び散った鮮血と、柳田の断末魔のすがたが、女忍には、すぐと理解できたらしい。

（なぜ……？）

というふうに、彼女は左近を見上げた。

もとより、左近は次のことばに窮していたのである。

その、一弾指の〝間〟が、女を、女忍に返した。ぱっと、はね飛んだ。

白いからだが、一瞬、敷き皮ごと、はねあがった感じだった。さながら、突然の大地震を受けたように。

一陣の突風が草むらをけたて、万叢一時に蓬起った。女体は、白鳥のように、宙に舞い、頭上に枝を伸ばした喬木に飛びついている。

こずえにひらりと乗った裸身は、黒髪をおどろにふりみだして、左近を一瞥した。

それが最後だった。ほの白くやみに浮かんだ女性裸身は、たちまち群葉のかなたに隠れてしまった。

時間にして、五分とたつまい。女が女忍に返るや、羽をとりもどした鳥にひとしい。左近はぼうぜんとして、見送っただけである。

苦悶のうめきが、地底から聞こえてくるようなすさまじさになったと思うと、はたりとやみ、柳田某は、ふいに動かなくなった。四肢を突っ張り、歯は土をかみ、つめは板に食いこんでいた。

小姓が、正気に返ったのは、その後である。

「小助と伝内を呼べ、こやつ裏切り者だ」

たとえ陣借り侍にしても、ただ無礼を働いたというだけでは士気に影響する。

裏切り者の存在が気がかりないま、たとえ一部にでも、疑惑や失望を与えてはならなかった。

柳田の首を切ると、青竹につらぬいて、陣の前に立てた。

「裏切り者ゆえ、血祭りにあげた、なんじらも気をゆるめまいぞ」

近臣が将士とも眠っていてこの事件に気がつかなかったのは、いうまでもなく、信楽闇夜斎の忍法による。主君三成の狭量が、かれの非凡なワザの助力をみすみす逃がしてしまったのである。

いくさは、その数刻後に始まった。

血とどろ

1

――十五日、小雨降り、山間なれば霧深くして五十間先は見えず、霧あがれば百間も百五十間先もわずかに見ゆる歟と思えばそのまま霧下りて敵の旗少しばかり見ゆることもある歟と思えばそのまま見えず……と、その早朝の情景を慶長年中卜斎記（山川本）は、しるしている。

大垣城から夜陰に乗じて関ガ原へ退いた三成軍に降り注いだ雨は、夜半にひとたびあがったが、丑ノ刻すぎるころから、また、空に鳴り地に響く沛然たる豪雨となって、伊吹の南麓、関ガ原一円をしとどにぬらしたのである。

「時こそよし」

すでに赤坂付近に布陣していた徳川勢の先鋒は、この雨に乗じて行動を起こしている。

いうまでもなく、暁闇をついて西軍の出鼻をくじき、一気に主力を突きくずそうという戦

法であった。

黒田長政、福島正則らの猛将勇卒が槍をかいこみ、抜き身をひっさげて、中仙道を西へ向かった。

前に述べたように、東南一里たらずの大垣城にはあと備えとして、三成の女婿福原長堯が七千五百の手勢をもってこもっていたが、これを無視して進発した。

はじめ長政はちゅうちょして、

「背後を突かれたらなんとする」

「そのときはしんがりが迎え討つまでござる」

功をはやる後藤又兵衛が一喝した。

「右顧左眄するまに、左衛門大夫に先陣をとられまするぞ、合渡においてはわれらが先乗りで島左近を討ちのけたのでござる。こたびに遅れをとっては、ひさしを貸しておもやを取られるがごとき醜態でござる」

福島正則と黒田長政はともに外様だ。

徳川家康への忠誠をあらわすのは、このいくさをおいてほかにない、と思いこんでいた。

長政の父如水は、秀吉すらも一目おいたほどの武辺者で、家康もまだ懐疑を解いていない。単純な長政は、それだけでも負いめを感じていたのである。

だが、後藤又兵衛はちがう。石田勢へ憎しみはない。家康のおぼえめでたきようにという政

治性もない。

あるものは、〝敵〟と定められたものへ向かって、いのちのかぎりぶつかることだけだった。

「黒田、福島が動いたぞ」

ただちにその動勢は味方に伝わった。

「おくれまい。治部少が首はわれらの手にこそ」

同じく外様大名の細川忠興、加藤嘉明、筒井定次、京極高知、田中吉政などの軍勢が、どっと泥濘をけって走りだす。

いちおうの配軍は先鋒大将たる藤堂高虎より命令がゆきわたっているが、イザとなると、将棋の駒を動かすようにはいかない。夜と雨だ。軍律や陣法は、味方の不利にさえならなければ多少の手違いは大目に見られる。一番乗り、一番槍が味方の士気をあおり、敗色を勝利に転ぜしめた例は古今に少なくない。

いわんや、徳川勢といっても、後世のように、幕府の家来、というわけではない。功利情実の与力大名にすぎない。

命令にもいちおうの遠慮がある。

豪雨が混乱を招いた。西も東もわからぬやみだ。ただ一筋道だったことがさいわいした。

それでも、敵の位置も明確ではないし、藤堂高虎が苦慮したのは、内通者を討たせぬことであった。透波を恐れて、はっきりその名を知らせることもできなかったし、内応の密約がかわ

された以外に、戦局しだいで、出方を変える洞ガ峠もいる。

士道をうんぬんするより、

「いくさとは勝つものなり」

勝つためには、いかなる権謀術策も辞さない家康の意を体して、藤堂高虎は配慮を怠らなかった。

赤坂から関ガ原に至るまで、左折する道が四カ所ある。使い番を道かどに立たせて、

「治部少が陣は右手じゃ、笹尾山、天満山に向かわれよ」

声からして叫びつづけた。

左手の南宮山には、この手の大将として毛利秀元の大軍がいる。北麓は吉川広家、東麓には長束、安国寺、長曾我部が連袂して布陣している。

いうまでもなく、秀元は、大阪方の輝元の子だし、広家と一族だ。その広家と、松尾山の小早川秀秋が、腹を合わせて、内通のけはいがある。まちがって、南宮山、松尾山に発砲しては、決断しかねている日和見派まで、敵にまわすことになる。

徳川勢が七万五千、敵がおよそ十二万——互角の戦いでは負ける。地勢的にも要害であり、勝ちめは甘く見ても六分四分、悪くすると七分三分で、まず、望みはない。

内通者こそ、この戦局を大きく転換してくれる存在であった。

雨とやみのなかではあったが、垂井の東方には、西軍の斥候が出張って東軍の動静をうかが

っていたから、

「敵きたる！」

の報はただちに、南宮山山腹の毛利本陣にとどけられた。

垂井の東南、表佐村には長曾我部の先鋒の一隊がいたし、南宮山北麓の宮代村には安国寺恵瓊の手ノ者がいた。

敵きたると聞いて、二陣ともいろめきたった。

「すわっ、迎え討とうぞ」

だが、この手の大将は毛利秀元である。

秀元の采配がなければ、軽率には動けない。

ここに西軍を構成する烏合ノ勢の弱点があった。

徳川勢は、同じく寄せ集めでも、

「徳川どのに忠誠を」

と思う心が士気をあおったし、これに比べて、西軍は、三成のために尽くそう、と思う者は少ない。

大阪城の秀頼とそれを取り巻く権勢のいくぶんかを手に入れようというつもりが、三成という権臣を上にいただいての出陣であるほかは、徳川家康への私的な反感にすぎない。

三成の人徳のなさが、天下分けめのいくさの一方の大将となるには、貫禄不足だったという

しかない。

にしても——

秀頼を奉じて百二十万石の大軍を率いて毛利輝元が当初の決意どおり出陣していたならばこうした混乱と醜状は起こらず、戦局はどう展開していたかわからない。

安国寺恵瓊は、安芸の生まれで、幼時京に出て東福寺の僧となり、長じてのち、故郷へもどって、荒廃していた安国寺を再興してから、毛利輝元に取り入るようになった。

ただの坊主ではない。京は乱世でも争奪の中心であったし、野望のあるかれの眼は、情勢の判断や武将の評価が的確で、輝元も舌を巻いた。

恵瓊は輝元の知謀となった。かれは他へ対しては輝元の臣のごとくふるまい、輝元主従に対しては、不即不離の顧問の地位を保った。

臣従すればただの家来にすぎない。

毛利元就以来の家系は老臣功臣血縁が多く、いかに才知があっても、外様で出世はおぼつかない。おのれの知謀に自信のある恵瓊は、不即不離におのれを置くことによって格を保ち、機をねらったのである。

機会は秀吉の中国攻めのとききた。れいの高松城水攻めに、頑強な清水宗治に死を勧めた功によって、恵瓊は大名になった。

いうまでもなく、織田信長の本能寺の変によって秀吉は急遽軍を返す必要に迫られていたときなのだ。宗治が、応諾し、毛利一族がそれをのんだことによって、秀吉は、山崎にて信長のとむらい合戦を行ない、明智光秀を誅戮し、名実ともに、信長の後継者たる地位を得た。

秀吉が恵瓊の功を高く評価したのは、ゆえなきではない。天下とりの道をひらいてくれた功労者ともいえるのだ。恵瓊がはじめにありついた知行は、伊予で二万三千石であった。

2

すでにかれは坊主ではなかった。頭は法体であり、身に袈裟をまとうことがあっても、武略に徹した大名であった。安国寺恵瓊の名をあらためようとしなかったのは、当時の僧籍が、知識階級だからであった。

学問の場は、朝廷と、万巻の蔵書がある大寺院にかぎられた。文盲粗暴の荒大名のなかでは、かれの学問はぬきんでていた。

大名となって、天下に知られた連中とひざを交えるごとに、かれは自信をつけていった。

かれが天下有数の大大名たらんと野望を起こしたのは否めない。事実、一歩一歩、その理想に近づいていけた。放浪児上がりで、戦塵のなかに育った秀吉にとっては、恵瓊の博学は、ちょうほうだったし、いちおうの尊敬を払う価値があった。恵瓊は十二万石の身上になっていた。

野史は、この恵瓊が三成にくみしたことを、

——もし勝利きたらんには、天下を私する野望を秘めしならん……としているが、そこまで考えていたかどうかわからない。

ただ、豊家への恩顧だけで、首をかける男でないのは、事実だ。

これほどの策謀の男が、家康と通じて二股掛けなかったのは、どうしたことであろうか。

坊主上がりの欠点が出たのか。このいくさの勝利を確信していたとすると、読みが浅かったといわざるをえない。

だが、それも結果論で、当時の混沌たる情勢では、勝敗の帰趨を見ぬけなかったのが当然かもしれぬ。彼我の人数の差から、西軍の敗戦を信じろというほうが無理だ。

裏切り者の存在を——その可能性に思いいたらなかったところに、恵瓊の一生の不覚があった。

南宮山の主軍毛利秀元に出馬を促しにやったのは、敵の進発を知ってもなお、動く様子が見えなかったからである。

恵瓊ははじめ、床几に腰かけ、片手に采配、片手に数珠を握って、待っていたが、しだいにいらだってきた。

「いましばし、待たれるようにとのご詞でござる」

使い番の返事に、一度はうなずいた。

四半刻のちに走った使い番も同じ返事を持ってきた。

「なんと！　宰相殿は、なんとなされてか」

その間も、くしの歯を引くように、報告がはいってくる。

東軍はすでに相川村を過ぎたとのことだ。

三度めに同じ返事に接するや、恵瓊は業をにやして立ち上がった。

そりこぼちた頭にはち巻きをしめ、漆黒の豪壮な物具をよろった恵瓊は、六尺ゆたかのうわぜいに、肥満体だったから、兜を猪首にかぶればみごとな猛将ぶりであった。

兜は小姓に持たせて、大薙刀をかいこみ、肥馬をかって本陣へ乗りこんできた恵瓊の坊主頭からは、文字どおり湯気がふいていた。

「いかがなされてか、かくするうちに、敵はわれらが内ぶところへはいりこむばかりでござるぞ」

恵瓊はずぶぬれになっている。下半身はどろまみれだ。本陣は急坂の上にあり、途中から馬をおりたためだ。

三つ星に一つ引きの定紋を染めぬいた陣幕の囲いに板と杉皮で屋根をふいたなかで、秀元は子細らしく、絵図をひろげ、赤と黒の陣駒を動かしていたが、あわてたように、絵図をわきへやった。木駒が乱れた。

「せかれな」

秀元は息を太くいった。

「ご坊にせかされるまでもない。広家が陣へ使いをやったところじゃ」

「ご悠暢なことを！　ぐずぐずしていれば包み討ちの陣型を乱され、無念の臍をかまねばなりませぬぞ。いまなら、まだまにあいましょう、進発の下知を」

「くどいのう。蔵人には進発を命じてあるわ、隊伍を整えているのであろうか……」

「……」

「かの軍が動かねば、われらは動けぬ。この雨とやみじゃ、同志討ちはさけられぬぞ」

もっともだ。恵瓊としては、それ以上、言及することはできない。

「広家が動けば、長束も動く。われらと、長曾我部にて敵の背後を断ちまする」

こう言い置いて、恵瓊は陣地へはせ帰った。

このときまでは、まだ秀元の心中を察するにはいたらなかったのである。

秀元の若さと、意気慷慨は、内通などの疑いをいだくには、あまりに純粋に見えたのだ。

だが、事実は、すでに広家の意を体して、中立を意図していたのではないか。

いたずらに時をかせいでいる広家の内心を知り、その勧告に応ずる気持ちが働いていたのではないか。

恵瓊の焦燥をまた、長曾我部宮内少輔盛親も感じていた。

一代で四国全土を切り従えた元親の子だけに、弱冠二十七歳でも、勇武は父に劣らぬ。

「宰相どのは、雨やみをしてござるか、さなくば刀のさびおとしでも楽しまれてか」

血気にまかせて、罵詈する声が幕外に近づいたとき、秀元はあわてて、食べ終えたばかりの割籠をまたひき寄せた。

玄米と麦の半々の陣中弁当である。

「おお、宮内少輔どのか」

秀元は、はしを手にしたまま、盛親を迎えて、

「出陣前の腹ごしらえ、空腹では、いかほどの働きもできずにおくれをとる」

はしが割籠のなかでからからと音をたてた。

じろりと、盛親は見やって、

「腹ごしらえできなば、ただちに下知くだされい。われらはすでに馬に鞍置いてむち打つばかりになっておりますぞ」

たたきつけるようにいって外へ出ると、盛親は、供の村谷権之助をふりかえって、

「宰相どののから弁当、このいくさは敗れたぞ」

あたりかまわぬ声だったので、毛利の侍たちが、むっとけしきばんだ。なかには、刀に手をかけた者さえいる。

権之助は、それらをぎろりとねめつけて、

「いくさは機を尊ぶものぞ、総見院（織田信長）殿今川義元を討ちとって天下人とならせたも

うたも、桶狭間で機をのがさざったゆえじゃ。さように、宰相どのに語り聞かせられるがよい」

武辺一徹の権之助のわれ鐘声は、しかし、秀元の帷幕には、むずがゆく聞こえたであろう。機会が秒刻に去っていくのもわかっている。広家におし止められて、東軍が陣立てを整えるまで待っているのだ。

内応の確約はしないまでも、広家から自重をしいられて、から弁当をつかううちに、裏切りの決心がしだいに心中にふくれあがってきていたのである。

3

「南宮山では、何をしているのだ、敵勢を進むにまかせているぞ」

石田三成はいらだって、立ったりすわったりしていた。

豪雨は降り疲れたように勢いを弱め、息づきながら暁闇をぬらしている。

「左近、毛利宰相はのろしに気づかなんだか」

「たびたびの使い番にも、要領をえませぬ。かくなっては、狭撃はあきらめねばなりますまい」

「むう、裏切ったか」

「さ、そこまでは……毛利宰相におかせられては、さほどの狡智ありとも思えませぬ。が、蔵人が前衛にあれば……」

「広家が！　くそ！」

三成らしくもない下品なことばが走った。

かねて合い図ののろし三発を打ちあげたのにも、吉川蔵人軍が動くとも見えぬのに臍をかむ思いで、

（中納言よりも、蔵人に眼をつけておくべきだった）

と、左近は思った。

中納言に裏切りの気持ちがあったとしても、南宮山の大軍が動けば、三転、変心してしりえについて働くはず――。

その吉川蔵人広家が前面にあって、むしろ自軍の動きを制御するように動かないのだ。

「かくなっては、近まに引き寄せ、出鼻を打って、決戦に持ちこむしかありませぬ」

「よし、夜の引き明けに、討ちかけようぞ」

ただちに、松尾村一帯、西軍全部に指令が飛んだ。

北方、笹尾山の三成麾下、蒲生郷舎から小池の島津、天満山松尾村の小西行長、宇喜多秀家、下藤の戸田重政、木下頼継、大谷吉継、平塚為広、松尾山山麓の赤座直保、小川祐忠、朽木元綱、脇坂安治、小早川秀秋――

裏切りの疑いをいだきつつも、中納言秀秋の動きを、大谷刑部吉継の牽制にまかせて手をぬいた理由はもう一つある。

関ガ原南方柴井のあたりに派遣されていた斥候がはせ帰ってきて、

「福島左衛門の手とおぼしき旗が松尾山へ向かっておりまする」

黒田、細川、井伊の手は、笹尾山を目ざしてきている。松尾山へ豪雄の福島正則が向かったということは、〝中納言内応〟の疑いを解かないまでも、いささか愁眉をひらかせたのである。その放心が、実は、大いなる誤りであったことに気がついたのは、小半刻とたたぬうちである。

暁闇を未練げにぬらす霖雨は、けむりのように動き、晴れ間を見せるかと思えばまた林をやみに塗りこめて、彼我の距離を不明にした。こずえを騒がせる伊吹颪に雨気が吹き払われたあとも、人馬をかすませて霧がわいてきた。

「先手は福島正則、中備えに藤堂、京極、後備えは寺沢、本多にて、養老街道を越え、寺谷川にさしかかっております」

濃霧をやぶって駆けこんできた斥候の報告に、大谷吉継は、かっと眼をみひらいて、

「貝を吹けい、進み貝ぞ、左衛門勢の死体をもって河原を埋めてくれん」

ぎらぎらと炎を吹かんばかりの双眸は、しかし、どれくらい見えるのか。

不治の病は、すでに四肢を犯し、容貌まで変えていた。鼻もくずれ、視力も弱まっている。

「このいくさこそ、腐りはてた身の死に花を咲かせるものぞ」

死出の旅路の心ばえは、無垢の白絹をもって行人包みとなし、練綾の小そでの上に、むら蝶を墨書きした鎧直垂を着こみ、金箔の采配を手にしていた。

四方取りはなした竹輿に乗って、指揮をとって、病軀とも見えぬ意気軒昂たるものがあった。

藤川台に平塚為広、戸田重政らと万全の布陣を見まわりつつ、

「金吾殿の挙動、やはり黙過ならぬ。二心と見てもまちがいない」

「したが、いまだ、怪しの動きがござりませぬが」

せがれの大谷頼継がいった。

次子の吉胤が、

「いや、まだ安心ならぬ。福島勢が近づいたというのに、一発も放とうとせぬこそ、おかしい」

その疑問は、桃配山に本陣を設けた家康のほうでも感じていた。

「南宮山も松尾山も、内応の約を果たさぬは、わしをたばかったのか」

日ごろのあから顔をいっそう赤くして、いらいらとつめをかんでいる。危機に望んだとき、家康の癖であった。拇指からはじめて、食指、中指とかんでいく。小指までいくと、また拇指が気になって、めぐってくる。いい案が浮かぶまでは、これをくりかえすのである。

「毛利宰相も、金吾中納言も、しりの青い小せがれのくせに、わしをたぶらかしたか」

かみ切ったつめを、ぺっぺっとあたりへ吐き散らしていたが、

「毛利宰相は蔵人の押えあれば、まず大事あるまいが、金吾中納言に違約されては、容易ならざる戦いとなろう」

黒田長政がひざをにじらして、

「その儀なれば、それがしの家臣が慫慂にまいっておりまするゆえ、翻心あることはまず……」

「わかるものか、治部少に媚びる老臣ども、その者を切って刃向こうやもしれぬぞ」

黒田長政は沈黙した。家臣大久保猪之助が秀秋の決断を促すために、ひそかに潜入していたのは事実だ。

猪之助は、そのころ、秀秋の先鋒平岡重定の陣に至って、西軍攻撃を促していたのである。

家康にしてみれば、軍勢の多寡に心痛があった。中納言秀秋の軍勢八千の人数もさることながら、その占める位置と他へ及ぼす影響が、少なくないのだ。

（金吾中納言が味方すれば、こっぱ大名どもも、しりえに従うに相違ない。軍勢の格差は逆転する）

西軍の動揺は目に見えていた。

「時機を失してはならぬ。いっそ誘い鉄砲を撃ちこんでみい、撃ちかえしてくるようならば、内応はあきらめじゃ、吉左右、寸刻も早いがよい」

「承りました」

久保島弥兵衛がすくっと立った。

家康の換え馬、葦毛の逸物を賜ると、ひらりと飛び乗った。

桃配山のすそから十九女ガ池のほとりまで一気に駆けぬけると、本多忠勝の陣所へ乗りかけて、

「急ぎでござれば、乗り打ちご免候え。誘い撃ちのご諚でござる。鉄砲ノ者四十人がほど拝借いたしたし」

割れ鐘声である。

ただちに忠勝の麾下、瀬長兵衛の足軽頭湯田原伝内が四十人の鉄砲組を率いて駆け出る。

「弾丸をこめたか、つづけ」

どろ水が葦毛の背までよごしていた。切り火なわをくるくるまわしながら、鉄砲組も泥濘をけって走りだす。その小さな火ノ輪の群れが、濃霧ににじんで、幻想的に見えた。

松尾山のふもとでは竹やぶにひそんだ中納言の麾下の松野主馬が、これを見るや、

「来たぞ！」

と、輩下へ叫んで、槍をひきそばめた。

だが、まっすぐ向かってきたその火ノ輪の群れは、射程距離にはいるまえに、さっと左へ曲がった。

霧は地表をおおい、山も森も暗い。三間の近くでも、人影はおぼろであった。

「目を放すな、川を渡ったら、撃ちこめ」

主馬は注意を与え、自身も、眼はかなたへ向けたまま、火なわの灰を手で払った。

藤川は霧の底にある。渡河すればしかし、わかるはずであった。この台地に布陣するまえ、鳴子仕掛けをしている。

だが、火ノ輪の群れは左へ折れ、川岸を半町ほど下ると見えたが、そこで停止した。

「はて、あそこを渡るつもりか」

「あのあたりは渡れませぬ」と、かたわらの男が答えた。「早瀬でございます。こちら側も岩棚になっておりますゆえ、たぶん、淵ではないかと……」

そのことばが終わらないうちに、轟然たる音響が台地をゆるがし、霧を裂いて銃火がはしった。

4

号令は聞こえない。が、乱射ではなかった。二十人の銃隊二段備えで、いっせいに発射したのである。

霧中にひらめいた銃火は、一列に並び、岩棚に命中して、表面を砕いた。撃ち損じではなかった。明らかに、岩の表をねらっている。その硝煙が濃霧を吹き払うように、熱気と臭気が立

ちのぼり、たゆたうと見るまにまた、銃火がひらめき、轟音があたりをふるわせた。

まだ当時の銃は早込め早撃ちはできない。二列になっての上下二段備えの連続発射であった。

鉛玉を浴びたのは、同じ岩であった。

ほとんど同じ場所に一列になって命中し、まえよりは多く、砕石を飛ばした。

さらに、三発、四発——二段備えの連射もあざやかな二発撃ちは、三河鉄砲隊の威力を誇示するものだった。

「——ちえっ、おどしではないか」

「あほうなことを」

と、どなった者があった。

「おどしで恐れると思うているのか、家康のたぬきめが」

「たぬきの腹鼓にしかならんわい」

どっと笑いが揺れた。

緊張していたところだけに、堰が切れたように、笑いくずれたのである。

松野主馬も苦笑した。が、すぐにほおをひきしめて、

「ゆだんすな、故意に岩をねらったのだ。かなたに気を引いて、撃ちこんでくるぞ」

その直後に全山をゆるがして起こった銃声と喚声くらい主馬を驚かしたものはなかった。

「撃ってきたぞ……？」

叫んだ語尾が口のなかで立ち消えたのは、音も声も——そのすさまじい騒音は、前方の河原からではなく、背後の山腹から起こったことに気がついたからであった。

「どうした!?」

「敵が、うしろへまわったか」

「まさか？」

不可解な異変の突発に、騒然となった。

夜はまだ明けぬ。雨水をはらんだ暁闇と濃霧の山である。不安はたちまち恐怖で士気をかき乱した。

間断ない銃声と、喊声、叫喚、どどっと馬蹄の乱れ走る音——

「騒ぐな、気を静めい、敵に乗ぜられまいぞ」

主馬が声をからして押えているところに、急坂をさか落としに駆けおりてきた騎馬がある。

「松野どのはいずくじゃ、松野どの」

霧におぼろな影が連呼してくる。

「おお、使い番の村上うじぞ」

耳さとい者がいった。たしかに村上右兵衛にちがいない。

「ここだ、あの音は、なんとなされてか」

「松野どの、主君は江戸内府にお味方あそばされしぞ」

「な、なんと……さようなことが……」

「矢は切って放たれたのじゃ」

興奮した葦毛の馬上で、御しながらの上意下達である。

「ただちに藤川台へ進まれよ。目ざすは、大谷吉継の陣じゃ」

「たわけたご諚かな。刑部はお味方ではないか」

「敵だと申しておるのがわからんかっ、石田治部少が首をあげた者は、一国一城を賜るであろうぞ」

「武辺たる者、一国一城のためには信義を捨ててもよいものか。この際となっての裏切りは、武辺のよくせぬところ。江戸内府に媚売るとは、まさしく楯裏の返り忠と申すものじゃ」

「くどくどと、何を申すことか。主君のなさることを否むか」

「いなとよ。主君、主君たらずんば臣、臣たりえぬところぞ。いまさきまでの味方を討ちたいとあれば、討ちなさるがよい。われらは、あくまで、江戸内府のたぬきを敵と思うて討つまでのことよ」

松野主馬のことばに、おう!!　と、賛同の声があがった。

じろりと、かれらを見まわした右兵衛は、

「おぬしは知らぬ。知らぬゆえに、我を張っておる。主君の内応は、いまに始まったことではない。最初からのお考えじゃ」

「だが、われらは聞かなんだ」
「敵をあざむくには、まず味方からじゃ、孫子の兵法も知らんか！」右兵衛は馬上から大喝して、
「中納言の家来ならば、従え。わしの役目はこれで済んだ」
馬首をかえすと、たちまち濃霧のなかに消え去った。
その問答のあいだも、銃声と、喊声はつづいた。
「いかがなされます、ご諚とあれば、松尾山を討たねばなりませぬ」
老臣の藤十は、父の代からの忠実な下人である。古風な無私奉公の気持ちはかたくななばかりだ。
「いやだ」
と、主馬は言い放った。
「江戸内府を討つとの仰せゆえ、その気構えで、関ガ原へ望んだのだ。出陣前ならいざ知らず、いくさ場において、味方を不意打ちなど、武辺たる者、ようせぬわい」
主馬は鉄砲をさか手に持ってふりあげるや、かたわらの大木へ、がっとたたきつけた。
軽便な六匁玉筒である。剛力の主馬の力でたたきつけること二度、三度！　たちまち照門が飛び、銃身が裂け、二つに割れて飛んだ。
啞然としている足軽たちの前で、主馬は折れた鉄砲を地面にたたきつけるや、

「味方も撃てぬ、敵も撃てぬとあれば、鉄砲など無用の長物」
からからとうつろな笑いを残すと、くるりと背をむけた。
「和子、どこへ？」
藤十があわてて追いすがるのへ、
「おれにもわからぬ、なんじらは、どっちでも好きなほうへ味方するがよかろう。ああ、いやだいやだ」
ひろい肩幅を見せてどんどん歩きだした。
藤十もあわててあとへつづく。ほかにも数人が従った。粗暴であるが、その武断的気質を慕う部下が多い。
残った者たちは、ぼうぜんとして、どうしていいかわからない。がやがや騒いでいる声も聞きとらせないほど、銃声は高くなって、あたかも、銃火を怒ったようにまたもや細雨がさーっと吹きつけてきた。

関ガ原非情

1

金吾中納言の裏切りは決定的であったが、しかし、その時期についての約束はなかった。こうした場合、そこまで予定はできなかったし、徳川家康としても、まず裏切りの実を見るのが先だ、という疑惑を払底しえなかったのであろう。

久保島弥兵衛に命じた誘い鉄砲は、その決断を促したのである。

中納言秀秋は、いっせい射撃を耳にするや、床几を倒さんばかりに、驚いて腰を浮かした。なにやらそのとき口走った。

近侍した小姓には、

「家康がおこった！」

といったように聞こえた。定かではない。額に青筋をくねらせて、秀秋は叫んだのである。

「敵は笹尾山にあるぞ。前衛は藤川台じゃ、刑部の首をあげた者を一番槍とするぞ」

秀秋の側近は、すでにあるじの逡巡を見ている。命令一下、でく人形のように采配に従った。

村上右兵衛から決断を聞いた北麓の先鋒は、平岡重定と稲葉正成である。

おのおの、二百人ずつの精鋭を指揮して、てぐすねひいて待機していたが、銃口を藤川台に向けると、いっせいに火ぶたを切った。

大谷刑部の陣営の驚愕はいうまでもない。

刑部の杞憂は現実となったのだ。家来たちは半信半疑だっただけに、もろに側面からの鉛玉を食って、数十人がぶっ倒れた。

刑部の銃隊が、あわてて、銃口をむけなおそうとするところに、矢羽をうならせて、しのつく雨のように矢が落ちてきた。その矢の雨を追いかけるようにして、どっと鯨波が起こった。

秀秋の軍勢八千は、松尾山の山頂から中腹にかけて布陣していたのだ。

大谷刑部の藤川台は眼下にある。八千の軍兵は、槍を振り、刀を抜き放って、さか落としに襲いかかったのである。

「ぬ！　やはり裏切ったか」

むっくと身を起こすと、刑部は四方輿の手すりを鉄扇で打ち鳴らして、

「かつげ、走れ、刑部の死に場所はこの地と決まったぞ、怯れて金吾めに名をなさしむるな」

刑部は輿の上で横になっていたのである。

おう、と屈強の足軽たちが肩をあげた。輿は走りだした。

間断ない銃声と矢羽の音と、喊声と怒号、悲鳴、すさまじい混乱であったが、刑部の輿を見ると、

「おお、殿がおわすぞ、ひるむな」

「巻きかえせ、たかが、中納言のへろへろ侍ども」

「裏切りどもをぶった切れ」

一騎当千の武士たちである。無傷の者はもとより、矢玉に傷ついた者も、ふるいたった。

刑部の騎下はしかし、六百に満たない。不意打ちで二百人近くが倒れたいま、山腹をまっくろにおおい、山津波のようなすさまじさで襲ってくる大軍は、二十倍もある。

味方だっただけに、お互いの人数は知っている。秀秋のほうでは、

「ひともみで」

と、たかをくくっていたし、刑部の兵は、

「死ねばいいのだ」

覚悟している。三成に慫慂されて味方と決まったとき、すでに大谷吉継の心中には死がある。家臣もまた、その気持ちを理解していた。

当世流の栄達を願う者はすでに主君を見放して離れ、残った六百余の士卒、主君のもとに死

ねることを悔いない武辺者ばかりであった。

「ムザとは死なせぬぞ、金吾めを討ちとって、地獄へのみやげとせん」

豪毅不屈の刑部少輔吉継の雄姿は、かれらをふるいたたせずにはいない。

「貝を吹け、一番貝じゃ」

「おう」

湯浅五助は背負った法螺貝をとりなおして、口にあてた。たちまち、びょうびょう、のどかな音が細雨の暁天にのぼった。

気ぜわしく狂騒的な戦場の騒音叫喚のなかでは貝の音など消えてしまうようにみえるが、そうではない。かえって、のびやかなふくらみのある音が、余韻をひいて聞こえる。

一番貝はこのことあるを察知してあらかじめ通達してある。すなわち、甲州流にいうところの〝逆転比翼〟の陣型だ。

前面の隊が、右側の端を基点として大きく草を掃くように四半円を描いて、小早川勢をむかえる態勢になったのである。

「太鼓！」行人包みに半面をおおわれていて、声がくぐもっていた。刑部はぐいとひきあけて、

「乱れ打ちじゃ」

くちびるが黒くただれたまま固まって醜くゆがんでいる。そのくちびるに雨が降りそそいだ。

どろどろと太鼓が打ち鳴らされた。腕のかぎり乱打する音にあおられて、銃隊は折り敷くや

切り火なわをもって連射しはじめた。

いくさ慣れた吉継は、少数の銃隊の威力を増すために〝早鉄砲〟と称して二つのくふうをしてある。

鉄砲足軽らになわだすきをかけさせ、そのなわめに玉薬の早合わせをはさませた。いちいち玉薬を計って入れねばならないのだから、手間がかかる。その煩を省いたのである。火なわは普通一本であるが、手ごろな長さに切りそろえ、使いやすくした。

この二つの創案が、刑部の鉄砲隊を当時並びないものと喧伝させたのである。

操作に手間取るゆえをもって、〝早箭〟にかなうものなし、と鉄砲をけなす者も、この〝早鉄砲〟には瞠目した。

少数の鉄砲隊を、なめてかかった小早川勢は、この銃火にさえぎられて、ばたばたと倒された。

山津波のようなすさまじさで坂を駆けおりてきたのが、藤川台へ着かないうちに、なぎ倒されたように、のめり倒れる。雨で草はすべり、土はどろになっている。だが、そのせいではなかった。八千の大軍が山腹をおおってくるのだ。ねらいは不確かでも、必ずだれかに当たる。

早鉄砲の威力は、俄然、発揮された。

記録によると、三列になって、四発ずつ撃ったという。さながら、上げ潮が突然の変異で、ひき潮になった壮観さだった、とある。

四方輿に胡坐して見ていた刑部吉継は、

「いまじゃ。ソレ、槍を入れろ」

竹てすりたたいて叱咤した。

「おう！　われらが槍先に」

われ鐘声でほえるような応えは、長槍をふるうこと苧殻のごとし、つえとなり、長刀となり、水車となり、怒濤となる、手八本あるにも似たり、と嘆称され、槍ノ蛸兵衛、の異名のある若林八兵衛であった。

その声に合わせるように、二つ貝の法螺の音が高々と鳴った。銃隊は左に、弓隊は右にひらく――すなわち、鋒矢ノ陣型である。

大門を八文字に開くにも似て、最も果敢な陣法とされているが、これは一つまちがうと、敵に本陣を突かれるおそれがある。敵前で内ぶところをあけるわけだ。あけるのと、突出するのと、ほとんど同時でなければ敵に乗ぜられる。したがって、敵が浮き足だった〝時〟をねらう〝目〟が必要なのだ。

よく訓練された槍ノ蛸兵衛の槍隊は、全山をゆるがすばかりのおたけびで、浮き足だった小早川勢に突っこんでいった。

累々たる死傷者を踏み越えるのに、一片の感傷もない。むしろ、ぬれた草やぬかるんだ土に馬蹄をとられなくてすむ。それでも、下から刀槍をふるう者もいた。槍の穂先が、石突きが、

のどを貫き、顔を砕いて、しゃにむに攻めのぼった。

大勢は、浮き足だっては、とめどがない。十人や、二十人、豪勇の者がいても、これを引きとめるわけにはいかない。裏切り者のうしろめたさが士気をゆるめていたことも否めない。

「くらえ！　くらえ！　くらえ!!」

兜ははじめから捨てている。怒髪天を突かんばかりに、目じりを引きつらせ、阿修羅のように八兵衛は槍を振った。

血が雨中に飛び、生ぬるく顔にしぶく。

それをさけようともしない。突き、なぐり、切り、なぎ倒し、たたき伏せる。槍は突くだけのものではないのだ。頭から胸へ、まっかに鮮血を浴びて、血達磨のようになった八兵衛を見ると、だれもが、死にもの狂いに逃げた。

「この機ぞ、突け、突け、金吾の胸板を貫いてやれい」

輿をたたいて叫ぶ大谷刑部吉継、右手には大太刀を抜き放っている。一太刀なりとも浴びせるつもりだ。

2

このすばらしい逆襲は、頼みとする小早川勢の裏切りに、一瞬、ぼうぜんとなった他の武将たちを奮起させるにじゅうぶんだった。

「刑部どのにつづけ！」

まず平塚因幡守為広が、手勢六十余騎をもってぱっと駆けだす。くずれたった小早川勢の側面に迫った。

前面と側面からの槍に突きくずされて、陣型もなにもない。ばらばらにのがれ走る。

「手を休めるな。黄門が首級とるまでは、追え、追え」

調子に乗った若林八兵衛は、栗毛を足と腰で御しつつ、血でぬらつく長槍を水車のように振りまわしている。

何人刺したか、何人倒したか記憶にない。名利を捨てた武辺者ほど、強いものはない。

小早川勢の敗走も、ゆえなきではなかったが、秀秋を看視に来ていた家康の旗本奥平貞治は、ぎりぎりと歯がみして、

「さても見苦しき退き槍かな、ふがいなさも窮まれり、いくさのしようを見せてくれよう」

単騎、くまざさをけって、若林八兵衛に突きかかった。

八兵衛と面識はない。かれが指揮者であり、その奮戦が士気を鼓舞している姿を見たからだ。この男を仕留めれば、優勢をくつがえせる。

「徳川家の奥平貞治なり、見参」

疾風のようにおどりこんできた貞治の穂先が、八兵衛の胸をかすめた。胸板の金具がしゅッ

と火花を吹いた。

「よき敵」

朱瓶から出たような八兵衛の仁王顔がにたりとした。

その顔目がけ、びゅっと槍が伸びる。戛然と、血槍がこれを払った。

はねられるや、その勢いを利用して一転、石突きが胸板へ――

これをさけもせず、猛然と馬を寄せざまに力いっぱいたたきつけた槍の千段巻きが、貞治の首すじを打った。貞治は桃なりの兜を着し、白ひげを植えた面頬をつけていた。向背定かならぬ秀秋の陣営で顔を見られぬためであった。

猪首にかぶった兜のしころの上から、すさまじい力でたたきつけられて、馬上によろめいた貞治、石突きの伸びが足りなかったと知ったときは鞍から足が離れていた。

長槍の遠心力による一撃が、どれほどの打撃力を持っているか。八兵衛はたたき落としたと信じた。戦闘は直感で動きを支配する。槍を左に持ち直して、右手を鎧通しに走らしたのは、八兵衛の心に一瞬浮かんだ功名心か。功名心と断定するのは無理解にすぎよう。血煙と、刃風と、叫喚と――おのれを喪失させる混乱のなかで、名のりをあげた兜首が、戦場往来の武者を反射的に〝首をかく〟動作をさせたといってよい。

そのことがしかし命とりになった。

まっさかさまに、泥土の上にもんどり打ちながら、貞治が必死に投げた槍が、八兵衛の大腿

部を貫いたのである。

「しゃっ！」

ふとみの槍がぐさりとはいった。

鉦子は、肉を貫き、鞍をすべって、馬を傷つけたか、栗毛はかん高くいなないて棒立ちになった。

さすがの八兵衛もたまらず、宙へ投げ出された。

が、貞治の上へみずから落ちたのは死に望んでも執念の武辺。鎧通しを握ったまま、体重をもろ手にこめて、貞治ののど笛を突き刺していた。

この凄絶な一騎打ちをまのあたり見た横田半介が、八兵衛の背中に負いかぶさるようにして、首をかいた。八兵衛も六尺ゆたかの巨軀だし、三十貫はあろう猪首だ。わき差しは骨にひっかかった。髪をつかんで、のこぎり引きに切ろうとする腕を、八兵衛ががっしりつかんだ。首は半ば切られている。動脈からすさまじく血がはしり出、半介の腕を染めた。

すでに八兵衛は死んでいた。腕をつかんだままであった。

貞治も虫の息で起き上がろうともがいていたが、八兵衛の巨体はそれをさせず、火炎不動のように凝然としたままだった。

三つどもえの血どろのなかへおどりこんできた平塚為広が、ものもいわずに、背後から半介の首をなぎ払った。

雨中に、三尺、血どろ首が飛ぶのが見えた。
勢いに乗った大谷勢は、平塚、木下、戸田などの軍勢を合わせて、数町余、小早川勢を追い上げた。
あとに残った累々たる死屍は、三百七十余を数えた、とある。
寡勢、よく盛りかえして、ほっと一息ついた大谷吉継のもとへ、平塚為広より血のしたたる首級がもたらされたのは、その直後である。
「もはや、ご出立のころあいかと存じ候」
と、使者はいった。
「因幡守よりおん手みやげとして、首一つ……」
冥土のみやげになされたし、というのである。
無念首は横田半介。きゅっと食いしばった歯の間から、まだ鮮血がしたたりこぼれている。
その髷に短冊を結わえつけてあった。

名のために捨つる命は惜しからじ
ついにとまらぬ浮き世と思えば

と、あった。
大谷吉継、読みくだして莞爾とした。壮烈な意志が読めた。おのれも死ぬつもりだからこそ、吉継に見苦しくない往生を勧めたのである。

「因幡どの、芳志かたじけなし、おっつけ冥土において再会せん」
筆をとって、さらさらとしたためた。

契りあらば六のちまたにしばし待て
おくれ先だつことはありとも

六のちまたとは、いわゆる死後の六道のつじである。
この短冊を使者に渡したのだが、使者は吉継のもとから走り出たときもろに銃弾を食って馬上から転落している。
小早川勢が盛りかえしのいっせい射撃。ふたたび、雨あられと西軍の頭上に鉛玉が降ってきたのである。
寡勢をもって、多数に勝つには、精鋭の士気と、用兵の巧妙さ以外にない。奇兵を用いるには、夜はすでに明けんとし、敵はさいぜんまでの味方にして、われは山下にある。
天ノ時と地ノ利を失い、人心また腹中を知る。
奇兵をもってせんもおそく、地ノ利を転ずるもならず、しこうして、われに二十倍の敵である。勝敗はもはや疑いなかった。
さらに不破ノ関あとに布陣していた脇坂安治、朽木元綱、赤座直保、小川祐忠らは、この小早川勢の突然の味方襲撃に、
「気ばし狂うてか」

一時は驚いたが、軍勢の多寡がただちにかれらを理性的にした。

（いくさは勝つためにするものぞ）

乱世的処世術にたけていたのか。

「それ、刑部を撃とうぞ」

脇坂安治の鉄砲隊が、小早川勢の反撃に乗じて火ぶたを切ったのが、決断に踏み切らせることになった。

「遅れるな、刑部の首をねらえ」

「刑部の首級あれば、徳川どのもご寛恕くださろうぞ、つづけ」

朽木元綱は槍隊を前面に立てて、脇坂の隊の横をすりぬけていく。

小川祐忠は宇喜多秀家の陣場へ、赤座直保は大谷吉勝の陣わきの坂を駆け上がった。迂回して大谷吉継を突こうというらしい。

だが、吉継は弱将ではない。はなばなしく死ぬことだけが、いまのかれに残された武辺の意地である。軍勢の中核に驕を進めて、

「死ね、死ね、いまさらに命を惜しむまいぞ、死ね、武士らしく死のうぞ」

あるじの意を体して、足軽らはまっしぐらに怒濤のような小早川勢に突っこんでいった。

3

大谷刑部吉継からの返歌を、平塚為広が受けとったかどうか定かではない。受け取って勇躍小早川勢に切りこみ、討ち死にをとげたという説と、使者が馬から落ちて、徒歩で駆けもどったときは、すでに敵味方を弁じがたい異常な混乱のなかで、手渡すこともできぬうちに、

「平塚因幡を討ち取ったり……」

昂然たる叫びとどよめきを聞いた。

士魂とはいえ、勝ちめのないいくさに没入できるのは、一時的な精神異常といえる。狂気だ。血臭と叫喚の死魔の跳梁は正気を失わしめるが、台風の目のように、ふっとさめることがある。

主君が討ち取られたという事実は、この男に正気をよみがえらせた。恐怖にとらわれた。旗差し物を折り捨てると、兜をかなぐり捨て、顔にどろを塗って逃げることにした。刑部吉継の返歌は、のちに敦賀の墓所にだれとも知れずもたらしたことで世に出たのである。

因幡守為広を討ち取ったのは、小川祐忠の部下樫井太兵衛となっている。

為広討死の報は、吉継にも最後の時をもたらした。

落首三個を腰にくくりつけた湯浅五助隆貞が、吉継のもとへ駆けもどってきたのは、すでに

東天紅が雨を浮きあがらせて、東軍をふるいたたせるころであった。

小早川勢が盛りかえし、朽木らがこれに応じて西軍は収拾しがたい混乱となるを知るや、

「一気にたたきつぶせ」

家康の采配一下、前面の東軍は、いっせいに鯨波をあげ貝を吹き、鼓を打って押し寄せていた。

裏切りの軍勢を相手にするだけで精いっぱいの大谷吉継は、為広の討ち死にを聞き、ようやく、死の時を知って驕を林のなかにとどめており立つと、

「ころあいか」

空を仰いでつぶやいた。

「せめては、徳川勢に一太刀むくいてくれたかったが……かなわぬ願いか」

慨嘆を哄笑に変えて、どっかと吉継は草むらに腰をおろした。草はしとどにぬれ、木の根かたに白く点々と小さな花がこぼれている。

はぎの花であった。小さないのちが、人間の醜く凄惨な死闘のかげにひっそりと咲いている。

かつて知らなかった感情が、ふっと、戦国武将の胸を横切った。腹巻き（鎧）を脱ぐ手がとまった。

義に死ぬることを本懐とした武辺者が、このひそやかな、しかし真摯ないのちの営みを知って、たじろいだのである。

（おれの生きかたは……どこかまちがっていなかったろうか？）

その答えを知ることは、かれに許されなかった。わあー、わあーっ、と喚声と銃声、人馬の肉弾相打つ響き——天下を二つにわけた修羅の場は、敗戦の武将の胸にふときざした感傷をむざんに蹂躙してしまう。

「殿！」

湯浅五助が、顔から流れる血潮に目をしばたきながら、

「時刻が移りまする。イザ、ご覚悟を」

「おう、そうであったな」行人包みのかげで寂しげに、うつろな笑いを漏らして、「家康めにこの腐れた首を見られたくないものよ」

「五助も、すぐにお供つかまつりまする」

五助は背後へまわって、血刀を見た。刃こぼれが気になっていた。

「お腰のものを拝借つかまつりまする」

「使え、殿下より拝領の貞宗じゃ」

せめては、小気味よいまでの切れ味で、首胴異にしてもらうことであった。

吉継はみじか刀をさか手に持つと、えりをくつろげ、静かに腹をなでた。死出の旅路に、離々たるはぎの花を眼に残そうと思い、視線を転じた。

可憐な花を、しかし、かれの弱った眼はとらえることができなかった。流れ玉にあたったか、槍がかすめたか、転落したあるじをひきずって、狂い馬がかん高くいななきながら、暴走してきたからである。

「ご免！」

貞宗の太刀が走った。水もたまらぬさえである。行人包みの上から、ぱさと両断された首は、白いまりのように、はねた。

「喜太夫どの、御首級の始末、頼みますぞ」

湯浅五助は、片手拝みに一揖するや、貞宗をひっさげて、戦場へ駆けもどる。いまひと働きするのであろう。

老臣の三浦喜太夫も、肩にかなりの傷を受けていた。白髪が血にこびりつき、染めたようにどす黒い。雨はやみそうもないが、東の空はもはや明るく、林の中もぼんやりとほの明るくなっている。

喜太夫は足軽らに穴を掘らせた。

「もっと深く、敵に奪われては、成仏ならぬ」

行人包みそのままにくるみ、さらに陣羽織で包んで、穴の中に埋めると、

「なんじらは、和子にこの由申し上げ、和子のおん手に入るがよい」

おのれはどっかと木の根かたに胡坐し、

「殿！　お供つかまつりまするぞ」

まず左から右へひいて、その鉾子を斜め上へ、ぱっとはねると、その勢いで心ノ臓へぐさっと刺した。そのまま、体重をかけるように前のめりに——

心ノ臓を貫いた鉾子は、背へ二寸も出た。

父吉継の死を聞いて、せがれの吉勝、木下頼継（甥という説もある）は憤激した。

「弔い合戦ぞ、金吾めの首を是が非でも、われらが」

残兵をまとめて突こうとしたが、もうその勢力はなくなっていた。

湯浅五助は切り死にし、重臣疋田角右衛門をはじめ討ち死にする者二百五十余人、戦場から逃亡する者も多く、吉勝の馬まわりはわずか二十数騎。

「もはやこれまでじゃな」

吉勝は父によく似た大ぶりの顔を雨に打たせて、北方を見上げた。

細雨にかすんで伊吹山塊がかれらを招いているように見えた。

4

関ガ原の戦いで最もよく西軍のために戦った与力大名は、大谷吉継と平塚為広にすぎない、と賞賛される理由も、この悲壮な最期からうかがえる。

大谷の壊滅は、東軍の士気をいやまし、西軍を敗色でおおった。

吉継が頼みとしたのは宇喜多秀家だったが、内応軍が間をはばみ、とうとう合流できぬまま破れてしまったのである。

天満山付近では小西行長がもっともろかった。

藤堂高虎、寺沢広高、京極高知の先手の攻撃を受けるや、抗戦一刻に満たず、陣はくずれて池寺池畔へ後退し、行長は采配を家来にまかせて、笹尾山へ走った。

もう三成との連絡がとれなくなっていた。北国街道には井伊直政の軍勢が充満し、まごまごしていると、狂犬のような足軽に、首をかきとられそうであった。

いくさも互角の場合は、軍法や士道を尊重し、敵の人間性を認めるが、圧倒的勝利と見るや、勲功を誇って、野獣になる。

将も卒も、小荷駄の小者に至るまで、功を競い、利をむさぼって、ここをせんどと血眼になる。

『東照宮御実記』によると——かかる大戦は前代未聞のことにて、諸手打ち込みのいくさなれば作法次第ということもなく、われがちにかかり、敵を切りくずしたることにて、追い留めなどいうこともなく、四方八方へ敵を追い行きたれば、なかなかわきひらき見るようなることならず——と、ある。

小西行長は、あきらめてひきかえし、宇喜多秀家の本陣へまぎれこもうとしたが、たちまち

寺沢広高の一隊に見つかってしまった。

夜はすっかり明け放たれ、小西行長の瀟洒な口ひげも五間はなれて分明になっていたのだ。

「薬売りの小せがれじゃ、逃がすな」

しゃがれ声が、胸に突き刺さった。

漆黒の肥馬をかった老い武者であった。だれかわからぬ。その嘲罵は、久しく行長が耳にせぬものだった。

行長は絶望の目をあげた。堺の薬種屋の子に生まれて、目から鼻へぬける才知でのし上がり、財政的手腕と堺生まれらしい博学を売り物に摂津守とまでなった男である。極端な表現をすれば、刀の持ち方も知らぬ。すべてを数理で割り切る男にありがちな、冷たい心の持ち主だ。

度量が狭く、したがって、輩下の人望がない。三成との密接な結びつきも、功利的に合致したからにすぎない。

〃行長、平生、鄙吝にして、下に薄し、士卒、皆、死志なく、本隊の兵、また、戦わずして走り退く〃——と、史書にある。

馬をあおってきた老武士の大身の槍が迫ったとき、行長は、ぼうぜんとしてたたずんだままだった。邀撃するどころか、動けなかったのだ。手は槍をつかんではいたが、穂先はあらぬほうに向けられていたという。

もしも老武士が落馬しなかったら、行長の胸板は大身の槍に貫かれていたろう。

四間の近くに迫ったとき、どうしたことか、老武士が、のけぞるように馬上に仁王立ちになった。もろ手で突き刺そうとした寸前だった。

次の瞬間、その紺糸威しの勇ましい姿は、馬上から宙へはね飛ばされていた。

馬はあわをかんで、前足をあげ、棒立ちになった。ひづめが行長をたたき伏せるように、頭上をかいた。

この腰がぬけたにひとしい行長が、数弾指ののちに、馬上にあり、天満山の傾斜を埋めた伊吹颪、露をけちらして、修羅場から遠ざかっていたといっても、信じがたいであろう。

（どうしたのだ、これは？）

信じがたいのは、行長自身であった。

狂奔する馬に飛び乗るなどとの離れワザができようはずがないことは、だれよりもかれ自身が知っている。奇跡が起こらないかぎり。

そうだ、それが超自然の作用による現象なら。そうではなく、他のだれかの人力によって、それが行なわれたことを、かれがさとったのは、数町を一気に駆けぬけて、追いすがる敵兵を振り切ったあとであった。

ほっとして振りかえった行長の目の前に顔があった。

「あっ!?」

幻かと思った。

あまりに間近く、その顔があった。

ぎょっとなって、馬を止めようとすると、

〈走れ〉

くぐもった声が、命じた。

「な、なんじゃ、そのほう……」

〈走れ〉

と、また声はいった。

鍬外しの鉢金ずきんをかぶり、双眼だけが、するどく行長を見ていた。切れのながい眼は奥深く、あやしい光を放っていた。

〈いのちを助けてくれたのじゃ〉

「う……」

〈走れ〉

声の特徴を隠す忍び特有の発声ではあったが、

（この者は……？）

行長がふと直感したのは、

（女ではないか）

あり得ない妄想に近かった。忍者の声を聞き分ける聴覚があったのではない。その急場にお

ける直感である。声はしゃがれたものだし、ずきんを通してくるだけでも実際と違う。

にもかかわらず、女忍？　と感じたのは、あるいは、消しようもない女体のにおいであったろうか。

堺では少年のころから、唐人町の女郎と親しんだし、朝鮮出兵しても、もちはだの朝鮮娘を常に仮寝の陣にはべらして、黒田や加藤ら猛将の顰蹙を買った。女にかけては、相当な嗅覚を持っている。

忍者は、行長の背後にかぶさるようにして、馬上にある。鞍には行長がまたがっているから、馬のしりの上に乗っているわけだが、行長に手綱はまかせて、巧みに、馬を急がせていたのである。腰で御していたのか。

伊吹山頂は雲におおわれ、細雨は谷を乳白色に塗りこめていた。

おのれの意志とは別に馬は疾駆していくのだ。行長は、

（どこへ連れていく気か）

いのちは助かったらしいが、陰雨にとじこめられたような不安が、あらたに、かれの心をふさいだ。女忍かどうかを探るよりも、前途の不安のほうが大きい。

老武士をどうやって倒したのか、どうやって馬に自分を乗せたのか、転瞬の間の早ワザを行なったこの者に敵対するなどということは、文官派の行長には考えられぬことであった。

山も谷も——坂も、流れも、岩石だらけの河原も、朽ち木の原も、さながら平原を行くにひとしい疾風の奔馬。その馬上で背後の者を倒すどころか、自分が飛び降りることもできないのだ。

銃声と喚声は、遠い潮騒のように、背後へ遠ざかっていくのだけがせめてもだった。

忍法死人甲

1

大谷刑部と平塚因幡の敗色は、ただちに西軍の本陣をおびやかすにいたった。行長の醜態に比べれば戸田重政のはまだしも武将の名を惜しんで、関ガ原の露と消えている。朽木、赤座らの軍に挟撃されて惨憺たるめにあって、麾下十数騎に守られて、三成の本陣に至り、秀秋反軍のさまを告げ、転じて東軍のまっただなかにおどりこみ、織田河内守長孝に討たれている。

このころ、細雨はふたたび、勢いを増して、豪雨となり、山も野も曖々と灰濁の色に包みこまれていた。

重政は、戦場から逃げようとして、東西を弁ぜぬ雨のために、誤って東軍のなかへ飛びこむ結果になったのだという説が、後日流布された。真偽のほどはわからない。

とにかく、重政は、徳川麾下の津田信成と槍を合わせている。馬を傷つけられて信成が退いたあと、河内守によって、兜の内廂を一槍に貫かれて転落した。死にざまは平塚因幡守に劣らぬ武辺ぶりである。

この豪雨は半刻ほど続いて、宇喜多秀家が逃亡したのも、雨にまぎれてのことであるという。

平塚、大谷を倒した小早川勢は、諸勢と競いあって、秀家の陣へなだれこんできた。

かれらにしてみれば、三成の本陣へ至る道すじだったし、陣型からいえば中備えになる。

秀家はほとんどいくさらしいいくさはしていない。軍勢の数からいえば、四万に近い。裏切り軍と、福島、藤堂を合わせても、じゅうぶん拮抗できたはずである。

だが、敗軍の色はもはやおおえず、士気はとみに落ちていた。

秀家はそれでも決戦の軍を進めて、おのれも中核に出馬せんとしたが、老臣の明石全登（掃部助守重）が馬のくつわをつかんで放さなかった。

「もはや、このいくさは敗れてござる」

と、言いおいて、

「大老、奉行の違約裏切りせしも、畢竟するに、治部少の人徳足らざるゆえでござる。とは申せ、このままに、討ち死になされて、なんの太閤への恩義、なんの意地。ここを落ちさせたもうて、不日ふたたび、旗を上げんこそ、殿のとるべき道にござりましょうぞ」

一時のがれのことばではなかった。岡山の城には、まだ数万人のるす勢がいる。

備前、美作の領民を糾合すれば、再起も難くはない。

「もし志を得ずんば、岡山の城にたてこもり、天下の兵を引き受けて快く一戦し、城をまくらに討ち死にしたまわんこそ、武門の本懐にそうろうべけれ、何とて、死を急ぎたもうことや候」

と説伏したという。

秀家もようやく納得して、手勢に守られて伊吹山麓を西へ走る。

明石全登は父景親の代からの忠臣である。

元亀天正のころ備前美作の領主は赤松家の功臣浦上氏で、美作守たりし村宗は豪勇であったが、その子宗景は暗愚だったため、三郎左衛門景親は秀家の父直家をそそのかして、領土を奪ってしまった。以来、明石家は宇喜多家中筆頭の宿老となっている。

秀家をおとすと、

「やれ、これでひと安心じゃ、思いきったいくさをしてくれようぞ」

全登は槍をしごいて馬上の人となった。

秀家に代わって残軍を指揮し、井伊、黒田の先鋒を迎え撃った。側面からは勝ちに乗じた小早川その他の軍勢、松尾村をぬいた福島京極の軍もその間隙を縫って突っこんでくるし、主人に逃げられた軍勢はしょせん士気があがりようはない。

全登ひとりが、いかに声を涸らし、どなり、叱咤しても、浮き足だった者を押えられぬ。

命令は無視され、逃亡者続出し、まごまごしていると泥流のような東軍に飲みこまれそうな恐怖にかられた。

敵があまりに強大すぎたせいもある。味方が怯懦すぎたせいもある。全登は、このいくさで討ち死にすることが無意味に感じられてきた。

誉れあってこそ、死の意味もあり、満足もある。

いったん、

「あほうらし」

と思うと、切り合いなどできるものではない。

「退け、備州へもどろうぞ」

全登は馬首をむけなおした。

追いすがる敵兵を切り払い、なぎ払いして、どろをけたてて走りだした。

刻一刻と西軍は減っていき、東軍はますます勢いを得て、

「三成を！」

「治部少を！」

口々にわめいて、先陣を争い、味方どうし、やいばをふるいまわすというありさまになっている。

このすさまじい功名心、名誉欲は、いうまでもなく、出世栄達が目前にぶらさがっているからだ。興奮は興奮を呼び、自制できないまでの野獣になっている。

勝ちさえすればいい、いくさの根本からいうなら、兵隊を狂気にするのも一法だ。恐れを忘れさせることが、勝利の近道だ。

前に述べたように、軍法も規律もけし飛び、命令も聞かぬ。陣型もくずれ、われがちにと、笹尾山に突進している。

「――先手を指越、縦雖レ命二高名一背二軍法一之上は可二成敗一……」

と、家康の軍法にあるが、天下分けめの決戦なのだから、なまぬるいことはいっておられない。

家康は桃配山に旗を立て戦況を遠望したときから、

(勝ちさえすれば……)

と、いう気になっていた。

2

次々とはいってくる悲報のたびに、石田治部少輔三成の顔いろが変わるのが、こっけいなほどであった。

(――よしや敗るるとも、武士の一分をたてしいくさ、本望ではないか……)

島左近にはその動揺が腹だたしいばかりだった。

「金吾めが、金吾めが」

うわごとのように三成はくりかえしている。

「恐れながら」と、左近は面をおかして、

「かくなっては、中納言家をせめてもはじまりませぬ。裏切り者への制裁は、われらがなきあと、天が行なうでござろう、われらとしては、恥ずかしからぬ最期を遂げるのみにござります」

「わかっておる。わかっておるが、いまいましい金吾め。いや、金吾だけではないわ、大老はなんとしたのだ。毛利宰相は、何をしておるのだ」

その南宮山のほうは、雨と硝煙におおわれて何も見えぬ。

おびただしい旗指し物も長旒も、灰いろの幕に隠されていて、動向はまるきりわからない。連絡のとりようがなかった。間には東軍が充満している。三成方にはわからなかったが、すでに家康の本陣も、桃配山から陣場野へ移されていたのである。南宮山の毛利勢は、東軍の背後になっている。

もしも、このとき、毛利宰相秀元が、吉川広家の勧告を一蹴して挟撃に出れば、戦局はどうなっていたかわからない。

秀元はこのとき、なお、南宮山から動かなかった。

優柔不断なかれは、広家にいさめられて東軍に発砲できず、進撃を黙過したまま、さりとて、

西軍を撃つこともできなかったのだ。

秀元のこの態度は、戦機を失わせ、安国寺恵瓊や長曾我部盛親らに脱走を促すにいたった。

恵瓊はとにかく豊太閤には恩がある。貧乏寺の和尚が、ひとかどの大名になれたのは、前に述べたように、才覚すぐれていたゆえとはいえ、太閤の度量と重用がなければ、安国寺の庫裡でかゆをすすっていたかもしれないのだ。

もとより野心満々の恵瓊だから、恩義ゆえに出陣したのではない。ねらいは天下にあったのも事実だ。が、やはり、それだけとも断定できないのである。

軍を退かせたのは、長曾我部宮内少輔盛親のほうが先だった。

恵瓊に比べれば、盛親はむしろ、太閤に恨みこそあれ、恩義は少ない。

戦国十傑のひとりに数えられる故父元親一代で、四国全土ほぼ百万石を掌握していたのに、秀吉の四国征伐によって土佐一国二十万石に縮小されてしまったのだ。

盛親が西軍にくみしたのは、したがって太閤への恩返しのためではない。秀頼の後見たる三成の名によって乱発したお墨付きに、〝江戸内府誅伐のうえは四国四州長曾我部領分たるべきこと〟と、確約されたからにほかならぬ。

勝利を得たなら、万に一つも約束をほごにされることはなかったろう。責められるべきは、三成や輝元をいただいて、江戸内府徳川家康に勝てると思ったことだ。

本土と内海をへだてた四国の南にあるせいか、家康の実力を過小評価したことが、悲運のはじまりである。

南宮山東麓一帯に布陣した長曾我部勢は、栗原峠に集結し、小荷駄を先にして伊勢街道に向かってどろの流れのように後退しはじめた。

伊勢路をぬけて帰国するにちがいなかった。

敗戦の恐怖は安国寺恵瓊の隊にも、波及せずにはいなかった。

「殿、一刻も早く！」

家臣が青い顔で、そでをつかまんばかりに、

「時おくれなば、逃げ道もなくなりましょうぞ」

「逃げる？　わしがか……？」

バカな、と一喝しそうになって、そう叫びたい気持ちの底に、おのれの本心を隠したい弱い心が動いているのに気づかねばならなかった。

三成が、

（まさか、恵瓊だけは）

と、一縷の望みをいだいたのも、欲目ではない。

恵瓊は、こたびのいくさの首謀者のひとりといってよかったのである。

だれよりも、恵瓊自身がよく知っている。かれの逃亡が遅れたのも、おのれの心との葛藤のせいだ。

長束正家、毛利勝永の軍が動きはじめたのは昼近くなってからだ。

狡知な吉川広家は、この二隊には、東軍挟撃をほのめかして時間をかせいだのである。

それが凋略だと気がついたときは、すでにおそく、西軍の本陣は囲繞され、ほとんど石田三成麾下と島津維新義弘の隊のみになっていた。

「南宮山は敵か味方か、与力するけはいなくば討ちほろぼしてしまえ」

あと備えの、有馬法印則頼、山内対馬守一豊、浅野左京太夫幸長、池田三左衛門輝政らは、前線の功名争いに加われない不満もてつだって、いきまいている。

悲惨なのは宮代村に近く、南宮山北麓に吉川広家と陣を並べた長束正家であった。

松尾一帯の敗戦のもようは定かではなかったが、斥候を出すたびに悲報をもたらされて、退却しようにも、峠をぬける小道は長曾我部軍で埋まっている。毛利勝永軍がひき色を見せはじめたときは、正家は腹背に敵を受けて立ち往生していた。

豪勇の士もいた。松田金七という鍛冶上がりの男は、大くまでをもって、敵を引き倒しては打ち殺すこと数十人。見たこともない戦いぶりに、池田輝政の足軽大将が、落馬して逃げだしたので、肝を冷やしてどっと退いた際に、正家をかついで走りだした。

安国寺恵瓊が、逃げる決心をしたのは、この長束勢の敗走を見たからである。

恵瓊の兵も、こうなっては、主君の命令を聞くどころではない。われがちにと逃げだした。

そのころには毛利秀元も退却をはじめている。

吉川広家の措置を感謝する気持ちには、

（一発も撃たなかったのだから、内府もきびしく罪をとがめてはこないだろう）

という安堵感と、同盟の三成たちに対して、ちらりとうしろめたいものを感じながら、

（だが、金吾よりは、まだおれはマシなのだ。内応しての裏切りとは違う……）

人間、どんな立場でも、三分の理屈をつけて、おのれの行為を正当化したがるものだ。

足軽、小者たちはそうした自己弁護の必要はない。勝つか負けるかだけだ。負けなら逃げる。

峠の小道からあふれ出た連中で、谷も、林も、田も、畑も、埋めつくされた。ちょうど、いなごの大軍が通ったあとには一果一粒も残らないように、田畑は踏み荒され、林の小枝は折られ、農家はなべの底まですくわれ、惨憺たるありさまだった。

このあたり、ほとんど村は無人になっていた。落ち武者狩りをするのは、この大軍が四方八方に散って小人数になってからである。

安国寺恵瓊も、この濁流のなかにあった。押し流されて、南へ南へと逃げた。伊勢街道から大和へぬけるつもりで、わき道へはいったが、気がついてみると、いつの間にかひとりになっていた。

3

敵身（味）方押し合い、鉄砲放ち、矢さけびの声天を響かし、地を動かし、黒煙たち、日中も暗夜となり、敵も身（味）方も入り合い、鍛をかたむけ、戈を抜き持ち、おおつまくり攻め戦い、きっさきより炎をふらし、日本国二ツに分けて、ここを詮度（先途）とおびただしく戦い——うんぬんと、『慶長記』にある。

わずかに旗指し物や合いことばによってしか見わけることのできぬ混乱のなかから脱走するのは、さしたる難事とも思われないのだが、武辺を売り物の戦国武士たちが、戦場を離脱しようとするからには、やはり相当の決心がいる。

のちになっては、関ガ原の決戦の様子が世間に流れてから、その各自の行動を下人までが批判したが、血と刃の渦中にあるとき、おのれを見失わぬ者は少ない。

薩摩隼人の島津維新義弘が、雲霞のごとき敵中を突破して無事帰国したことはよく知られている。

義弘は豪勇無双、朝鮮出兵でも、大薙刀をふるうこと苧殻のごとしといわれて、その鬼神ぶりは、名を聞いただけで、〝三里ノ外ニ去ル〟と敵兵を畏怖させた。

兄修理太夫義久の嗣となって六十万石を継いだ。このたびのいくさは、入道竜伯義久のいさめを振りきって三成に荷担したのである。

「負けたか」

一言漏らして、

「去のう」

と、立った。

秀家の軍がくずれてから、小早川勢は、中仙道はもとより北国街道をも遮断し、背後は完全に断たれている。

「退路はすでに敵勢がいっぱいに詰まってござる」

甥の中務大輔豊久は、興奮にどもった。

「退き口は背後にかぎらぬぞ」

義弘は一喝した。

「ムザとは退かぬ。あわよくば家康めの首を足にかけてからにしよう」

三間柄の大薙刀。二十斤に及ぶといわれるのを、片手にひっさげて、義弘は連銭葦毛の逸物に飛び乗った。齢すでに還暦を迎えんとしていたが、壮軀は毫も老いを見せず、わずかに、左右にはねあげた八ノ字ひげだけが霜をふらせているのみである。

出立に先だって、義弘は一首の歌を詠じたと野史にある。ちょっとできすぎている話なので信が置けぬ。

義弘の奮戦をしるしてある『関原御合戦進退秘訣』によると、義弘は家康の本陣のあたりを指さして、討ち死にの決意を述べたとある。

「東に備えし大軍は内府旗本なるべし、いま一度この大軍に突き入り火花を散らし、おん討ち死になられるべしとの御意なり。このときすでに未の下刻歟、ようやく空曇り、雨降れり」

だが、これは島津家の記録だ。いうなれば祖先の武功録だから、頭から信じるわけにはいかない。

討ち死にの決意はむろんあったろうが、大軍を突破するか、しからずんば死の気持ちであったにちがいない。

義弘を中心に囲んで、鉄砲組槍組が四方に筒先をむけ、さながらはりねずみのようになって、一文字に東へ走った。

正面の敵は福島刑部少輔正武だ。弱冠十六歳、功をあせって、切りこまんとするのを、老臣梶田又右衛門が追い止めて、

「死にもの狂いする敵にいくさはせぬものでござる。まず、まず」

と、ひきずるようにして、見送らせた。

いかに島津の一団がすさまじい勢いだったかわかる。前の進退秘訣によると、

『内府公是を見たまい、島津入道が今日の働き嘆称するにあまりあり。われみずから維新が必死の鋒先に当てこれを破るべく、しきりに鞍の前輪をたたきたまい、身をもんでかかれかかれと下知したもう……』

とある。このあたりは、真実に近いと見てよい。

もとより、本陣めざして突っこんでくるのだから、福島正武のようにばかりはいっていられない。だれかれの差別なく、腕におぼえの勇士が、前進をはばんでは切りかかり、血風がうず巻いた。決死の流れはしかしひるまぬ。

島津隊の勢いの当たるべからざると見るや、家康の旗本たちは、槍ぶすまを敷いてずらりと並んだ。片ひざを突き、槍先を持ち上げて、石突きは土に当てている。人でも馬でも、近よれば、突き上げるから、馬でけちらすこともできぬ。

進路を変えて、右手の小丘に駆けのぼった。

ほっと一息ついて見渡すとおびただしい軍勢で埋めつくされ、剣光、旗影、山野に満ちて、果てしない。ここまで進んでくるだけで、大半を失い、残った手勢は五百に満たない。

義弘が切り死にを覚悟したとき、老臣の阿多長寿入道成淳が進み出て、

「それがしに、おん旗を下し賜われかし」

義弘の旗印くつわノ旗を押し立てて、決死のつわ者数十人を率いて井伊直政の陣へ向かった。

「島津兵庫頭、武運尽きなば、最後の合戦をするぞ」

と、大音に呼ばわって突っこんでいった。

いうまでもなく、義弘をのがさんためのおとり武者である。老体、最後の忠誠はむだではな

かった。

「兵庫を討って功名しようぞ」

四方八方から、槍が、刀が飛びかかってきた。

阿修羅のような成淳の働きに、血風がうず巻き、首や、手が、そのうずからはねとぶのが見えた。

その間に、義弘は走った。近臣数名も、必死になって、怒濤の軍勢の中を切りわけていく。無暴といおうか、狂気といおうか、窮鼠かえってねこをかむというような、ありふれた形容を冠するには、あまりにも勇猛、あまりにも壮絶きわまる突破行だ。

中務大輔豊久が討ち死にしたのもこのときである。同じ中務大輔である本多忠勝の数百の軍勢に包み撃ちされて、十三人の忠臣に守られて奮戦したが、乱刃のなかに果てた。首級をあげたのは、小早川秀秋の陣場借りしていた小田原北条家の牢人笠原某という。

影武者成淳も、餓狼の牙にずたずたにされた。

松倉重政の家臣山本義純、井伊直政の先鋒木俣右京の手に属していたのが、功を占めることになった。もっとも、大魚は逸したのである。

「島津兵庫頭を討ちとったぞ」

血まみれ首級をふりまわして、狂喜したが、首あらための横目によって影武者と指摘されるや、

「ぬう、身代わりか」

かっと髪をそそけだてて、首を投げ捨て、兵庫頭を追った。が、すでにおそく、薩摩の敗軍八十余人にまぎれた兵庫頭は、筒井定次の老臣中坊飛騨の軍を突破し、その三子三四郎を切りすて、鳥頭坂を走って牧田街道を南下していた。

伊勢へ抜けたか、迂回して大垣城を目ざしたか。迫りくる宵闇に歩調を合わせるように、ふたたび雨が激しくなって、逃亡者を助けた。

4

味方のほとんどが敗れ、あるいは逃亡してからも、三成の本陣は動かなかった。その内心の不安と恐怖は別として、最後まで体面を維持したのは、やはり三成だけのことはあった。もとより、

「家康を討ちとって死のうぞ」

覚悟を決めた島左近勝猛の武辺ぶりが、怯心をささえたのである。

輩下百余人、円陣を作って、長槍隊を外側にどっと駆けだしたのは、島津軍と同じだ。

兵庫頭が大垣城へはいって籠城する気持ちが脱出不可能な場合の案として、頭にあったのは、鳥頭坂を走ったことでもわかるが、島左近の場名、まっすぐ、家康の本陣を目ざしている。

群がる東軍与力大名の隊を抜いても、旗本が厚く層をなしている。その巨大な岩壁にも似た、大海の怒濤にも比すべき大軍に突っこんだ武勇には、東軍も驚嘆した。

島津勢がようやく虎口を脱したころだったのである。豪雨は鎧をたたき、刀をすべらせ、どろが足をとった。まっくろな一団となって、突っこむ島左近は、背後に石田三成の軍勢が続いてくるものとばかり思っていたのである。

しょせんかなわぬならば、三成に家康の首を。あるいはせめて、刺し違えるくらいの誉れを与えてやりたかった。

が、どろしぶきと、宵闇と豪雨の幕は、

（逃げられるかもしれぬ）

三成に希望をいだかせた。

これは、左近にとって、予期しない裏切りといえた。おのれを見込んでくれた主人と思えばこそ、あぶない橋も渡り、天下分けめの決戦にまでこぎつけたのである。謀臣として全精力を傾けてきたのだ。島津や長曾我部とは違う。いまさら、逃亡脱出など、武人ならば考えられぬはずであった。その思いは安国寺恵瓊に対しても同じことだ。

死ぬべきときに死ぬる覚悟があってこそ、武士は武辺ゆえに天下争いをする資格がある。

島左近勝猛のこの思想は、あるいは、もはや古いといわれるかもしれなかった。

どたんばになって裏切ることが、今後はやるにちがいない。家康が天下をとれば、要領のよ

さが、美徳としてもてはやされぬまでも、当世風になっていくだろう。

死の淵に敢然として向かう左近の脳裏を、一瞬そんな思いがかすめた。

これは悔いではない。怯懦のエセ武士を侮蔑して死におどりこむ誇り——一種の法悦にこそ近いものだった。

前面には京極高知。兄高次が淀君の従弟たる立場上、苦慮の果てに東軍に与力し、伏見落城後は、東軍の牙城として、大津に籠城し、生死のほども危ぶまれている。寡兵をもって城を固め、西軍の東上をはばまんとしたのだ。

実はこの前日に、毛利元康らによって城は落ち、京極高次は大和路へ走っていたのであるが、東軍にはその事情が判明していない。

高知にしてみれば、兄は城をまくらにすでに討ち死にしている公算が大だから、

「兄のあだ討ち」

石田、島の両首をものにせずにはおかない意気ごみだ。

だが、その軍勢も、必死の島左近をはばむことはできなかった。雨と、血と、どろと——具足も旗指し物も、顔も弁じがたいばかりによごれ、一団が切り抜けたあとは、累々たる死傷者だった。

敵も味方も、血どろにまみれて、うめき声が地表をおおい、凄惨な地獄図をひろげていく。

一間走るごとに、ひとり倒れた。おかしいほど、ほとんど正確な感じであった。

ひとり倒れるごとに、敵もまたふたり、三人を倒す。倒さずば倒れぬ、島左近に鍛えられた武辺者たち、ここをせんどと切りまくり、そして、走った。

京極勢を突破すると、生駒一正の軍勢が左右から包み撃ちに鉄砲を撃ちかけてきた。

一度に数十人がやられた。円陣の外壁がぼろりとはがれるようにくずれ、そこへ、どっと、やぶからいなごの群れのように新手の刃が飛びだしてきた。

武略にたけた島左近勝猛。用意はあった。

円陣は表裏三段の構えになっていたのである。外側から、鉄砲、槍、刀——を表三段とし、さらにその内にあと備え鉄砲をかつがせていたのだ。これは雨をさけて、火ざらを兜でおおい、あるいは、籠手脛当てなどをかぶせて用意していた。

抜刀の足軽の肩越しに、銃火がひらめき、計ったつもりの生駒隊は不意を食って、もろに鉛玉を浴びた。ひるむところを、槍隊が、かつぎ槍から、ふりおろすようにたたきつける。

なぐりつけ、なぎ倒し、どろに足をとられたところをくし刺しにする。

思いがけない逆襲に、生駒勢は狼狽し、恐怖し、どどっとくずれたつ。

「追うな、目ざすは内府が首」

意外に間近く、本陣の白旗が見えた。雨と宵闇と刀槍は、距離の感覚をなくしていたのである。

島左近は、馬腹をけった。猛然と、旗本の陣へ突っこんでいった。

「やるな、やるな」

旗本の前衛から放った銃声が轟然と山野をふるわせ、すさまじい硝煙が本陣を視界から隠した。鉛玉は左近の馬のどこかに命中したらしい。かん高くいなないて、棒立ちになり、どさっと、横倒しに倒れた。

はずみで左近は投げ出されている。激痛が半身をしびらせた。肩の骨が折れたようであった。

そこへ黒い巨岩のなだれるように、突っこんできた武者一騎。

「島左近どのと見受けたり、筒井伊賀守が家来柿坂唐九郎光義……」

かみつくような顔が眼前に迫った。

びゅっと胸へのびてきた槍。一瞬かろうじて避けた。槍は流れて背後の何かを——人か土かわからない。何かに刺さった。その槍の柄をつかんで身を起こした。無意識だったが、左手なのである。右腕は動かない。

騎馬は駆けぬけている。数間先で、はげしくたたらを踏んで、馬首をむけなおすのが見えた。

「新助！　新助！」

せがれを呼んだ。応えはない。刀が抜けぬ。左手でわき差しを抜いた。抜くのと小手返しに飛刀するのとほとんど同時だった。

手ごたえあった。が、身をかわすひまも与えず馬上から転落しながら、夢中で突き出された

刃先に下半身のどこかを激しくえぐられたように感じ、どうっと、どろの中に昏倒した。

冷たいどろ水が気持ちよかった。痛みも意識にない。死の影を感じるよりも、眠りをむさぼりたい。しだいに気が遠くなっていった。狂気した彼我の叫喚も、馬蹄のひびきも、子もり歌のように聞こえている。

5

しの突くような雨は、しかし短い間だった。晴れ間こそ見えなかったが、まもなく小降りになり、蕭条たる宵雨となって関ガ原をこめた。

いくさがやんだのは、島左近の隊が全滅してからである。

ふたり三人血路をひらいて逃げようとする者が、あちこちで包み討ちにされ、なぶり殺されたり、追われたりするなかを、家康は、満足そうにながめながら、本陣を藤川台に移していった。

大谷吉継の陣あとである。勝敗のかぎとなった小早川秀秋の陣地のあたりを見、頭をめぐらせて、松尾村から天満山、笹尾山を見て、ひとりうなずいている。こうした場合、家康は極端に寡黙になる。心中の喜悦をささとられぬ、習性化された用心であった。

細雨のなかで、首あらためが行なわれたが、西軍の首、将士入り混ぜて三万二千六百余級

（関原合戦記）とある。真偽のほどはわからない。『関原始末記』のほうには八千余人とあるのだ。ちがいすぎる。が、合戦の状態から見て後者のほうが真に近いのではあるまいか。前者には、東軍の犠牲を約四千余人としてある。勝者によって語り継がれる歴史は、討ち死に負傷をごまかせない。

首あらためにつづいて、秀秋、広家を説伏した黒田長政や、すさまじい戦闘のあとをずたずたの具足や旗差し物にとどめた本多忠勝などが、家康の杯を賜わっているころ、まだ残敵狩りが周辺ではつづけられていた。

一個の首にもありつけなかった者は、

「せめて名ある者を」

と、血眼になっていたし、雑兵首しか取れなかった者は、

「兜首を……」

と、犬のように、そこらをかぎまわっていた。

修羅場の腥風と死屍を清める天の配慮であろうか、雨は川水を増し、流れを速め、岸べにあふれ、平地を浸して、雑兵らの欲望をはばんだ。

戦い終わった関ガ原の凄惨なありさまは、

——不破の河水あふれ出て戦死の死骸を押し流し、水の色血にそみし——

と、『落穂集』に述べられている情景のとおりであったろう。

細雨に促されて夕霧が濃く浸してき、伊吹颪は冷気を増した。雨の矢はみぞれのようにはだを刺してくる。

かがり火がところどころにたかれ、松明が雨中ににじんで尾を引いて走るさまは、断末魔のうめきに欣喜する地獄の青鬼の迎え火さながらであった。

「――島津兵庫も治部少も、落ち延びたようじゃ」

「恵瓊坊主もか？　大将首は一つもなしか、なんちゅうことよ」

「大谷刑部をだれぞあげたぞ」

「島津のせがれか甥か、豊久とやらもな。それに、ほれ、蒲生郷舎」

「治部少の手じゃな……やつはだれが討った？　島左近は」

「聞かぬ」

「落ちたか!?」

「なに、もはや逃げられはせぬ。道すじは固めてある」

騎馬武者は死骸を馬蹄でけちらすようにして、

「このあたりだったぞ、死んでいるとすれば」

「明朝になればどろで埋まってしまうな」

松明が動き、死骸の顔を照らしていく。

段落のいささかの高みであった。二尺の低みを濁流がなめていく。

騎馬武者が数間行きすぎてから、死体の一つが、むくりと動いた。

松明の余照がほの赤く桃なりの兜に反射した。ひさしの下に目玉が――

きらりと光った。

どろがはねるように、かぶとむしははね上がった。一瞬である。武者ふたりの背後に吸いつくように飛びかかった。ほとんど悲鳴もあがらなかった。驚愕が、声を奪う。はっと息を引いた一瞬の〝間〟を、伊賀忍法ではシドキという。死時と解した古書もあるが、これは仕留めどきの〝仕時〟であると見るのが正しい。

しかし、他動的な意味で死時であることもまちがいとはいえない。殺す必要のあるとき、忍びノ者は急所を刺す。針一本、くぎ一本でも的確に死をもたらすとされているからである。

おそらく、ふたりの武者は、自分が死んだことすらも気がつかなかったろう。心ノ臓を貫かれて、ひとりはどろのなかに頭から落ちた。断末魔の叫びもない。その口も鼻も泥濘にふさがれていたからである。

別のひとりは馬上のままだった。

背をまっすぐ立てたまま、死んでいた。

馬は、おのれの主が死んでいることを知らないもののように、走りだした。そのあとから、主を失った馬も走っていく。

十九女ガ池のほとりから中仙道に出、桃配野を岩手道へぬけ、伊吹山塊の東麓伝いに走る

——ちょうど、島津兵庫頭のたどった牧田街道とは逆方向になる。

伊吹村にはいるあたり、つじには、おりあう鹿柴、そぎ竹を組んで、矢来が作られていた。かがり火は地のやみを払い、通行の人馬の顔を明るみへ出した。

どろはねをあげて疾走してきた騎馬は、この仮木戸で止められた。

ぱっと、なわが上がり、たたらを踏んだ馬の前面に長槍が飛びだした。

「いずれの手ノ者か、名のられい」

答えはない。

馬上は無言であった。

「怪しいぞ」

番人の雑兵たちはけしきばんだ。

「鉄砲を！」

だれかがどなった。

火なわが走ってきた。長槍が短槍が、騎馬の前後左右を囲んだ。

「降りさっしゃれ」

戦場だ。気がたっている。木戸での誰何に会釈はいらぬ。残敵狩りの必然から無礼は許される。

「名のらねば敵と見なすぞ」

それにこたえるように、突然、馬がいなないた。

おどりあがった。異様な絶叫が馬上で起こった。その武者の具足が、突風に巻き上げられたように、帯ひも、留め金を寸断されて、ばらばらっと、宙に飛び散ったのである。

怪奇な現象というしかなかった。

雑兵たちは槍を引いて、啞然と息をのんだ。

兜がぽろりと落ちた。

いや、兜だけではなかった。兜をかぶったままの武者の首だったのである。

「……」

雑兵たちは目を疑った。夢を見ているのではないかと思った。惨鼻な死臭に包まれた夜気が幻想を誘う。かがり火と松明の赤みが地獄火さながらに——

地におちた武者首は、それが悪夢でないことを物語るように、ケタケタと小切り子のような笑い声をあげた。

「死人首が……」

「笑うたぞ」

雑兵らは、ぞっとして、声をふるわせた。

おぞ毛だって、どどっとあとずさった。

そのとき、もう一頭の馬が、これは無人のまま、のこのこついてきていたのだが、何を思っ

たのか、トコトコと走りだした。

雑兵たちは目もくれぬ。からっけつの馬に用はない。

笑い首に気がふれたように、小頭(こがしら)が、

「た、たたきつぶせ、魔性ぞ、打ち砕いて舎利にしてしまえ」

おう！　と、雑兵らも狂気したにひとしい。槍の石突きをかえして四方八方からめった打ち。兜も顔もない。南蛮鉄の鉢金(はちがね)はびくともしなかったが、前びさしが割れ、錣(しころ)がちぎれて吹っ飛び、首が鉢金からころがり出た。

その顔も頭も、ところかまわぬ乱打に、たちまち目鼻もわからぬ血どろの肉塊と化した。頭蓋(ずがい)骨の割れる音が、ぐわっぐわっと鈍く聞こえ、血が飛び、肉片が飛んだ。髪ノ毛をつけたままの肉片がかがり火に飛びこんだか、じゅじゅっと異様な臭気をふりまいた。

それこそ、地獄の責め場と化した木戸をぬけて、ひとり草をもとめて走っていくかに見えた馬の背に、ふっと人影がまたがった。

黒い影。

忽然(こつぜん)とあらわれたのである。ひとりではなかった。こわきにだれやらをかかえていた。死体であろうか？　ぐたりとなったからだを鞍の前壺(まえつぼ)へ乗せると、はじめて、うしろをふりかえった。

木戸はずっとうしろになっていたが、惜しげもなく燃やすかがり火のあかりがやみをくりぬいて、狂騒の赤鬼たちを浮き上がらせている。

「ふふふふ、見たか、伊賀忍法死人甲(しにんかぶと)。せいぜい笑い首を切りきざんでおるがいいよ」

おのれの忍法に満足したような笑いは、すぐに伊吹颪の夜風にさらわれた。

慟哭の谷

1

やみの底にひびきがある。はげしい瀬の音であった。近くに渓流がはしっているのであろう。やみをぬらす雨は、やむかと見えて、また音もなく降りそそいでくる。

「――冷えてきた」

星もないのに、なんのあかりが反射するのか山腹の岩はだが、鈍く黒光りして、声は、その底から聞こえた。

「火をたくか」

「よせ」

ひーっと、打ちのめすよう声が、

「目だつ。夜の火は一里も一間と申す」

「雨と霧じゃ、それほどには」

「用心にこしたことはない。落ち武者狩りに躍起になっている」

「目ぼしいところは、あらかたのがれたしの」

と、その男は振りかえった。

岩はだのすそが、えぐれたような洞窟になっていた。伊吹の裏谷、粕川峡谷にはこうした洞穴が多い。浅きは一間ばかりから、奥知らずといわれる深いものなど、いくつあるかしれない。このあたりの樵でも、確かなことを知らぬ。

「落ち武者狩りか……」

寒そうに肩をすくめて、

「五味を」

手をだした。

連れは黙って差しだした。大ひょうたんである。五味酒か？　通常忍者の薬料とする。くこ、まむし、麝香嚢、ゆりの根、さるの脳漿などをよく混じた飲料であった。ただに渇きをいやすのみではない。疲れを養い、活力を与える。不老長寿の秘薬と世間では渇仰しているが、製法は伊賀忍秘伝とされている。

ぐっと一口あおると、冷たく胃の腑にしみたが、そのまま、熱い血潮となって、四肢に活力が満ちてくるような気がする。

「ついさっきまでの大名が、いくさに敗れれば一夜牢人か。ねずみのように逃げまわるわけじゃな」

と、また洞穴を振りかえって、

「あるいは、もぐらのようにな、岩清水をなめて、小さくなっているとはな……」

「やむをえまい。いくさで奪った領地をいくさで失う、兵家の常よ」

「とはいえ、巧妙に乗り換えたやつがおるわ」

「金吾中納言か、しゃアしゃアと家康の膝下にはいつくばったようじゃ」

「りこうとは、そういうものよ」

「伏見攻めの罪も許されたらしいの」

「きょうの勝ちも、金吾が裏切りなくば、望めたかどうかだからの。うまくいって、いまごろまだ合戦つづき、火花を散らしているであろ」

「内応なくば勝たざったとすると、金吾は恩賞ものか、加増あるか」

「まさか。罪がきえるだけで精いっぱいよ」

「他の裏切り大名はどうなるか」

「金吾を許して、他を罰するわけにもいくまい……」

やみが動いた。

声もなく、足音もなく、影がにじんだ。ひそりと、かたわらにすわった。これも全身黒ずくめの筒そで軽衫で包み、鉢金ずきんから双眼ばかり光らせた男である。特徴といえば、忍者には珍しい巨体であろうか。

「鮫か」

「む……」

「頭領は？」

「何やら、捜しものがあるとのこと。ひと足さきにもどったわ」

「三成はやはり逃けてか」

「佐和山へ逃げもどったかもしれぬ。関東方でもそう見た様子じゃ。黄門秀秋が明朝攻めのぼる」

「ふっ、金吾中納言め、まだ疑われているわけじゃな」

「裏切りの総仕上げは佐和山攻めというわけよ。脇坂も朽木も小川も先手となったわ。家康の鼻息をうかがうこと、太閤の前へ出たるよりもはなはだしいわ」

報酬しだいで盗みも殺しもする忍者たちでも、裏切りはやはり許せないとみえる。忍者以前の、人間として、男として、いや武士を表看板にしている男の行為ゆえに、なおさら許しがたい。忍者は、おのれのワザをひそかな誇りとして、やみに生きている。誉れある武将の皮をかぶった人間には、それだけの節操が要求されるはずであった。

「おもしろきは家康よ、桃配山では、じりじりしおっての血相変えて、秀秋をののしってい

たが、いくさは勝ちときまってから、とんと話のわかるおやじぶりだわさ。河内守（朽木元綱）が平身低頭して命請いをするのへ、なんというたと思う？　なんじらごとき小身者は、大勢の動きに身をまかせたのは草のなびきにひとしい、もとより戦場の習いなれば大罪あるべき道理はない、佐和山での武勲しだいで本領安堵申しつくる、と、こうじゃ」

「天下さまか、天下をものにするほどの男、おどしたり、すかしたり、ちょうほうな口を持っているわい」

「へどが出る」

鮫はわきをむいて、かっと青痰を飛ばした。

それで思いだしたように、忍び刀を抜くと、ぺっぺっとつばを吐きかけ、血流しから刃先をぬぐった。

「切ったか」

「うるさい雑兵をな。刺した。骨にふれたようじゃ、ゴリッと鍔子が泣いた」

かざして、すかし見る。文目もわかたぬ山峡のやみも、忍者の目をはばめないのか。

「刃こぼれしたわ」

いまいましげにつぶやいたとき、

「馬だ」

さっきから黙りこくってふたりの話を聞いていた男が、ぎょろりと目をあげて、

「近い……」

「一頭か？」

「む……したが……」

「どうした？」

「重い……」

鮫には、その意味がわからなかったようである。

三人はやみに溶けた。そのあたり身を隠す岩も木も、尺草も――西は草のたけ一尺あれば身をひそめうるといわれる――なかった。一間飛べば巨杉の幹があり、二間背後に洞窟が口をあけている。

にもかかわらず、かれらはその場を動こうとはしなかった。へたに動くことが、影の形をあらわすことになるおそれがあったからである。

そのままのかたちで、やみに溶ける。双眸だけが生きてじっとかなたを透かした。

馬蹄は近づき、影が浮かびあがった。

三人の緊張がゆるんだ。やみからはじけたように三人は立ち上がり、これを迎える姿勢になった。

「――頭領じゃ」

「何やら、かかえてござる」

「金箱か？」
「いんにゃ……人間じゃ」
「はて、生けどりか。ひとりふえたな」
その男は、洞をふりかえって、
「たしかに金になるかのう」
「身分しだい」
騎馬は杉林を出ると、土くずれした小石の坂を駆けのぼってきた。
三人の輩下の目が、不審をこめて見守っているのを見ると、前壺に乗せた男を、どさりと草むらに投げおろして、
「島左近だよ」
女の声にもどっていた。

2

左近は動かぬ。投げだされたままのかたちで草むらに横たわっていた。
三人の忍者は目を見合わした。島左近をさらってくることは予定になかったのである。
三人の目が不審をこめて、ふりかえったのを知ると、女頭領はついとうしろをむいて、

「岩陰に隠しておいで」
手綱をひとりに投げた。
「思いのほか足が速いよ」
ひとりごちるような言いかたには、三人の輩下の思惟を糊塗するひびきがある。
「頭領、この男どうなさるおつもりだ」
鮫の声が引き止めた。
「――同じさ」
「……」
「堺の薬種屋と」
「したが……金があるかな」
「――軍師として天下に聞こえた男だもの……」
「負け大将が。いや、知恵も軍略も裏切り者あってはなすすべもござるまいが、いくさの掛け引きに才ありとても、金銀の才覚は別もの」
「……」
「いわんや、この左近は、治部少が禄を半分くれると申すのをことわって一万五千石に甘んじた男でござる。くれると申すのをことわるたわけじゃ、約束どおりもらえば十万石にもなれたものを」

「佐和山に残してあるよ。治部少が逃げかえれば、籠城するにも、左近の知恵がほしい。何千両でも出すだろう」

「――さあ、それは」

鮫は首をかしげた。

「少なくてもいいさ。どうせ、軍用金の半分はゆうべもらったから」

「さよう。じゃによって、この左近の身がらは無用の……」

「鮫！」

ぴしっと、はたくようなするどい声で、

「くどい」

「は……」

「それより、薬売りは」

「別条ありませぬ」

「引き出しておいで、陣屋には軍用金らしいものはなかった。どこかに隠してあるにちがいない」

洞窟の奥から、追いたてられて、人影がよろめきながら出てきた。

これは小西摂津守行長であった。

突き飛ばされたように、のめって、ひざをついた。

「うっ、な、なにをする！」

〈すわれ〉

「無礼な！」

がまのようにはいつくばって行長はふり仰いだが、背後にはだれもいない。突きとばした黒装束の忍者は、かき消したように、消えている。

「……」

目の前にも、左右にも人影はなかった。

小雨のけむる夜気が甘く感じられたのは、洞窟の奥の息苦しさから解放されたせいか。やみに目は慣れていた。

（逃げられる！）

行長は感じた。

走りだした。ぬれた草に足をとられてつんのめった。すでに不惑、若くはない。数カ所に傷も負っている。

ぬるっとどろのなかに両手をついた。が、懸命に起き上がった。これほど切実に、走ろうとしたのは、生涯にそう多くはない。文禄二年正月朝鮮で李如松の大軍に攻められたときぐらいだ。命からがら平壌から逃げた。あのときも命がけだった。

両手をどろだらけにして、走ろうとした。

その面前に、
〈弥九郎！〉
切り裂くような声が、
〈どこへ行く〉
声と同時に、小雨を切って黒いつぶてが飛来した。しゅっと耳朶を焼き空へ走る。
思わずたたらを踏む——そのつまさきに、ぼくっと二撃が食いこんだ。
「あっ……」
のけぞって半歩すさる。と、かかとへ、三打が。
四打もつまさきへ——びしっとつめが割れたような痛みで、
「む……」
よろめき、片ひざついた。
手裏剣のつぶてが、それでやんだのは、行長が逃亡を断念したと見てとったからであろう。
〈弥九郎、往生ぎわが悪い〉
さっきの声は、笑いを含んでいた。
〈往生ぎわが悪い〉
別の声が復唱した。
〈あきらめろ〉

また別の声がいった。これは背後から聞こえた。
〈キリシタンはあきらめを教えぬか〉
行長はキリシタンに改宗している。高山右近や大友宗麟（これは晩年、禅宗にもどったが）とともにキリシタン大名として知られていた。
宗門を罵詈されたと聞いて、きっと、行長は面をあげた。
「ぬ、ぬ、ぬ、夜さり烏が、天主をそしるか、地獄へおちようぞ」
〈ふふふ、地獄へ行くのは、なんじじゃ〉
行長は、黙った。
あの戦乱のなかから、救いだした、神技といいたいほどのあざやかさといい、やみをやみとも思わず行動できる忍者たちの恐ろしさがよみがえったようである。神を恐れぬ者ほど強いものはない。忍者は、神だのみせぬ。おのれの覚えたワザと、忍者以外の人間の虚妄を——懐疑逡巡弛緩疲労諦悟の〝弱さ〟を信じて、待つ。乱れを待つこと、すなわち忍耐。常人ではなしえない忍耐が、常人との対峙において、すでに勝っていた。
武将の肩書きも、実体も、すべてを失ったいまの行長にとって、何よりも恐ろしい相手であった。天主の助けも望めぬ——
おのれのみじめな姿をかえりみるゆとりもなく、行長は哀願の声を漏らしていた。
「そのほうらは、いったい、何者だ。なぜわしを……ひとたび助けて、助けたうえで、いため

ようとするのだ、何の恨みがある？」

木々が音をたてた。ふけゆくほどに雨はやみ、伊吹の颪は激しさを増している。

〈恨みはない〉

やみの声は、あっさりと否定した。

「――な、ならば……」とびつくように、

「解き放せ、放してくれい、宇土へもどるを得なば、恩賞をとらすぞ」

〈肥後か〉

あざけりをこめて、

〈遠すぎる。肥後までもどることはあるまい。いや、肥後へもどる気はない〉

「それは……いかにも、大阪城には毛利中納言の軍勢がそっくり傷つかずに残っておる。立花左近将監もおる。おそらく、島津も長束も運よく落ちなば、大阪にこもり、幼君を奉じて、いまひとたびの合戦をこころみる所存であろうゆえ、わしとても……」

〈大阪は堺に近い〉

やみの声はせせら笑うように、

〈堺に黄金を隠していることは、わかっている〉

3

行長はとっさに声も出なかった。強い衝撃を受けた様子を、やみの目は見のがさぬ。

〈ずぼしであろ〉

「……」

〈われらの目は、天主よりも確かだから〉

「知らぬ」

やっと、われにかえって、行長はどなった。

「なにを、たわごとをいうことか、堺など、堺など、とんと行ったことがないわい」

〈たばかるまい、弥九郎〉

「や、弥九郎弥九郎と、呼び捨てはほどにいたせい。昔はしらず、いまは従五位にして摂津守なるを」

〈ふふふふ、きのうまで、といい直したほうがよい〉

「……」

〈もはや、ただの弥九郎。薬売り小西屋寿徳が婢女に産ませた弥九郎にかえったのだ、弥九郎でなぜ悪い、弥九郎〉

「ええい、愚弄にもほどがある。いまいちど合戦を……」
〈できるか？〉
「おう、やるとも」
どこまで本心か。行長は精いっぱい、ほえた。
〈ふふふふ、落ちることができるか？　われらの前から逃げだすこともできずに〉
「だ、だから、頼んでおる。助けてもろうた恩は忘れぬ。天主の恩寵を祈ってもやる。のう、頼む……」
〈忍びノ者に神はいらぬ〉
「そ、そうではあろうが……」
〈祈るかわりに、黄金を吐くがよい〉
「……」
〈堺の、どこだ？〉
これは背後の声であった。
行長は、びくっと肩をふるわせた。問答にしびれをきらした語気だったのである。背後から、襲われるような恐怖で、
「か、金もやる、そっくりやる」
〈いかほど、ある？〉

「白銀……六枚」
やみは沈黙した。
「し、七枚、な、七枚とらすほどに」
沈黙はつづいた。息苦しいやみ。それは明らかに否定の冷たさに占められていた。
ところが、やみの声は意外にも、応諾の返事をもたらしたのである。
〈よかろう、十枚、出すか〉
「しかたがない。十枚……」
〈証文を書いてもらおうか〉
語尾の消えぬうちに、ひらりとやみに白いものが舞った。
しらさぎが突然舞いおりたような——
一葉の白紙であった。それとともに、何やら、右の耳に触れた。木の葉か小枝か風で舞いおちてきたような感じであった。
なにげなく手をあてると、なめらかな小竹が触れた。
これは筆だったのである。
それも、驚いたことに、たっぷりと墨を含ませたものであった。
いかに奇怪なワザを駆使する忍法とはいえ、あまりにも意表をつかれて、行長は、声も出ない。

〈書け〉
「……どう書くのじゃ」
〈一筆でよい。いのちの代として、しろがね十枚差し上げそろ……と〉
もはや、命じられるままであった。おのれの意志ではないように、腕が動き、筆が走った。
霧か小雨か、やみにほの白い紙に墨をにじませた。
筆と紙は与えられたが、あかりはない。
やみをすかすようにして書いたのである。字も大きく、ひらがなであった。
〈よし〉
どこで見ているのか、小西摂津守と署名し終わると、怪しの声はいった。
〈花押を忘れまい〉
ごまかしはきかぬ。
行長という字を変形したいわゆる二合体花押で、自筆の証拠であった。
〈書き終えたら岩の上に置いて、去ね〉
「い、行ってよいか」
〈大阪でも、堺でも……肥後でもよいぞ。金はいずれもらいに行く〉
「よいとも。わしは約束をたがえぬ男じゃ、神かけて」
行長は、立ち上がった。

手裏剣に傷ついた足のつめがひりひり痛んだが、やっと、ぶきみな忍者の桎梏から解放された喜びで、歩きだした。
月も星もない。方角も分明でない。が、一刻も早く、この場から離れたかったのである。
走りだそうとして、木の根につまずき、行長は転倒した。はずみで、二、三回ころがった。草のなかであった。
「あっ！」
ぐしゃっと、何かに触れた。倒木ではなかった。人間だ。動かなかったが、そして、数瞬ではあったが、かれの手に触れたそのからだは生暖かく、生きていた。
（人だ……）
死にかけているのか？　だが、しょせん、ひとごとだ。いまの行長は自分のことで精いっぱいだ。たとえ、キリシト上人が路傍に倒れていても、助け起こすことをしなかったろう。
〈早く行け〉
やみの声は追いたてた。
〈夜明けまでに伊吹からぬけられぬぞ〉
「まいるが、道が……西はどっちじゃ」
そういいながら、行長は夢中で手に触れたものを懐中にした。半ば無意識の動作だった。
「樵の杣道にでるまでも、案内してくれぬか」

この場合、ぜいたくな要求であったろう。だが、次の瞬間、行長のからだ、宙に浮いた。てんぐにさらわれたとは、こんな気持ちであろう。行長は風の音を聞いていた。顔の左右を木の葉が飛び、霧雨が矢のように、ほおを額を刺した。

おのれの身が馬上の男に抱きかかえられていると知ったのは、疾走がはたとやみ、

「うせろ、どこへでも」

と、投げおろされてからであった。

4

どのくらい馬は走ったかわからない。快適と感じたのも、のちのことである。そのときは無限の天空にさらわれるような不安と恐怖で、生きたここちもなかったのだ。

恐怖の時は、わずかな時間でも長く感じるし、距離などしたがって計るどころではなかった。谷も坂も森も、伊吹颪が見さかいなく吹きまくるように一気にかけぬけたのだ。

はっきりしていることは、あの異様な洞窟から遠ざかったということである。

(さて、どっちへ行ったものか……?)

徳川方の落ち武者狩りは、山中へも執拗な手を伸ばしてきているにちがいない。

小西行長の首は、かれらにとって、千金の価値がある。自賛ではない。むしろ自嘲でふりかえられるのである。

天下はこれで家康のものになろう。関ガ原の一戦は、後世、家康への反逆としてしるされるであろうし、三成や秀家らとともに、行長の名も、逆賊扱いされるにちがいない。

逆賊、首謀者の首が、いかに雑兵らにとって出世の手づるになることか。

それは家康の憎しみに正比例するであろうことも、疑いをいれない。

(つかまるものか、あの忍者ども、野盗さえごまかしてきたのだ。なんとしてでも大阪へ……)

歩きだしたとき、また馬蹄の音がした。

(もはや、追っ手が!?)

行長はあわてた。林の中へ走りこんだ。

馬蹄の音はしかし、近くまできて、絶えた。

ほっとして草むらから身を起こしたせつな、するどい痛みが、左足に走った。

キーンと金属的な音がしたような激痛である。音ではない。かれの身内を貫いた衝撃の激しさ。突然の痛みは、鼓膜をつんざいた。

「……!!」

悲鳴を吹いて、どさっと草のなかにのめった行長の頭上で、かすれた笑い声が起こった。

〈忘れものじゃ〉

さっきの声。

「う、う……なんと」

首をねじまげてふり仰いだ目には、しかし、一瞬、ほの白く刃が見えただけであった。

〈片足の筋を切ってくれた。堺までひと飛びで行こうぞ。さあ、走れ〉

「おのれ！　あこぎなことを……」

絶望のうめきは、むなしく夜風にかき消された。

堺までひと飛び、とは、意地の悪い反語だった。行長は、立ち上がろうとしたが、歩くこともおぼつかなかった。

左足のアキレス腱を切られていたのである。

激しい痛みと、おのれのものではないようなむなしさ。

「あの忍者め、執ねこい……なぜだ、無事に落ちなば、しろがね十枚を……」

少なすぎたのか。

傲岸な忍者たち。バカにされたと思っていっそう苦しめようというのか。それにしても、残忍すぎる。この夜半、山中をどこまではっていけるか。

（死ねというのか！）

いずれ捕えられてしまう。

なわめの恥を受けるくらいなら、いっそ自殺したほうがマシだ。

その一瞬の思案は、行長の心の一部に残っていた武士のものであろう。が、キリシタンとしての思慮のほうが強い。

（みずからをあやめるなかれと、天主も教えられている……）

それは、あるいは怯懦の詭弁だったかもしれぬ。

武士らしからぬ生の執着とそしられてもしかたがない。武士であり、大名である以上、人を殺すのも必然であり、天主はそれを許してはいないはずだから。キリシタン大名が非難されるのは、その点にかかっている。

草むらから杣道へはって出た行長は、渓流の音を聞いた。

（川が近い……）

川を伝わっていきさえすれば、村里へ出るはずだ。

瀬の音をたよりにはい進もうとした行長は、ふと胸につかえるものを感じた。

懐中に袋がある。

引きだして、すかしてみると、本金襴の守り袋だ。

「これは？」

見覚えがあるような気がした。

定かではなかったが、手ざわりだけでなく、金襴の模様がどうやら見える。いつの間にか、星が出ていたのだ。雨はやみ、空には雲が走り、月が顔を見せた。陰雨に昼も夜も降りこめられて忘れていたのだが、晴れてみると、美しい十六夜月だった。

「これア、わしのじゃ」

さっき、洞窟の前でだれかにつまずいたとき拾ったものだ。無意識に懐中にしたのである。

遠い記憶があった。文様も家紋を浮きださせたものだからまちがいない。

行長がキリシタンに改宗した際、たしか、島左近に請われて譲ったものだ。二寸ほどの阿弥陀如来像をおさめたお厨子がはいっている。はじめ石田三成に譲ろうとしたところ、

「わが家は法華なれば」

と、固辞された。島左近は真宗とか浄土とかいう話であった。

ふるえる手で金襴の袋をあけてみた。

「やはり……」

見おぼえのある黒塗りお厨子。中の金無垢阿弥陀もそのままに、月を受けてほのかに光った。

やはり、というなずきは、あの男の軀幹の特徴が思いだされたからである。

「島左近！　生きていたか……」

からだには、ぬくもりがあった。

あの混乱の戦場では、生死のほどもわからなかった。首謀者のひとりであり、聞こえた武辺者だけに、討ち死にしたであろうと頭から決めてかかっていた。

その左近が生きていたということは、何がなしに、ほっとする。あるいは討ち死にを覚悟しての壮挙に、おのれひとり助かったことのうしろめたさが、いくぶんでも消えるような気がしたのであろう。

左近が忍者の巣でどういうめにあうか、それをしかし心配するゆとりはない。

いまは、片足のすじを切られたこの身でどこまで行けるか、それだけが、課題であった。行長はその信奉する天主に念じようとした。常に胸にさげている十字架をつまみあげようとして、はじめて気がついた。銀の十字架はなくなっていた。

どこでなくしたか。戦場か、途中か。キリシタンたるあかしの十字架をなくし、代わりに阿弥陀さまを手に入れたことの皮肉を、どう解釈するべきか。行長のおもてに苦笑がきざまれたのは、一瞬である。

瀬の音のする坂の下のほうから、ちらちらと木ノ間隠れに、いくつかの火ノ玉がのぼってくるのが見えた。霧ににじんで、消えたりあらわれたり人魂のようにも見えるが、これは松明にちがいなかった。

そうだ、落ち武者狩りの。

麻羅卍

1

月はここにも照っていた。洞窟の岩はだがぬれぬれと青く光り、その照りかえしが島左近の顔を草むらに浮き上がらせていた。

「――なるかな」

忍者のひとりがいった。

「さあな」

別の影がいった。

ふたりとも、顔をのぞきこんでいたのである。

それだけで意志は通じたらしい。

「頭領はああいうが、な」

「なにせ、いくさしか知らぬ男ゆえ」

「金銀にはのう」

「さりとて、わざわざ、ひっさろうてきたのじゃ、頭領になんぞ思案があろう」

「さて、それさ」

と、語尾は笑いを含んで、

「佐和山の城をそっくり手に入れるためか」

「なんぼになる？」と、相手は笑いというものを忘れた冷たい声で、「佐和山の金蔵になんぼ残っていたとしても、もはや関ガ原の敗報は届いていよう。るす居の者どもが、わけ取りしているに相違ない」

そこに馬蹄がひびいてきた。

行長を捨てに行った男がもどってきたのである。

ひらりと身軽くおりたって、

「次はこやつの番だな」

「む……責めるか」

「責めても、金があるかどうか」

その三人の疑問に答える声がした。

「それだよ、調べるほうが先だよ、鮫」

洞窟から出てきた女頭領は、手に三つ袋をさげていた。忍具袋である。

「鮫」

「おう」

「おまえは、治部少を捜すがよい。この伊吹のいずれかに潜んでいるはず」

「――かしこまってござる」

「鼠」

「ねい」

「おまえは佐和山へ」

「……」

「曲」

「これに」

「水口だ、おまえは。長束大蔵を……」

「……」

「大蔵は蓄財にたけた者、城にもどって、黄金の始末をしているにちがいない。さぐってくるがよい」

「すでに」

と、曲と呼ばれた男は、したり顔に、

「流と暮と旦が、まいっておりまするて」

「――おまえが行かねば」

この女頭領の口から、そのような信頼のことばを聞いたのははじめてだったのである。

曲は、単純に感激した。

「ただちに」

「ぬかるまい。行け」

言下に、三人の影は鳥の飛び立つように、宙へはじけた。頭上から木の葉が夜風にあおられて舞う。草の上におちたときは、三つの影は、すでに視界になかった。

それを見とどけてから、頭領は、黒装束の一部に手をかけた。すっと指先を動かしただけであったが、するりと着物はすべりおちている。

筒そで、軽衫の軽捷な忍び装束の下ははだじゅばんと短い腰のもの。月光のもとにほの白く浮かび上がった手足は、これが残忍な忍者集団の頭領とは思えない華奢なものだった。

ついで、ずきんをむしりとった。束ねたひもが解けたか、ぱさりと黒髪が背をおおい、背に波うった。腰に及ぶゆたかさ。自然の波が、しっとりと沈んだつやを放って、青い月光のなかにほの揺れるさまは、深海の藻を思わせる。

ずきんにおもてをおおっているときは、まがまがしいまでにするどさをきらめかせた双眸も、ほそい三日月まゆや、冷たくとおった鼻すじや、ぽつりと紅をおとしたような、小さなくちび

るに配置されてみると、深い悲しみをたたえた、孤独の女のひとみであった。

多くの荒くれ男たち、ひとすじなわではいかない、陰惨な過去を持つ忍者たちを統率し、駆使するには、この谷間の白菊を見るような静かな優美な姿体では至難にちがいない。

忍び装束は、ただに男たちの目に好色の刺激を与えないためというより、彼女自身の心がまえをひきしめるためでもあったろう。

奈良半晒のじゅばんから漏れる胸のふくらみも、腰の張りも、男を知らぬ未通女のそれのように、ひきしまった美しさを残してはいたが、死んだように動かない男の顔をちかぢかとのぞきこんだのは、男女の情を知った女のすがただった。

男の肩にそっと手をかけると、

「――左近どの……」

低く、ささやくような声だったが、すぐと反応があった。

「う……ううッ……ううむ」

草むらにうめきがはった。

左近の顔が苦痛にゆがむ。なまじ、正気に返ったことで、痛みがよみがえったらしい。

右腕のつけねと腿から腰にかけて、布きれが巻きつけてある。

戦場から、さらうように助け出してくる途中、応急の手当をほどこしたのである。

女は、すぎの木にぶらさげてあった皮袋をさげて、液体を口に含むと、左近のくちびるに――

口うつしに飲ませた。左近ののどぼとけがごくりと動き、うめきが高くなった。

眼が開いた。

濃いもやのなかを、むなしくさまよっていた左近は、そのもやが切れ、夜空にまるく、明るい月を見た。それが最初である。

定まらぬ焦点のなかに、女の顔がのぞきこんでいる――

はっと、身を起こそうとした。

「――動かないで」

「そなた……だれだ？」

女は答えずにほほえんだ。

遠い記憶が、その顔を思いださせようとしたが、曖々たるもやがたゆとう脳裏では、映像がむすばれぬ。あせりが、さらに無意識のうめきを大きくした。

「もう少し、じっとして」女はいった、「もう少しすれば、楽になります」

「だれだ、そなたは」

「いっても、知らない」

「申せ……」

「聞きたい？」

媚びるような柔らかい笑顔である。

「聞きたい」
「――おふり」
と、女は名のった。
もとより、左近にははじめての名である。
「おふり……か」たしかめるように左近はくりかえした、「いい名だ。愛らしい、おなごらしい名だ」
「ふふふふ」
うれしそうにおふりは笑い、ぴたりと身を寄せてきた。はだじゅばんからこぼれた乳ぶさが、男の胸を圧した。

2

その女のはだを柔らかいと感じ、男の血の騒ぎをおぼえながら、左近はしかし、女の名と顔の記憶を呼び起こせないでいた。
「もう少し、じっとして」
女はそういった。
(助かったのか、おれは……?)

生きている、というのは、死しか考えなかった左近には不思議な感覚だった。三成や他の味方の武将たちへの慚愧は別段にない。
ただ、島左近勝猛として聞こえた名声が、どろにまみれるのではないか、という思いが、かなりの強さで胸へ突きあげてきたことである。
武辺に生き、武将の名をほしいままにした半生が、生をむさぼる喜びよりもはなばなしい死を選んだことが、この男らしい〝生き方〟だったのだ。
(ムザと生き残ったか……)
どうやって戦場からのがれえたか、もとより見当もつかぬ。
が、ここに、
(生きている……)
あの暗空と、豪雨。雄叫びと、馬のいななき、馬蹄の音、数万の軍勢の足音、鎧の触れあいもみあう音、刀槍の鏘然たるひびき。そして、どろと、血と慟哭、呻唸のうず――地獄変そのままの戦場と、この静かな山峡の夜気と、蒼月と。
耳に聞こえるものは、狂った雄叫びではなく、伊吹颪であり、女の声……そして、血のにおいに変わる女の甘はだのかおり、鎧の冷たく堅い手ざわりにかわるやわはだのこころよい感触だった。
夢を見ているような――。誇張ではなしに、左近はそう思った。

夢ではない。

女の顔が、月をさえぎっておちてきたと思うと、左近のくちびるは、暖かいくちびるにふさがれた。

するりと、舌がすべりこみ、歯をこじあけた。生きもののような動きであった。

〈じっと、じっとして……〉

舌に舌がからまり、息苦しいまでの契りのなかで、女はささやいた。

命じられなくとも、左近のからだは動かぬ。

鋳型にはめられたように、動かぬ。女を抱くも突きのけるもできない。手も上がらず、足も曲がらぬ。

女の手も足も、そんな左近を、しっかりと抱きしめて、身もだえした。

あらあらしく、けものめいた舌の動きで、甘い唾液をむさぼりつつ、乳ぶさもひしゃげるばかりに、男の胸板を押している。

ほとんど、左近も半裸になっていた。女体は、その身もだえのたびに、はだをあらわにしていき、細い帯ひももそらどけて、なまじの全裸よりも、妖艶なふぜいになっている。

この山中。輩下の忍者たちは八方へ派遣したあとで、だれの目もないという安心感が、この若く美しい女頭領を、みだらな〝雌〟にしているのであろう。

だが、たしかに、この情景をのぞき見る目はなかったろうか？

蒼月のもとに、白いふくらはぎが、まるくかたちよくひきしまった臀部が、くりくりと動いている。

それは、死屍のような、男のからだの反応のなさに、もだえている過淫の女に見えた。

おふりが顔を離すと、くちびるにくもの糸のようにつばが引いて、青く銀線に光った。

洞窟から小さなつぼをささげてき、左近の傷に塗りはじめた。

忍者の秘法は医術にまさるという。毒草毒液を用いて医療に効あらしめるには、さじかげんに微妙な秘伝がある。忍者の非情さは、医を職業とする者すらも恐れるほどだ。世間でいうところの〝盛り殺す〟ことの悔いや悩みを、かれらは知らぬ。モルモットでためすように人間でためす。秘伝はそこに得られる。

つぼの中身は琥珀色のとろりとしたものであった。布きれをはいで、肩から腕へ塗りつけて摩擦する。按腹の技法にも似た指の動きであった。

さらに、おふりは、その薬を、左近の股間に塗りつけた。

左足の内腿がむざんな傷あとを見せていた。もう血は出ていない。途中でおふりが縫ったのだ。ぶつぶつと血の凝固がむごたらしいが、これは、かれらの常識からすれば治癒したにひとしい。

薬をたんねんに塗布したのは、股間の逸物であった。内腿を刺されたとき、きっさきが触れたのであろう。傷はかすっただけであったが、陰嚢と陰茎をかすかに傷つけていた。

おふりが、口中を契り、胸を合わせて、男の心気をゆさぶったにもかかわらず、左近の〝男〟はよみがえらなかった。

五体を凝固せしめたのは、体力精力をこの一点に集中せしめるためであった。

女忍の使命は、ときに、男の精気を吸いとるためにのみ、忍びこむことがある。敵方よりの依頼もあるし、身内から頼まれる場合もある。侍妾の寵愛ぶりに嫉妬の炎を燃やした奥方が、夫を一時的に陰痿にせしむるなどのときだ。

女忍はまず、宵のうちに仮眠せしめて、夢寐に精力を絞りとる。夜半、さめても、もはや侍妾の閨を訪れる気がおこらぬ。夜ごとこれをくりかえすうちに、寵妾から心が離れるわけだ。

忍者にとって、刺殺にせよ、毒殺にせよ、ただ殺すのは容易だ。陰茎をえぐりとってくることもある。が、夜ごと、陰痿ならしめて、恋情をしだいに冷えしむるというこまかいワザはかえってむずかしい。

この場合、熟睡のうちに射精をしているのだから、五体の動きを止める。精力は一点に集中し、しこうして射精するのである。任意ではない。その体力の許すかぎりを漏らす。陰嚢ヲ涸ラシメテ而ノチ止ム——と房中秘術に説くところのものだ。

いま、女忍おふりが島左近にほどこしたそれは、目的こそ違え、精気を集中させる意味では同じであった。

結果はむなしかった。おふりの手のひらのなかで、左近の裸根はだらりとなえしぼみ、見るかげもない。

3

武辺者が必ずしも雄偉なものにめぐまれているとはかぎらぬ。英雄いろを好むとは、その行動が堂々としているところからくる単純な見方にすぎない。好色必ずしも英雄豪傑にかぎらぬ。もっとも、そのことばには、いろを好むほどでなければ、英雄になりえない、という東洋的理想主義が含まれているのだが。

島左近勝猛が、武将として過不足ない体力精力を所存していることはすでに述べた。いわゆる好色の部類にはいるかどうかは疑問であったが。

この哀れなまでにしぼんだものが、常の左近のものではないことを、おふりはすでに知っていたのである。

こうして、秘薬をおしみなく患部に塗布し、もみやわらげ、浸透に心しているふぜいは、実の妻も及ばぬ介抱といわねばなるまい。秘薬は何を混じてあるのか、えもいえぬ芳香を放った。

女忍の指は、さながらその芳香に誘われたように陰部をなずっている。まんべんなく塗ってはもみ、もんではすりこむ。秘薬の効果か、指の動きが巧みなのか、しだいに陰茎は活力をよみがえらしてきたようであった。

ほっと、おふりのおもてに喜色が浮かんだ。
おふりは杉の枝に手をのばした。
酒の皮袋をとりおろそうとしたのである。
「……」
はっとした。
そこに皮袋はなかった。
つい今しがた、一口含んで、そこに掛けたばかりであった。
掛けちがい？　そのあたり、杉の幹は二、三間の距離がある。掛けちがうことはない。
左近の容態に気をとられて、草むらに落としたのかもしれぬ。
おふりは、草のなかへ分け入った。杉の影は暗く、酒袋は見えぬ。ころがるはずはないし、いたずらな野猿でもひっさらっていったのか。
ただの酒ではない。気つけの薬酒である。
ようやくにききめがあらわれた陰茎を、薬酒を含んだ口で愛撫することによって、さらに早効を見ることができる。
おふりはあせった。あせったひとみが、次の杉を見た。そこに、酒袋がだらりとつるされている。
「いたずらを……」

やはり野猿のしわざと思ったのである。
走り寄ろうとして、はっと、たたらを踏んだ。
さすがに忍者の頭領。
野猿ならざる、人間のけはいを感じとったのだ。月光漏るこずえのかげに、なまぐさい呼気がある。
なまぐさいにおいは——
体臭ではない。にらのそれともちがう。いうなれば淫猥なる心気か。
女忍にしてよくそれを察知しうる。やみの影が、彼女のはだに欲情したことを、夜気の乱れが物語っていたのである。しどけない半裸の姿で、これも半裸の左近と口吸い、さらに裸根を愛撫して身もだえるさまは、もしうかがう目があれば、淫靡な刺激を与えずにはいなかったろう。
おふりの手から、つぶてがやみのこずえに飛んだ。
つぶてはそこに落ちていた小石である。
ぱしっと、小枝がはぜた。
哄笑は別の方向から起こっている。
〈違った〉
揶揄が夜気をふるわした。

〈淫に狂うてか、あさましや、ふふふふ〉

かっと、おふりは逆上した。

冷静を欠くことはめったにない女である。衝撃の大きさを、それは物語っていた。

(何やつ！)

不覚だった。

いまの姿をのぞく目が虚空にあったとは。たしかに、淫情におち、鈍感になっていたのだ。

半裸の身に、忍具のいっさいがないことも、おふりから日ごろの自信を奪った。

狼狽は何よりも忍者の敵とされている。寸秒の遅速が勝敗の岐路となる戦いにおいて、狼狽は勘を狂わせ、目測をあやまらせ、阿吽の気を計りがたくする。忍法にあって狐疑逡巡を不可とするのは、無暴な攻撃を勧めるのではない。真を見る目あれば、狐疑することなく、したがって逡巡の要なしとするのである。

その真を見る目を、おふりは失っていた。

ただ裸身をのぞかれたがためではない。

荒くれの忍者たちをあごで支配するためには、おのれが女であることを忘れたし、意識させぬことに腐心してきたのである。

かれらの前ではだを見せぬこともむろんだが、忍法のワザにおいても、かれらを凌駕した。

忍びたる者がワザの優劣をすべてとすることは前に述べたとおりである。ワザに生き、ワザに死ぬることをもってひそかな誇りとする。

あらゆる階層の集団生活が、それぞれのルールがあって統制がきくように、世間の目からは陰惨非情な忍びノ者たちにも、このワザを重んじる気風が、かれらの社会を規制している。

年齢性別を越えて、頭領と輩下――輩下のなかでも序列を定める目安となっている。

読者周知のいわゆる伊賀者の上忍下忍の階級差は、このおふりを首魁とするなかまにはない。

伊賀四十九流の伝統と組織から疎外された集団であった。

それだけに、おふりのワザと、男まさりの気性が、かれらを統率するうえに絶対の条件となっている。

悲しいまでに男のはだに我を忘れた姿を見られることは、この絶対性の崩壊を意味したのである。

(輩下のだれかにちがいない……)

他の忍者が、この山中に迷いこむことは考えられなかった。樵ですら、この洞窟は発見できまい。かれらが〝出張り〟の仮屋とするには、それだけの用心がある。

いま、ふらちにも、彼女の痴態をうかがうやみの目は、輩下のひとりであることは、もはや疑いをいれぬ。

〈おふりどの、話がある……〉

やみの声はいった。揶揄のひびきをこめた声のゆとりが、おふりをいらだたせた。

4

何をいうつもりか。おふりはじっとやみをにらんだ。明らかに輩下のひとり。かれらに、

（おふり）

と、呼ばれるのははじめてだった。

すでに、対等のつもりだ。いや、優位にある。かれの口から、他の輩下に漏れたら——これまでに築きあげた女頭領の地位はたちどころに転落し、かれらは餓狼のように牙をむくだろう。これまでに得た財宝も、わけ取りされてしまうのは明らかだ。

おふりが裸身を見せ、はだを許す場合は、すべて忍盗としての目的のためにかぎられた。目的のために裸身になるとき、痴態を演じたとしても、それは、輩下に対して負いめにはならない。

〈——おふりどの〉

と、その声は、重ねた。

〈——悪いが、見た〉

〈……！〉

おふりは草のなかで、ほおが上気するのをおぼえた。非情の女忍も、本然的な女性に返っていた。

〈そなた、男がほしいか？〉

〈……〉

〈無理からぬ。が、そやつ、島左近がふぐり死んでいるようじゃ〉

〈……〉

〈死人のふぐり、なんぼいろうてもせんない。そなたのほしいもの、ここにある〉

〈……〉

〈ずんとまえから、恋うていたのじゃ、意地もほどになされや、のう、おふりどの……〉

左近に対するおふりの目の尋常ならざるを見ぬいて、引きかえしてきたのであろう。

三人のなかのひとりにちがいない。

（——鮫か、曲か、鼠か……？）

だれとも、見わけはつかぬ。

相手もそれを警戒している。一つまちがえばなかまの制裁を受けるはめになる。

この場合、両眼はえぐられ、鳥のえじきとされ、身はさかさ裸づりとなって谷川につるされ、左右の岸から股裂きされる。死骸ははげたかに供されるのである。

だが、おふりのはだをけがし、おふりの心を手に入れたなら、輩下筆頭にのし上がれるのはまちがいない。あわよくば、首領になれる。

色と欲を合わせた野望なら、

（鮫ではない……）

鮫は彼女の右腕である。

以前はときおり、好色の眼を光らし、すきあらばのけはいだったが、近ごろはすっかり威服している。

（鼠か、曲か……？）

だが、彼女の裸身だけに引き寄せられての理不尽なふるまいとすると、鮫とて、範疇外ではない。

三人のうち、たとえだれであろうとも、一度こうしたふるまいに出た以上、許せない。

おふりは、ほぞを決めた。

よろりと、草むらから身を起こしたのである。

「――ほしい……」

淫情に身も世もないように、身もだえして、いった。声もうるんで、

「くだされ……」

虚空に差し伸べた手が、わなわなとふるえ、耐えられないふぜいで、えりをかきひろげ、双の乳ぶさをぎゅっと握り、ゆすった。

そのさまは、まだらな蒼月の下で、神秘といいたいばかり、淫靡にして、妖艶な姿に見えたのである。

〈――よ、よいとも〉

効果はあった。平静を欠いた声が、どこやらから聞こえ、こずえが揺れた。そのかげか？が、安心はならぬ。いかなる場合も、見きわめるまでは、ゆだんはならぬ。忍者が虚影を生かすことは常道であり、ほとんど、習性化している。

「ああ、はよう……」

おふりは、さらに身をもんだ。黒髪が狂おしく揺れ、ほの白い半裸のはだは、男の手を待って、しとどにぬれていくようであった。

この妖美な姿態は、欲情した男の理性を失わせるにやぶさかではない。彼女に思いを寄せていたとすればなおさらのはず。

にもかかわらず――

やみの声は、用心深かった。

〈いま、いま抱いてやる〉

「は、早く……」

〈うしろを〉

と、冷たく命じたではないか。

〈うしろをむけ〉

「そんな……」

〈うしろだ〉

手に乗らぬ。

おふりは、声に背をむけ、あさましい姿態と思いながら、草に手をついた。

裏の裏をかいて、こずえの声は、その位置にあったのだ。

おふりが四つんばいになると同時に、背後の草が動いた。

宙にむささびのような影を引いて、ひらりと草におりたった影は、そこで、じっと息を止めた。

双眸が爛と燃えた。青い炎のようであった。

一間と離れぬ眼前に、けもののように四つんばいとなった白いはだ。

かれらにとって、あこがれと、おそれと、信頼の存在だった女頭領が、いま、あさましい雌となって、かれを受け入れようとしている。

あまりにも美しく、あこがれるにたる肉体だっただけに、ふいに、打ちのめされたような、悲しみが、この男をとらえた。

女頭領と仰ぐには、やはり絶対の存在でなくてはならなかったのだ。かれの胸をゆらめかし、さいなんだ狂熱は、一転して、嗜虐の炎となって吹きあげたのである。

残忍なまでの欲情に、五体ががくがくと震えた。怒りは、愛と等しいほどの期待で局部を熱

するのか。影の股間は異様な衝撃で霧を払い、怒張した。白いやわはだには容易ならざる巨大さである。

ずいと背後に進みよりざまに、忍び刀が抜き放たれたのは、あくまでおのれを失わぬ忍びノ者。

女頭領の常々の教えが、こうした場合にも生かされていたのは、彼女にとって皮肉というしかない。

女体は、夜気をゆるがした氷のような刃の冷気をせつなに感じている。怒張した男根の熱気と、白刃の冷気と——

ふらち者がうつつになって女体に触れるせつなを——その一瞬がねらいだったのだ。

おふりは下くちびるをかんだ。最初のもくろみが裏をかかれた以上、あの屈辱に耐えねばならなかった。

彼女は目を閉じ、おのれをむなしくした。その全裸の姿は、ただ、たけった雄を待つ邪念のない雌そのものになって。

あるいは、その心の底に、被虐的な喜びを期待するものが、なかったとはいいきれまい。

〝敵〟はあまりにも彼女の心を読んで、意表をついてくる。そのかぎりでは、ワザ以前のワザに敗れたといえる。ワザの巧みさというより、彼女の心象を見ぬく目を持っていたのだ。

この敵の〝目〟をくらますには、おのれをむなしくする以外にない。いかなる鋭敏な感覚も

〝空〟をとらえることは難い。かれの鋭い感覚の矢が〝無〟と答えたとき、彼女は勝った。

かれは眼前の白い女体に、目くるめく思いをしながら、片ひざつき、幽奥をのぞきこんだ。

5

右手には白刃がある。左手は遊んでいる。相手の出ようしだいで、応変のワザを行なうためだ。交合には必ずしも両手を必要とせぬ。

ぎらぎらと燐光を燃やす眼が、ひたと白いはだの奥を見つめた。

淫火に焼かれるような、羞恥の痛みを、おふりは股間におぼえている。

男の目に股間の深奥をのぞかれるなど、これ以上の屈辱はない。あえてこの苦業に耐えたのは、男に完全に警戒を解かしめるためであった。

のぞいたのは、好奇心だけではなかったのである。

女体の欲情にもだえる姿が、わなかどうかをたしかめたのだ。

陰部の湿潤をそのあかしとした。月は幽奥までとどかぬ。常人の目には見えまい。が、夜をわがものとする忍びノ者には、至難ではない。

そこは、わずかだがぬめりとした微光を放っていた。

秘所の湿潤がこの場合何を意味しているか説くまでもあるまい。女体のもだえは、虚動ではなかった。

と、解したとき、男の欲情は吹きこぼれている。押えに押えた淫情は、おふりがこれを受け入れると思ったとたんに堰を切ったように漏らしたのである。

そのしぶきが、内腿をぬらしたが、しかしおふりの様子には、変化はなかった。その、いわゆる早漏の状態が、遇然か技巧か解しがたかったのである。そして、その射精によって、彼女への欲情がさめるであろうとは、考えられなかった。おふり自身、おのれの肉体の美しさを——男の身も心もうつつにせずにはおかないことを知っていた。うぬぼれではない。効果を的確に知ることは、乱波、細作に必須の条件なのである。

俄然、男は奮起した。おのれを恥じ、ふるいたった。もとより超人的な行動におのれをかける忍びノ者、一度の射精で、なえはせぬ。意地にも、仕遂げる。ぬれたままである。さすがに陰唇に触れたとき、おふりの口から、叫びがはしっている。

おのれをむなしく、一匹の雌と化したおふりの肉体は、おとこを入れるにやぶさかではなかった。かれは、その抵抗のなさに、むしろ、いささかの物足りなさをおぼえながら、低くうめき、下半身にすべてをこめた。

このとき、頭上を流れる雲が月をおおったのは、おふりにとって幸いであった。羞恥がいくぶん軽減されたのは否めない。が、それだけではない。

「お、おふりどの……！」

喜悦の叫びを、よだれにまみれさせて、男の軀幹が蠕動した。
そのとき、おふりは、はっきりとかれがだれであるかを認めている。
（鼠！）
佐和山に向かったはずの男。彼女の輩下になって二年と少し。草カマリをよくし、飲まず食わずで、梁上に潜むこと二旬、城主の口中に毒液をたらしこんで殺したことがある。慎重で、狡猾。主従でもゆだんのならぬ男であった。
（そう、この男だったのか……）
おふりに見抜かれたことは、もはや、鼠は気がつかない。左手の遊び、右手の忍び刀は依然として機に応じるであろうが、肉体は恍惚にふるえ、弛緩の寸前にある。
おふりは、肉体をまかせながら、くノ一秘奥《軍駒》を行ないはじめていた。
軍駒とは、戦場において率爾なきためにする去勢された雄の馬をいう。その方法は、生後三カ月のころより、雄馬の陰茎を、馬の生皮ひもで縛り、徐々に陰茎をたわめ、完全に去勢するのだが、ふぐり抜きは、角をためて牛を殺すにも似た失敗があるとして、もっぱら陰茎をしぼめた。いうまでもなく、壮強駿馬を得るも種馬にならないことを覚悟してのことで、したがって、『一代駒』ともいう。乱世のならいで、春夏秋冬いかなるときにいくさがあるかわからないし、戦場で発情されて、鞍からふり落とされたり、敵の馬の雌を追いかけたりすることを恐れての去勢法であった。

生の馬皮は、乾燥するにしたがい、締まってくる、この徐々に締まることによって、本体に損傷なく、陰茎を使用不能にする。いささか速力は鈍るが、これを行なった雄馬は、軀幹雄大になるといわれ、したがって、馬上の壮軀を偉大に見せるために、武将の多くはこれをほどこしたという。
さて、いま、おふりがあさましいけものめいた姿態で、鼠の裸根を受け入れながら、恍惚に誘い、陰唇の自在なる緊縮によって、この《軍駒》を行なっていくのは、他のいかなる方法をもってしても、鼠の右手の刃を免れるをえないからであった。
鼠を殺すことはできる。が、素手ではしょせん白刃を免れることはできない。おのれが傷つかずに、鼠を屠るには、この方法しかすでに残されてはいなかった……。
おふりの考えがそこにあろうとは、鼠は気がつかぬ。漸増する快感が、思考力を失わせ、朦朧として陶酔に身を浸していた。
これまでに何人、女体を知ったかわからぬ。が、これほどの陶酔ははじめてだ。さよう、はじめて、そして、終わりがそこに迫っていた。
巧緻としかいいようのない膣の緩急。鼠は忍びノ者のささえすら失ったように、
「お、おふりどの、わしは、もう……あ、ああ……ごくらく、じゃ……」
きれぎれに、痴愚をはしらせて、がくがく腰をふるわせていたと思うと、一声、ぎえっ!!
と、悲鳴をあげ、へたへたとその場にくずれ折れた。

すっと、おふりは身を起こした。

裸身にすばやく、はだじゅばんをまとい、腰のものをつけた。それから、はじめて、鼠を一瞥したのは、見るまでもなく結果はわかっていたからであろう。

おふりは酒の皮袋をとりおろすと、さっと草むらを飛んで林を出た。左近のところに引きかえすのである。

月がふたたび顔をだし、まだらの光を草むらに投げてきたなかに、鼠と呼ばれる忍者の死体が、奇妙なかっこうで倒れていた。

おふりのうしろで歓を尽くしたままの、両足をひろげ、ひざを曲げ、右手に忍び刀を抜き放ったまま——そのままのかたちで、蛙股のぶざまな姿であおむきに、息絶えていたのである。

ぶざまなのは、その股間が赤黒い汚物にべっとりといろどられていたこと。あの雄偉を誇った逸物は、見るかげもなく、腐れなすのようにひしゃげ、汚血にまみれていたのである。

伊賀くノ一忍法は、女陰の括約筋をもって馬の生皮の締むる力以上のすさまじい力を加えたのであろうか。天上に遊ぶ快楽の極地から、一転して奈落へおちた驚きは、判然とのみこめぬまま心ノ臓は動きを止めたのであろう。鼠の目は、ただ驚愕に瞠目しているだけであった。

裏切りの輩下を始末して、左近のもとへ駆けもどるおふりの腰つきは、楚々とたおやかに、異常なワザを秘めているとも見えぬ——

忍秘黄金虫

1

方角もわからぬ山中にあって、やみににじむあかりがいかに暖かく感じるものか。敗残の武将小西摂津守行長が、松明の灯を見て、ほっとしたのは事実である。

が、その喜びの下から、

（落ち武者狩りでは？）

不安が表情をこわばらせた。

常々、武門の支配下にあって耕作のほとんどを奪われている農民らは、武士に対してかぎりない憎しみをいだいている。

地表の弱い個所に噴火する火山脈のように、憎悪怨恨の火は、数百年にわたって、地下にくすぶっている。ひとたび、弱体化をさらせば、仮借なく爆発するのである。武士が弱くなった

とき——それは、いくさに敗れたときしかない。
敗残哀亡の身に、農民の襲撃は、餓狼の牙にもまさる。
松明の灯はひとつではない。
五つ、六つ……。
（見つかってはならぬ……）
落ち武者狩りならいわずもがな、たとえそうでない場合でも、危険はまぬがれない。非情の世に、身を挺して助けてくれる者がいるはずがない。さっきの忍者たちのように。救いの手を差しのべてくれたと思ったら、身ノ代をゆする目的があったのだ。
キリシタン信者でありながら、天主の力も信じていなければ、人間の善意も信じない行長であった。
かれは、どろをかくように匍匐して、疎林のなかへ逃げこんだ。
ほどなく、がやがやと騒ぎ声と、足音が近づいてきた。
恐怖で顔をあげていられない。草むらに身を伏せ、口のなかでは癖になっているサンタマリヤを唱えつづけていた。
まつやにのにおいを強くふりまきながら、松明が二間の前を通っていった。捜索であれ、葬式であれ、こんな夜道では声高になるものとみえる。
「たしかにこっちかや」

「喜平が見たというぞ、この道じゃ」
「破れ寺には、ほんまにいなかったのけ、あのくそ坊主め、縁の下にでも隠れているのでは」
「うんにゃ、すっかり見たぞ」
「あれだけのところじゃ、隠れるも何もないわな」
「墓穴くらいけ」
げらげら笑いが流れて、遠ざかっていった。
（坊主とかいうたな……）
どうやら自分のことではないらしい。
法体の武将は多い。安国寺恵瓊ははじめから坊主だが、武将で頭を丸めるのは、一種の流行みたいなものだ。上杉謙信、武田信玄がことに著名だが、髪を残して——俗体のまま死んだ武将のほうが少ないくらいである。
島津兵庫頭も維新入道と自称しているくらいだし、大谷刑部も（これは病気のせいでもあるが）蒲生郷舎、明石全登、三成の老将土田桃雲など、坊主頭をさがせば枚挙にいとまはない。
もっとも、落ちのびるに際し、剃髪して坊主に変じて、東軍の目をくらますという手もある。とにかく、自分を捜しているのではないと思うと、ほっとした。
だが、姿を見れば、どんな気を起こすかしれぬ。雑兵なら惨殺されるが、行長を捕えたと

いえば黄金百枚や二百枚の恩賞金にはありつけるのだ。

ひとたび二十万石の大名の地位を得た行長にしてみれば、どちらにせよ、身分を隠して潜行するという器用なまねはできない。

行長は疎林のなかを下ることにした。のどがからからだった。瀬の音をたよりに、草におおわれた坂を下っていくこと半町。

わずかの距離なのに、行長は四半刻——およそ三十分近くを要している。

渓流が近づき、小屋のようなものが見えた。

きこりの出張り小屋であろうか、それもずいぶんまえから使用していないらしく、杉皮ぶきの屋根はひしゃげたように半ば落ち、柱の枝木が朽ち折れ、狐狸のすみ家かと思われる。くすの枝がななめに大きく屋根びさしとなって月光をさえぎっていたし、灌木が深く、人目につかぬ。

行長が、草むらをはい進んだので見えたともいえる。

人目につかないところで、ぐっすりと眠れば、体力も回復しよう。片足のけがも、つえでも作れば歩けるようになるかもしれぬ。

行長は小屋のなかへはいこんだ。

まっくらだ。床とてはない。枯れ草が手に触れた。

ひしゃげた屋根でも、ないよりましなのか、かわいた枯れ草が、いまの行長には、何よりの

寝床だった。錦褥にまさる安らかさがそこにあった。

「サンタマリヤ……」

どさりと重く、かれは身を横たえた。

足の傷も、全身の数カ所のかすり傷、切り傷の痛みにも増して、のどのかわきと、疲れと、そして、眠りの欲求が強かった。

敷き草は枯れ、かわいていたが、けっしてこころよい空気ではなかった。せまいし、半ばはぬれびしょで、饐えたような臭気がこもっている。

その正常な状態では、当然、感じるべき酒気を、行長が知ったのは、そのまま奈落へ引きこまれるようなふかい眠りからさめたときである。

どれくらい眠ったのか。

真昼間だった。

小屋のなかはうす暗かったが、外の光が縞となって破れめからさしていた。

「……？」

しぶい目をしばたいて、行長は身を起こした。

ひっつれるような痛みが片足に走った。

「うっ！」

思わず漏らしかけた声をのんだのは、どこかで嬌声が聞こえたからである。

ふかい眠りがさめたのも、そのせいかもしれない。

行長はいざって、荒壁の破れから、外をのぞいた。まぶしい日が熾烈なまでにさした山峡である。渓流が、涼しげなしぶきをあげて、岩にたわむれ、とうとうと流れていた。

ぬれた岩の上に白いものが見えたと思ったら、これは人間だった。

女体である。一糸まとわぬ。黒髪がぬれてぺったりと、肩から腕、背にしがみついていた。

「ほほほほ、ほほほほ」

女は、岩上に寝そべり、両足をばたばたさせながら笑っている。

戦塵をまとい、地獄図のなかから脱けてきた行長には、異様といえるほどに、平和な桃源境。

(夢か、夢ではないか……?)

夢ではない。傷の痛みも現実だったし、きたないこの小屋も。

そして、意識がはっきりしてくるにしたがい、昨夜のことがよみがえってきた。

足首にはきたない布ではあるが包帯がしてあったし、その他の大小の傷も、どろや血を洗いおとしてあった。そこには、血のにおいに変わり、酒がにおった。

2

女の嬌声が一段と高くなったと思うと、しぶきのなかから、丸いものがでた。

とうがんではない。これはそりこぼちた頭だった。頭頂に日が反射した。岩にあがってくると、べろりと顔のしずくをなでおろした。

あごの張ったいかつい顔がにたにたと笑いくずれた。

(坊主!)

行長はとっさに昨夜の松明の一群れを思いだしている。

このがんじょうづくりの坊主は、女と同じく下帯もつけない素っ裸だった。

陰暦九月半ば。秋はたけている。朝夕は寒いほどだが、真昼のせいか、暑い。きのうの雨がすっかりあがって、温気はまるで残暑だった。

「お万」

と、坊主は呼び、女の背に手を置いた。

「なんと、生き弁天の美しさじゃて、のう、のう、この膚のなめらかさ、この肉置きの柔らかさ……」

「ふふふふ、くすぐったい」

お万は身をくねらす。

ぬれたはだが光る。ぬめぬめとしたはだは、まるでさばやまぐろの新鮮さを思わせ、どうかすると人魚のように見える。

「弁天さまでのうて、天女かのう。いわなどもが驚いとるわな」

「またあんなことを、ふふふふ」
「どっちゃにしても、ホトケを迷わせるはだぞな、この林蔵主が迷うのも無理なかろ」
「ふふふふ、ふふふふ」
「この乳、このしり……男なら迷うのがあたりまえじゃ」
「あれっ、ひどい」
「痛かったかの。おお、よしよし」
女をあおむかせると、骨張った足がひざを割ってからむ。
「あれえ、お天道さまが……」
「まぶしいけ、目エつむったらよいがの」
「恥ずかしいよう」
「なんじゃあ、本堂で抱きついてきよったときもお天道さまが……」
坊主の声はとぎれた。女の口がふさいだのである。
ことばを奪ったお返しかどうか白い下肢が、赤銅の腰をとらえ、岩はだにすべったかのような、激しい動きを見せた。
天日をはばからぬ、ふらちのふるまいというより、道徳の存在も知らぬ野性の雌雄の交合だった。
ゆたかでぬけるような白い膚と、赤黒い膚とのからみあいは、汗としぶきで、ぬらぬらとす

るのもいとわぬ、すさまじいものだった。
人目がないと安心しているのか。
この小屋に行長がいるのを知らないのか。
（まさか、この手当は……）
男女のどちらかが、してくれたにちがいないのだ。
傷の深さから、まだ昏睡しているとたかをくくっているのか。
白昼。渓流にのぞむ岩上の痴戯は、あまりにあらわで、行長にはまぶしすぎた。キリシタンの戒律のゆえではない。強烈なその刺激に耐えるには、疲労が深く、痛みも激しかったのである。
泣き、わめき、喜悦にむせんで、女体は狂いもだえた。転輾する裸身は、岩上からすべりおちんばかりであった。
その延々と果てしない、愛欲のさまをのぞき見る行長の目は血走り、だらりとあけたくちびるからわれ知らずよだれがしたたっている。
林蔵主の顔が、ふいにこちらをむいた。
恍惚に弛緩し、絞るような声を漏らして。
はっと行長は目をそらした。が、まにあわなかったようだ。
舌がもつれるような声で、林蔵主はこういったのである。

「見なさったか、見なさったか、これが極楽じゃあ、けっけけ……」

もとより、返事すべくもない。行長はどっと枯れ草に身を横たえた。こうしたことは、洒脱にはいかぬ。神経はほそい。他人の秘事を盗み見たやましさが——キリシタンの戒律が、突然、胸をしめつけてきた。

坊主の声は、しかし、とがめるひびきはない。

「けけけっ、恥ずかしいことはありませぬて、どうせ、婆娑は男に女、女に男じゃア」

くくくっと、お万も歓喜を漏らして、おおらかに楽しんでいるようであった。

行長は小屋の中を、きょときょとと見まわした。

何やらきたない包みがある。大きなひょうたんがあるし、飯椀がころがっている。酒のにおいを、あらためて行長は感じた。

(あきれた破戒坊主だ……)

この様子から察すると、坊主は、あの女を連れて駆け落ちしたのであろう。ゆうべの松明の捜索は、この坊主を追っていたものにちがいない。

年配は五十がらみ。たくましい骨格と性根は武士にしてもひとかどの者になるであろうに、女をそそのかしてしゃアしゃアとして酒をくらい、白日の下に現世の快楽をむさぼっている。

敗残の身だからではなく、行長は、この坊主を非難できぬような気がしてきた。

自分が信条としてきた武将の地位の、一夜にして転落するさまからみれば、この坊主の生き方こそ、人間の本道ではないかという気もする。

是非は別としても、そう思うだけ、気が弱くなっていたのは事実である。

時を得、ひたすらにおのれを押し進めていくとき、逡巡や迷いがわく余地はない。現在に悩み、未来に望みを失ったとき、過去に懐疑するのが凡人の常である。キリシタンの信仰が行長のささえになっていないことは疑いをいれぬ。

からみあった笑い声が近づいた。行長があわてて目を閉じるまえに、ぬっと、水をしたたらせた裸身がはいってきた。

「けけけっ、たぬき寝入りをしてござる」

3

破戒坊主はぬれたからだをぬぐおうともせず、下半身をおおうことすらせず、大ひょうたんに手をのばした。

栓をむしりとって、口にあてた。

「なんじゃ、からか」

と、投げだして、

「ひょいと酒買いに、というわけにもまいらぬわな、お万」

「ほほほほ、ほほほほ、和尚さまは酒とあたしとどっちが好きかいの」
お万も裸身をくねらして、恥ずかしげもない。
「バカアぬかせやい、酒と女がいっしょにできるかい。酒ア酒、女ア女……のう、お武家」
ふいに話がこちらに来たので、行長はとまどった。
一言のあいさつもすまぬうちである。
「うむ……わしにはよくわからぬが」
「いくさに負けると、ぼけるかい」
どこまでも傍若無人な坊主だ。
が、落ち武者と知って手当もしてくれるのなら、いっそ気が軽い。若い女をかどわかして追われている身だからであろうか。
行長は淡く笑った。その笑いが、たくましい坊主に媚びるようなものだと知って、くちびるをひきしめたが、いびつにゆがんだものになった。
「――痛むかの」
坊主は、どう解釈したか、行長の足を見た。
足くびからかかとにかけて、ぐるぐる巻きにした黒い布に、血がべっとりとにじみだしている。
「いや、さほどには……」

行長はそのとき、はじめて気がついている。傷をしばった包帯は黒い。僧衣のそででもひきちぎったらしい。
日ごろの傲岸尊大さは消え、もろくなっている神経が、うすく涙さえにじませた。
「見ず知らずの者に、この手厚い介抱を賜わって、感謝いたす。あらためて、礼を申したい」
「な、なあに……坊主が人助けは、あたりまえのことじゃ。のう、お万」
「あいな」
「わしゃ、男でも女でも助けるでの」
「……」
「このお万も、先ごろ亭主どのに死なれて、閨さびしいと泣いておるゆえ、慰さめてくれたのだわさ、仏法慈悲とはかようなしだいでの、いっひひひ」
笑うと、乱杭歯がむきだしになった。血のしたたるような歯ぐきをしている。
「ともあれ、命の恩人じゃ。国へもどった暁は応分の礼を尽くすであろう。おお、そうじゃ、名のるのを忘れていた。わしは摂津守小西行長じゃ」
へえっ、と頭から突きぬけるような声をはしらせて、坊主はとびさり、おおぎょうに平伏した。
裸のままである。
「これはこれは、知らぬこととは申せ、ご無礼つかまつりましたわい、おん大将でござりました

か。朝鮮大明国まで、武名をとどろかせたおん大将とも知らず、ご無礼の数々、お許しくださりませい」

大きなからだを、穴があればはいりたいほどに、小さくして、額を草にこすりつけてわびるのだ。

「申しおくれましたが、てまえは相川村にて青松院と申す破れ寺の住職、林蔵主にござりまする」

鞠躬如としてわびているそばで、お万のほうは、へらへら笑いながら、おのれの乳ぶさをもんだり、陰毛をいじったりしている。白痴のようでもあった。

「ご様子のほどから察して、そこらの雑兵どもとは思いませなんだが、摂津守さまとは」

「申すな申すな、いくさに敗れし身は、大名も千石取りもないわ。いまはただ、人の情けがうれしゅう身にしみるだけよ。おお、そうじゃ、礼のしるしに……」

行長は懐中をまさぐった。皮きんちゃくの中には丁銀が二つ三つあるきりだった。はだつきの小判などは昨夜の忍者にとられている。

「――はて、落としたか」

「何をお捜しでござりまする。あ、これでござりましょう」

林蔵主は、きたない包みのなかから、さらにきたない布に包んだものをとりだして、ひらいた。

なんと、あのお厨子である。

「む……」

金無垢の阿弥陀様もちゃんとはいっている。

「いっひひひ、なんとも、その、この阿媽めが介抱賃にもらっておこうなどと申すものでつい、ちょうだいしたのでござりまする。摂津守さまとあれば、お返し……」

「いや、よい。当座の礼に与えようと思ったのじゃ、おさめておくがよい」

「いえいえ、とんでもないことで。てまえの寺は禅宗なれば……おお、そういえば、摂津守さまには、キリシタンとか漏れ聞きましたるが」

「されば、このお厨子も石田治部少輔に譲りしもの、さらに、島左近が奉じて守り本尊としていたのじゃが」

「そうした由緒あるものなれば、なおさらでござります。おん大将がたは、たいがい落ちなされたとやら、後日、お手渡しなさるがよろしゅうございましょう。もし万一、討ち死にと知れば、形身ともなりまするし」

熱心に林蔵主は説いた。いかつい顔や姿にもかかわらず、能弁である。破れ寺の破戒僧、みずから白状したように、死骸の鎧はぎにも似た盗みもするえたいのしれない男ではあるが、この金めのものを、懸命に押しもどそうとする様子は、かれを安心させた。

これだけのことで、林蔵主を信用したのは、やはり、甘い。成り上がり者にはちがいないが、

真の貧窮困苦を知らぬ行長には、野ら犬やはえのような人間の心の奥底が見きわめられないのも無理はない。

この林蔵主の訴えで、捕われの身となろうとは、そのどたんばまで気がつかなかったのである。

足の傷がうんで歩行も困難だった行長に、

「てまえが薬を買うてまいりますわい」

お万にはくれぐれも介抱つかまつれと、念を押して、くずれ小屋を出ていったのが、その夜半。

夜やみがうすれて乳いろの霧の流れこむ払暁、どっとわめいて、白刃をひらめかせた雑兵の一団が小屋を襲ってきたのである。

行長は、まだ半ば眠りのなかにあった。足音と喚声を聞くや、

(追っ手だ)

直感して、わき差しを抜き放った。それがかろうじて、摂津守のふるまいといえたようである。先頭の男の槍を、戛然と光忠の名刀が払いのけただけで、どどっとなだれこんだ雑兵らに押しつぶされて、うめき声をあげた。

高手小手に縛りあげられてから、ぎらりと目をむき、

「いずれの手の者じゃ」

と、いった。

「竹中丹後守でござる」

「重門か。武略で聞こえた半兵衛重治のせがれどのじゃな、さすがだ」

それから、お万をふりかえって、

「キリシタンはあきらめが悪い。恩は恩、恨みは恨みじゃ……忘れまい」

4

「恩は恩、恨みは恨みじゃと？」

林蔵主は、猪首をかしげ、それから、げらげらと笑い出した。

「あいつ、気がつきよった。いひひっ、わしが訴人したのをな。あほうめ、いっそ気がつくなら、薬買いに行くまえにすりゃよいものを、けけけっ」

「たんと恨まれますえ、ぞっとしたよ。あたしをにらみつけたもの」

「なんちゅうことはない。ひとにらみで黄金百枚、けけけっ、これを見い、このやまぶき色の光をよう、もっとお日さまが上がると、光るぞう、ミホトケの後光のように光るぞう」

ざらざらっと小判をひざ前にひろげて、両手ですくってはおとし、すくってはおとし。その光と、感触と重みを、楽しんでいる林蔵主だ。

「これ、何枚」
「百枚じゃ、黄金百枚なぞ、千石とりのお武家でも持ったことはないわい。七堂伽藍の大寺の住職でも見たことはあるまいて、のう、お万、けけけけっ」
「和尚さま、はじめから訴人するつもりだったのかえ」
「あたりまえじゃあ、落ち武者じゃア」
「そんなら、あのお厨子ももらっとけばよいものを、いえさ、傷の手当など、せいでもよかったものさ」
「あほうめ。ああしてやれば、安心するわな、お厨子の金無垢は小判にすりゃ、五枚や六枚になったかもしれんが、百枚のほうがなんぼよいか」
「国に帰りゃ、お礼するといっていたよ」
「へっ、帰れるものか。この伊吹山から一歩でも出たらおしまいだア。万に一つ、帰れたとしてもよ、そんときになって気が変わるわい。お釈迦さまも、そういうてござる。人間ちゅのはうそつきだとの。けけけっ、あすの千両より、きょうの百両だわの、けけけっ……」
そんな林蔵主をまじまじと見つめて、
「和尚さまは、お偉いのう」
「けけけっ、いま知ったかい。これだけ黄金がありゃ……」
「浴びるほどお酒が飲めるよ」

「あほう。京へ行って、大きな寺を買うのじゃ。禅宗でも、浄土でも、なんでもよいわい。キリシタンのほかならの。僧階でもなんでも、黄金しだいで買えるわ。なんとよい世の中かいの。太閤さまじゃとて、何千両か、何万貫かで関白の位を買いなされたのじゃ」
「ひえエ、そうすりゃ和尚さまも、関白さまになれるかね」
「いひひ、わしの望みは大僧正じゃ。そのときは、お万を、梵妻にしてやるぞな。けけけ」
「ほほほほ、大黒さまより弁天さまになりたいよう、ほほほほ」
ふたりは抱きあうと、そのまま、干し草の床に倒れた。ずぶとい神経は、官能のはしるままに、歓楽をむさぼってやまない。
二匹のけものとなって、喜悦のうめきをはしらせ、のたうちまわる、ふたりのそばに、散乱した黄金を、壁漏る旭光が燦然と光らした。
その光をちらちら見るほどに、林蔵主は興奮し、疲れることを知らない、雌そのものの肉体を愛撫してやまないのだった。
飽くなき情欲も、しかし、五十の坂を越したからだには、やはりこたえるのか、何度めかの陶酔に身を浸す林蔵主の目のなかから、その小判の光が、すーっと消えていくような気がした。
日がかげったわけではない。目がくらんだ。精気が衰えて、視力が鈍った。何やらもやが流れこんだようでもあった。
お万は、くちびるを半びらきにし、よだれを白くあわ吹いて、歯をかちかち鳴らせている。

死人のようなうつろな目だった。そのくせ、手も足もしっかと、林蔵主にしがみついている。

歓喜の絶頂になると、この女は、一時的に気が狂うのかもしれなかった。何をいってもこたえず、何をしても気がつかない。

林蔵主は、しかし、もう一度小判をはっきり見たいと思った。

目をみはった。

百枚の小判——せまい小屋の中に、山盛りとなっていた小判が、ぬぐったように消えていた。

「わあっ、こりゃなんと……」

夢ではないか。小判の山が、かき消されたように……いや、夢ではない。ぴかりと光った。たった一枚。

酔いもさめて、女の手足の枷からぬけ出ようとした林蔵主の目は、小屋のすみに、黒い影を見つけている。

視界を閉じたもやがたゆたい、凝縮してその影になったかのようであった。

「……!?」

ぎくりとしたかれの耳に、

〈小判はもらった……〉

巨杉のこずえを走る風のような、異様な声が内耳を刺した。

〈九十九枚……一枚は残しておこう〉

「……」

〈破戒坊主の弔いのためにな……〉

うすく毛のはえた坊主頭が、ころりとおちた。執念の首は、ころころと二転して小判に近づくや、がっきとかんだ。首になっても放さぬというように。

おびただしい噴血も、白痴状態の女にはどう感じられるのか、ぺちゃぺちゃと血をなめながら、首のない胴体をしっかと抱きしめて、お万は陶酔に浸っていた。あるいは、林蔵主の並みはずれた情欲は、首を失ったあとでも、なお、陰茎のしぼむのを知らないのかもしれなかった。

5

囲みを脱した島津兵庫頭義弘が、多羅尾の山中より五僧鬼灯の険を越え、甲賀から伊賀へぬけ、上野の城下を通過するに際し、

「島津兵庫頭、ただいままかり通る。はばまんとなればお相手すべし」

と、家臣窪地盛孝をもって口上させ、主従五十余人、抜き身をぎらつかせて通過したが、筒井伊賀守のるす居の城兵は、数百もありながら、城門を閉ざして一発の矢玉も放つことなく、看過したことは、史上有名な話である。

たまたま、小西行長がとらわれの身となったのと同じ時刻のころだけに、後世、武将の二つ

の型を論じられることになったのだが、哀れは、行長ばかりではない。むしろ、島津兵庫頭のほうが、ずばぬけた武辺だったということだ。

この日、佐和山の城も落ちている。逃亡の三成が城に着くことができないうちに、裏切り誠忠の、小早川秀秋、脇坂安治、朽木元綱、小川祐忠らを主勢とする裏切り軍が押し寄せ、井伊直政の監軍の目の前で、必死になって、攻めおとしたのである。

佐和山城には、三成の父晴成、兄重成、子重家、重成の子朝成、岳父宇田貞親などがいたが、数万の大軍を受ける城士、二千八百。関ガ原の敗報を知ってもよく耐えた。攻防数刻。その落城は内通の火ノ手によって士気が乱れ、総攻撃をくって落城した。

石田治部少輔三成が捕われたのは、九月二十一日のことである。みずから旧知の田中兵部大輔吉政の陣所に自首を申し出たのは、逃亡六日、疲労深く、そのうえ痢病に苦しんでのことと伝えられた。

義弘とともに宇喜多秀家もおちのびることができたのは、家臣が多かったせいだが、腹心にも見放された安国寺恵瓊は哀れをとどめた。

関ガ原を脱し、近江路を走って比叡にのがれられたのは、坊主頭の功徳かもしれぬ。かれが、方向を転じて大阪に至り毛利輝元の傘下に隠れたら、あるいは生き延びることができたかもしれないし、少なくとも、家来に見放されるという悲惨な結果にはならなかったにちがいない。百二十万石の輝元と毛利一族の勢力は、島津とともに、家康にとっては扱いづらい存在だったからである。輝元も秀元、吉川広家の働きがあったからではあるが、命を免れただけではなく、三十六万九千石に減封処分でことが済んでいる。

秀元と恵瓊はほとんど戦わなかったという点に変わりはない。名目にせよ、輝元は大将であったのだから、当時の不文律では、首謀者にはちがいない恵瓊よりも、罪は重いはずであった。すべては敗者の処分も、力関係が左右する典型であろう。

恵瓊は逃げた。

比叡では安心ならなかった。八瀬へ走り、さらに鞍馬へはいった。月照院をたよったのである。

敗残の主人が、家康の厳命で窮地に陥ったことを知ると、薄情な家来たちは、ひとり去りふたりさり、逃亡行のなかから故意に脱落していった。月照院に着いた翌日は、残りの家来たちも、示しあわせて、恵瓊のいのちのささえである金銀を奪って逃げた。再起の望みのないことを見きわめると、それ以上死出の供をする義理はないというのであろう。

そうしたことが、ますます、恵瓊の不安を高めた。かれらが密訴するのは疑う余地はない。かれはまた逃げだした。名もない東山の寺にひそんだが、小寺ほど目だつから、本願寺にはいることにした。

勢力のあるとき、京の寺々には、寄進したり、めんどうみてやったりしていたから、流亡の身をかくまうくらいはしてくれる。かれが捕われたのは東寺という。捕われるまで、みずから

死ぬことのできなかった恵瓊を、俗人以上の俗物と、京すずめは笑いさげすんだ。

これらのことを、島左近は、伊賀伊勢境の蝙蝠峠で聞いた。女忍おふりとその一党の山砦であった。

死ぬべき身を助けられた左近は、武辺いちずに生きてきたおのれの過去に疑いの目をいだくようになっている。不肖の主君を持った愚昧さを自嘲するとともに、かれの知らなかった新しい世界が、ひらけていくような毎日であった。おふりの情熱が、開眼させてくれたともいえる。武士を誇り、夜のやみからやみを影のように生きる忍者の生活を侮蔑ではなしにながめられるようになったことだ。少なくとも、そこには、思い上がりや、虚飾がなかった。おのれの力を、信じ、認め、為政者によって作られた不条理な世の中の桎梏を切り捨てて、自由に生きている。

「――どうして、おれを助けたのだ」

左近はそう聞くことがあった。

「好きだから」

おふりは、答える。

好き、というだけで、なかまのおきてを曲げても尽くそうとする女忍の気持ちは、かれにとってあまりにも新鮮であった。

「武士の世にあいそも尽きたが、さりとて忍びにはなれぬ。この年齢ではのう、いっそ百姓になるか」

「お好きなように。あたしは、あなたさまのおそばにおればしあわせ」

小西行長からとった身のしろ金の証文のことも忘れたように、おふりは、左近の傷の手当をするのだった。夫に仕える妻のしあわせそうな顔を、秋の日が静かに照らしていた。

まだ十日ほどしかたっていないのに、あの豪雨と、やみと、血と、矢玉の修羅場は、遠い昔のようにしか思えない静かな山である。蝙蝠峠の尾花を吹く風に、秋はたけていった。

解説

清原康正

本書『忍法雪月花』は、早乙女貢の連作忍法小説シリーズの第六巻にあたる。第一巻の『忍法秘巻』に始まり、『忍法無情』『忍法系図』『忍法女笛』『忍法関ヶ原』に続くこの第六巻では、第五巻『忍法関ヶ原』の終章「啾々関ヶ原」で概括的に記されていた関ヶ原の合戦を、より詳細に描き出している。『大日本戦史』『薩摩落穂集』『東照宮御実紀』『慶長年中卜斎記』『関原御合戦進退秘訣』『関原合戦記』『関原合戦始末記』などの史料を駆使して、慶長五年（一六〇〇）九月十五日に行われたこの天下分け目の戦いの推移が克明にたどられていくとともに、石田三成方（西軍）と徳川家康方（東軍）のそれぞれの陣営に加わった武将たちの心情や思惑にからむ動向が浮き彫りにされていく。

だが、それだけでは本シリーズの特異性が出てこない。この東西両軍の激突を背景として、その間に出没する忍者たちの陰の動きをからませることで、関ヶ原の合戦を戦史とは異なる視点でとらえ出していくのである。作者は本書の第二章「飛ぶ影」の中で、「関ヶ原の戦いほど、内応、叛応が多かった大戦は、そのまえも、そのあともない」と指摘している。こうした「内

応、叛応」の陰に、忍者たちの存在があったわけだ。

その「飛ぶ影」章に、関ヶ原の位置と地形が説明されている。「美濃ノ国の西端、北方に伊吹山系がすそをひろげ、南方には伊勢、伊賀、甲賀をくぎる鈴鹿山脈がその北端をおとした矩形の盆地」「およそ東西一里、南北半里」という狭隘の地である。この関ヶ原は、六七二年の壬申の乱では、藤古川をはさんで大海人皇子と大友皇子の軍が相対し、古代史最大の内乱が繰り広げられた古戦場でもある。

その地で、五大老筆頭の徳川家康と五奉行の一人石田三成とのポスト秀吉の座をめぐる争いが行われた。笹尾山に陣を布いた三成を中心とする西軍と桃配山に陣取った家康率いる東軍と、豊臣恩顧の大名たちが東西に分かれての合戦となった。九月十五日（陽暦では十月二十一日）早朝、戦闘の火蓋が切って落とされた。

西軍は笹尾山から桃配山の背後の雨宮山にかけて鶴翼の陣を布いて、東軍を半円形に取り囲んでいた。作者は『大日本戦史』をもとに、両軍の布陣のさまを記しているのだが、西軍十万八千、東軍七万五千の布陣に至るまでの動きもとらえられている。

明治十九年（一八八六）に陸軍大学校の教官として関ヶ原を学生たちと共に訪れたドイツの参謀将校クレメンス・メッケルは、両軍のこの陣形配置を示されて、即座に西軍の勝利を断言した、という逸話が残されている。軍事の専門家が見ても、西軍有利の布陣であった。

だが、政治外交にたけた家康は、西軍の武将たちの三成への反感を利用して内応の手筈をつ

けていた。そのために、戦闘が始まっても陣から動かない部隊もあり、逆に東軍が西軍を包囲する形となっていたのだった。つまり、西軍有利の判断は、あくまでも布陣上のことであり、家康の老かいな外交策によって、三成は戦う前からすでに敗けていたのである。作者が「関ヶ原の戦いほど、内応、叛応が多かった大戦は、そのまえも、そのあともない」と指摘するゆえんである。

それでも午前中の戦況は西軍がやや優勢の形で展開していったが、松尾山に布陣した小早川秀秋が徳川方に内応したことから、戦況は一転する。昼過ぎには大勢が決まり、午後四時前には西軍の敗北が決定的なものとなり、戦闘は終結を迎えた。この小早川秀秋の内応に関して、本書では〝誘い鉄砲〟で秀秋の逡巡心を打ちくだいた家康の戦略を描くことで、両者の極限状況下での心理がとらえられていく。

物語は、こうした天下分け目の戦いの推移にそって展開していくのだが、物語の幕開けは九月十四日の夜に設定されている。場所は関ヶ原の山間部の渓流にのぞむ大岩。大蟇石と呼ばれる巨岩の上に、黒装束の十五人が寄り集まってくるところから始まる。その黒い異形の群れは、女頭領が率いる忍者たちである。三成の謀将で笹尾山南麓に布陣する島左近のもとにある西軍の軍資金を奪い取る目的で集まった、伊賀四十九流いずれにも属さない忍びノ者たちであった。

彼らが三成の本陣に侵入し、左近の陣営から軍資金を盗み出す経過と共に、左近の人となりが描き出されていく。「三成のために生き、武辺としての理想に没入してきた」左近を、作者

は「生来、ぶ器用なまでに武辺者」ととらえている。

その左近の陣営に忍び入った頭領のくノ一は、乱波を生業とする甲賀の一団の頭領で三成方に属していた信楽闇夜斎にとらえられ、髪を宙づりにされてしまう。第五巻でも活躍した闇夜斎は、三成に小早川の裏切りを告げるが、三成はその言を信用しない。この三成の狭量が戦いの帰趨を決定してしまうのである。闇夜斎は盗み乱波の女首領を左近に差し出して姿を消す。左近は女忍を抱き、女忍にいとしさを感じる。「女色に耽溺できぬ気性」の左近と女忍との関係がここで生じ、物語の後半部への布石となっていく。ここらあたりの展開には巧妙なものがあり、作者のストーリーテラーとしての才をうかがわせるものがある。

こうした女忍の存在を描いたあとで、物語はいよいよ、天下分け目の合戦の経過を映し出していくこととなる。西軍と東軍の各武将たちの動き、とりわけ戦局が転換して以降の西軍の武将たちの心理と動向のさまが描き出されていくのである。「関ヶ原の戦いでもっともよく西軍のために戦った与力大名は、大谷吉継と平塚為広」として、この両者の奮戦ぶりがたどられ、毛利輝元、安国寺恵瓊、長曾我部盛親などの動きや小西行長の敗走のさま、島津義弘の敵中突破の模様などがとらえられていく。

左近も死を覚悟して家康の本陣に突入し、下半身に刃先を受けて馬から転落して気を失ってしまう。その左近を救け出して、伊吹の裏谷にある粕川峡谷の洞窟に馬で運び込んだのが、先ほどの女忍（女頭領）であった。女頭領は先に捕えていた小西行長を白銀十枚の約束で釈放してやる。左近の傷の介抱にあたった女頭領は、左近に「おふり」と名乗る。第四巻『忍法女笛』以来、姿を消していた女忍で、本シリーズの主要人物である。

文禄三年（一五九四）に京都の三条河原で釜ゆでの刑となった大怪盗石川五右衛門は伊賀忍者の石川文吾で、その文吾が養父としての愛情を注いだ娘が「おふり」であった。彼女は養父の仇を討つために、伊賀の忍びノ者となったのだが、左近がおふりと会う場面では、「うりざね顔のととのった目鼻だちは、しかるべき家系の血をひいていることを物語りながら、濃いまゆ、迫った眼、つんと高い鼻梁、くちびるの緊張感には、おいたちの境遇からもたらされたきびしさが見える」と、彼女の過去が暗示されてもいる。

おふりは左近を愛したことで、忍びのワザと男まさりの気性とで統率してきた輩下への絶対性が崩壊しかかる。その危機を、彼女はくノ一秘奥〈軍駒（いくさこま）〉で切り抜ける。こうした伊賀秘伝の忍びのワザの数々が紹介されていく面白さに加えて、忍びノ者たちの生きざま、掟などが、西軍の武将たちの生きざまと対比する形で描かれていく。

死ぬべき身を助けられた左近は、敗戦後の武将たちの運命と非情な世界に生きる忍者たちの運命の対比を通して、武辺いちずだった己れの過去に疑いの目を抱くようになっていく。おふりは、好きというだけで仲間の掟を曲げてまで左近に尽す。左近は、為政者によって作られた不条理な世の中の桎梏を切り捨てて、自由に生きている忍者を、侮蔑ではなしに眺められるようになった。おふりの情熱が左近を開眼させたところで物語は終わっている。

作者が西軍の武将たちの動向と敗戦直後の足どりを丹念に描き出していった狙いが、この左近の開眼からも明らかなものとなる。歴史の表面には出てこない忍びノ者たちの厳しい掟と生きざまが女忍おふりに象徴され、関ヶ原の合戦という大舞台を背景にとることで、それがより明確な形であらわれてくるのである。

一九九五年五月

（この作品は1965年12月東方社より刊行されました）

徳間文庫

忍法雪月花（にんぽうせつげつか）

© Mitsugu Saotome 1995

ISBN4-19-890327-1（乱丁、落丁本はお取りかえいたします）

1995年6月15日 初刷

著者 早乙女貢（さおとめみつぐ）

発行者 徳間康快（とくまやすよし）

発行所 株式会社徳間書店
東京都港区東新橋一―一〒一〇五
電話（〇三）三五七三・〇一一一（大代）
振替 〇〇一四〇―〇―四四三九二

印刷 凸版印刷株式会社

製本

〈編集担当 高田暁郎〉

造反
清水一行
社員の総スカンに大株主の不興。苦境に立たされた社長の抵抗。

最後の総会屋
大下英治
広島弁の威勢のいい奴が現れた。度胸と才覚で企業を牛耳れ！

会津若松からの死の便り
西村京太郎
覚醒剤密売に絡む殺人に、十津川警部怒りの拳銃が火を噴く！

長崎雨の港に死体が祈る
辻真先
時を越え、隠れキリシタンの伝承が死体とともに蘇った……。

愛欲岬
広山義慶
ふたつの死が二十年という時を経て、驚愕の糸で結ばれる！

下田子守り唄殺人
島田一男
お月さまいくつ……遠い昔に聞いた子守り唄が死へと誘う——。

南伊豆殺人行
草野唯雄
流行作家が殺された。鍵を握る女の陰に隠されたもう一つの事件。

雲仙阿蘇殺人旅愁
斎藤栄
連続殺人を結ぶ開発計画。地上げ屋を操る男の正体は——!?

徳間文庫の最新刊

罠のある季節
梶山季之
肉体を武器に取引先の部長はおろか、会社までをも翻弄する女専務。

強請屋稼業④ 飼育者
南英男
若い女たちをドラッグで飼い慣らす組織に立ち向かう見城の剛拳！

殺意の海図
勝目梓
甘美な毒の味を知った男は、その呪縛から逃れることはできない。

夜の河を渡れ
梁石日
やられたらやり返せ！血と暴力と怒りが乱反射する新宿血風録。

忍法雪月花
早乙女貢
天下を分ける豪雨の関ヶ原。戦場に倒れた左近を探す女忍おふり。

アジア達人旅行
下川裕治
格安航空券、安宿、ザックひとつ。旅はぶらりと……。

亜細亜看看
松本十徳
アジア各地の国境を歩いて十年。そこで見たアジアの実相……。

ヴェトナム ディープウォッチ
文 臣永正廣
写真 外山ひとみ
アジアの台風の目の実態を活写する迫真のカメラとルポルタージュ。